

伊吹町文化財調査報告書第11集

起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—姉川上流縄文早期・中期～晩期遺跡の調査—

1998.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書第11集

起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—姉川上流縄文早期・中期～晩期遺跡の調査—

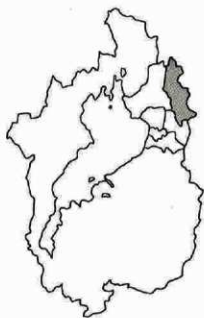
1998.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書第11集

おこしまた
起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—姉川上流縄文早期・中期～晩期遺跡の調査—



1998.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会



平成7年度調査区
(T4)



平成8年度調査区
(T5)

序

起し又遺跡は、姉川上流の山間部にあります。調査当初は、集落からさらに奥に入った谷間の別天地で、起し又川のせせらぎと、谷をわたる風の音しか聞こえない、豊かな自然に恵まれたところでした。かつて縄文人が通った県境の尾根が、手の届きそうな近いところにあります。初めて訪れた人は、いきなり谷が開き、棚田状の水田が山裾まで開かれた、天の広い起し又の地に驚きました。

そんな起し又も、現在では、姉川ダム建設によって付け替えられた二車線の県道が、大きくカーブして起し又川をまたぎ、トンネルによって奥伊吹と結ばれています。水田開発以外は、縄文時代からそのままのこっていたような起し又の空間は、全く変貌してしまいました。

本報告書は、団体営ほ場整備事業に伴う起し又遺跡発掘調査の結果をまとめたものです。調査の結果、滋賀県で最も古い時期の縄文土器をはじめとして、今から約四千年ほど前の縄文時代中期から後期にかけての土器や、県内の山間部で初めての住居跡などの遺構が発見されました。とりわけ、起し又の豊かな自然にはぐくまれた、中期末の派手やかな土器群は、地域性を主張するとともに、東西文化の接点としての当地域を如実に物語ります。伊吹山麓を中心にした県北東部の縄文文化のみならず、近江および隣接する美濃地方の縄文時代を考えるうえで有益な資料となるものと思われまます。

報告書の刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しまして、ご指導・ご協力を賜りました関係諸機関・各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が今後の歴史研究に多少なりとも資するところとなり、埋蔵文化財の保存と愛護に活用されるよう願うものです。今後ともよりいっそうのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

平成10年3月

伊吹町教育委員会

教育長 石河 竹二郎

目 次

| | |
|--------------------|----|
| 序 | |
| 例言 | |
| 凡例 | |
| 目次 | |
| 挿図目次 | |
| 表目次 | |
| 図版目次 | |
| 第1章 遺跡の環境 | |
| 第1節 自然環境 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 5 |
| 第2章 発掘調査の経過 | |
| 第1節 調査に至る経過 | 9 |
| 第2節 発掘調査の方法と経過 | 10 |
| 第3章 遺構と遺物 | |
| 第1節 層序 | 11 |
| 第2節 遺構 | 12 |
| 1. 住居跡 | 14 |
| 2. 土器埋設遺構 | 20 |
| 3. 配石遺構 | 26 |
| 4. その他の遺構 | 31 |
| 第3節 遺物 | |
| 1. 縄文土器 | 32 |
| イ、縄文土器の概要 | 32 |
| ロ、遺構から出土した土器 | 35 |
| ハ、包含層から出土した土器 | 69 |
| 2. 土製品 | 78 |
| 3. その他の土器 | 78 |
| 4. 石器類 | 79 |
| 第4章 まとめ | 96 |
| 第5章 | |
| 付論 起し又遺跡出土の石錘をめぐって | 99 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|----------------|----|------|---------------------------------|----|
| 第1図 | 遺跡周辺地形図 | 1 | 第35図 | 1号住居跡出土縄文土器(4) | 42 |
| 第2図 | 伊吹町の地質図 | 4 | 第36図 | 1号住居跡(5)・SX1出土縄文土器 | 44 |
| 第3図 | 町内の縄文遺跡分布図 | 6 | 第37図 | 2号住居・3号住居跡・4号住居跡(1) 出土縄文土器 | 46 |
| 第4図 | トレンチ配置図 | 9 | 第38図 | 4号住居跡(2)・5号住居跡・SX2(1) 出土縄文土器 | 48 |
| 第5図 | 土層断面図 | 10 | 第39図 | SX2(2)・SX3・SX4出土縄文土器 | 50 |
| 第6図 | 遺構平面図(T2) | 12 | 第40図 | 土坑(SK)出土縄文土器(1) | 52 |
| 第7図 | 遺構平面図(T4・T5) | 13 | 第41図 | 土坑(SK)出土縄文土器(2) | 54 |
| 第8図 | 1号住居跡 | 14 | 第42図 | 土坑(SK)出土縄文土器(3) | 56 |
| 第9図 | 1号住居跡(SH1) | 15 | 第43図 | 土坑(SK)出土縄文土器(4) | 58 |
| 第10図 | 2号住居跡(SH2) | 16 | 第44図 | ビット(P)出土縄文土器(1) | 60 |
| 第11図 | 3号住居跡(SH3) | 17 | 第45図 | ビット(P)出土縄文土器(2) | 62 |
| 第12図 | 3号住居跡 | 17 | 第46図 | ビット(P)出土縄文土器(3) | 64 |
| 第13図 | 4号住居跡(SH4) | 19 | 第47図 | ビット(P)出土縄文土器(4) | 66 |
| 第14図 | 5号住居跡(SH5) | 19 | 第48図 | 焼土・包含層(1)出土縄文土器 | 68 |
| 第15図 | 埋設土器遺構(SX1) | 20 | 第49図 | 包含層出土縄文土器(2) | 70 |
| 第16図 | 埋設土器(SX1) | 20 | 第50図 | 包含層出土縄文土器(3) | 72 |
| 第17図 | 埋設土器遺構(SX2) | 21 | 第51図 | 包含層出土縄文土器(4) | 74 |
| 第18図 | 埋設土器(SX2) | 21 | 第52図 | 包含層出土縄文土器(5) | 76 |
| 第19図 | 埋設土器遺構(SX4) | 22 | 第53図 | 包含層出土縄文土器(6) | 77 |
| 第20図 | 埋設土器(SX4) | 22 | 第54図 | 土製品・山茶碗 | 78 |
| 第21図 | 埋設土器遺構(SX3) | 23 | 第55図 | 石器(1) | 86 |
| 第22図 | 埋設土器遺構(SX5) | 23 | 第56図 | 石器(2) | 87 |
| 第23図 | 埋設土器(SX5) | 23 | 第57図 | 石器(3) | 88 |
| 第24図 | 埋設土器(SX6) | 24 | 第58図 | 石器(4) | 89 |
| 第25図 | 埋設土器遺構(SX6) | 25 | 第59図 | 石器(5) | 90 |
| 第26図 | SH1周辺礫群 | 27 | 第60図 | 石器(6) | 91 |
| 第27図 | 配石遺構1 | 28 | 第61図 | 石器(7) | 92 |
| 第28図 | 配石遺構2(立石) | 28 | 第62図 | 石器(8) | 93 |
| 第29図 | 配石遺構3 | 29 | 第63図 | 石器(9) | 94 |
| 第30図 | 配石遺構4 | 30 | 第64図 | 起し又遺跡出土石器組成 | 85 |
| 第31図 | SK17平面図 | 31 | | | |
| 第32図 | 1号住居跡出土縄文土器(1) | 36 | | | |
| 第33図 | 1号住居跡出土縄文土器(2) | 38 | | | |
| 第34図 | 1号住居跡出土縄文土器(3) | 40 | | | |

(付論)

第1図 滋賀県内遺跡位置図……………101

第2図 滋賀県内遺跡出土石錘重量別度数分布(1)……………101

第3図 滋賀県内遺跡出土石錘重量別度数分布(2)……………103

第4図 滋賀県内遺跡出土石錘重量別度数分布(3)……………104

第5図 遺跡位置図……………107

第6図 岐阜県内遺跡出土石錘重量別度数分布……………108

第7図 福井県・京都府内遺跡出土石錘重量別度数分布……………110

第8図 滋賀県内遺跡出土石錘重量別度数分布……………114

表 目 次

第1表 伊吹町内の縄文遺跡一覧…………… 8

第2表 石器観察表…………… 82

(付論)

第1表 滋賀県内主要縄文遺跡の石器組成一覧……………106

図 版 目 次

図版1 起し又遺跡遠景・調査前

図版2 作業風景・トレンチ2 1号住居跡

図版3 1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡

図版4 3号住居跡・4号住居跡・5号住居跡

図版5 埋設土器SX1・SX2

図版6 埋設土器SX3・SX4・SX5

図版7 埋設土器SX6

図版8 配石遺構1・立石

図版9 配石遺構3・配石遺構4・土器出土状況

図版10 土器出土状況・石器出土状況

図版11 埋設土器

図版12 包含層出土土器

図版13 SK17・P49出土土器・山茶碗

図版14 SH1出土土器1・2

図版15 SH1出土土器3・4

図版16 SH1出土土器5・6

図版17 SH1出土土器7・8

図版18 SH1出土土器9・10

図版19 SH2出土土器・SH3出土土器

図版20 SH4・SH5出土土器・SX1出土土器

図版21 SX2・SX3・SX4出土土器

図版22 SK1・2・4・5・8・9出土土器

図版23 SK17~23出土土器

図版24 SK24~26・28~31出土土器

図版25 SK32・33出土土器・P1~10・14~17出土土器

図版26 P20・22・24出土土器

図版27 P25~47・49~52出土土器

図版28 P54~59・60・62出土土器

図版29 SH1出土土器底部・焼土出土土器

図版30 包含層出土土器

図版31 包含層出土土器

図版32 包含層出土土器

図版33 包含層出土土器

図版34 土製品・石匙・石鏃・石器類・剥片

図版35 打製石斧・磨製石斧

図版36 石錘

図版37 石錘・石器

図版38 石器



第1図 遺跡周辺地形図 (左下図はS-1/25000)

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境

遺跡周辺の地形

滋賀県の東北端に位置する伊吹町は、東を中部圏に属す岐阜県不破郡関ヶ原町・揖斐郡春日村・坂内村に接し、北および西は滋賀県東浅井郡浅井町に、南は坂田郡山東町へと広がっている。東西7.0km、南北22.7kmで南北に長い地形をしており、北中部の集落は姉川沿いに点在し、南部および東部の集落は扇状地の扇尖部や扇端部に散在している。面積109.17km²の約85%を伊吹山地の山林がしめる。

伊吹山地は滋賀県下最高峰の伊吹山（標高1377m）を南端にして、北へ国見山（標高1126m）、虎子山（標高1183m）、ブンゲン（標高1259m）、貝月山（標高1234m）と連なり、さらに標高1000～1200mの稜線や峰が、金鷲岳（標高1317m）、土蔵岳（標高1008m）、から滋賀・福井・岐阜3県にまたがる三国岳（標高1209m）へと続く地塁性の山地である。三国岳から東へ走り、遠く越前・美濃国境の冠山（標高1257m）から能郷白山（標高1617m）へと続く越美山系に連なっている。伊吹山地は滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系の分水界をなし、県境となる。

町内を流れる河川は3つの水系に分けることができる。姉川水系は、伊吹山地新徳山（標高1067m）に源をもつ姉川が向山谷川、瀬戸谷川と甲津原で合流し、久保川（2.4km）、起し又川（5km）、足保川（6.2km）、板名古川（7.2km）、大富川（1.8km）などの支流を集めながら伊吹山系と七尾山系の中央部を南へ流れ、峡谷谷口を出たところで方向を大きく西に変え、坂田郡・東浅井郡・長浜市の水田を潤しながら、草野川、高時川等を合流して琵琶湖へ流れ込んでいる。源流付近の甲津原では、花崗岩の風化した砂が堆積し、川は砂をえぐって流れているが、起し又遺跡がある曲谷付近では、地質が姉川層の粘板岩や頁岩でできているため、上流の花崗岩地帯とは異なり、深いV字谷を刻みながら流れている。このように町内を20数kmにわたって南北に貫流する姉川流域および伊吹山地が、町の北中部をしめる。伊吹山南麓の天野川水系は、扇状地を流れる油里川（3.5km）、弥高川（5km）、政所川（4.2km）が扇端部の湧水を集めて天野川に合流し琵琶湖にそそぐ。これらの河川は、伊吹山南斜面の雨水を一挙に流し出し、石灰岩層と砂岩層の入り組んだ地層を流れることから、しばしば多くの土砂を流して天井川となり、水害をひきおこす。同じく藤古川は、町内6kmの間を伊吹山中腹の標高720mから一気に流れ下って溪谷を作り、途中で南東に流れを変えて、牧田川・揖斐川となって伊勢湾にそそぐ。県内のほとんどの河川が琵琶湖に流れる中で、唯一外に流れ出る河川である。

曲谷は、姉川の支流にある集落で、東西を伊吹山系の虎子山（標高1183m）と七尾山系の天吉寺山（標高918m）にはさまれた姉川溪谷左岸の谷底平野に立地している。集落中心部の標高は336mをはかる。南は甲賀・吉穂の集落に隣接し、北へ約6km、曲谷の地名の由来となる曲がりくねった姉川の溪谷をさかのぼると、姉川源流の集落甲津原に達する。甲津原から伊吹山系の新徳峰（標高947m）・品又峠（標高1049m）を越えると坂内村諸家や久瀬村日坂に、鳥越峠（標高1028m）を越えると坂内村広瀬へと通じる。近代まで、奥美濃の物資は、3つの峠を越えて甲津原・曲谷・

甲賀を経て、吉槻から七尾山系七曲峠（標高400m）を通り浅井町鍛冶屋へ、さらに湖北・敦賀へと運ばれていった。姉川上流峡谷部には、伊吹山付近を除いて美濃側へ8本、湖北・北陸への峠道も8本あり、関ヶ原-伊吹山麓部同様に東西文化交流の交点としての役割を果たしていた。このように峠で結ばれていた吉槻以北の4集落と南隣の上下板並は、昭和31年まで下流の姉川沿いの集落と郡を異にして、東浅井郡東草野村として七尾山系を隔てた草野川沿いの各集落（現浅井町上草野地区）と密接なつながりをもっていた。

起し又遺跡は、曲谷の集落から北東方向へ、起し又川を約750mほどさかのぼった谷間にある。東北方向から流れてきた起し又川は、ここで西に向きを変えるが、このあたりは山が開け、川の南側に北面して階段状の河岸段丘が広がっている。眼下に起し又川が流れ、四方を山に囲まれたこの段丘面に水田が開かれ、遺跡はその中間付近、標高430m前後の地点にある。

遺跡周辺の地質

伊吹山地の地質は、古生層の石灰岩相と非石灰岩相の2つに分けられる。石灰岩相は伊吹山と南西部の丘陵に分布している。非石灰岩相のうち足保川層群は、チャートで特色がある板名古川層など、伊吹山地以東の春日層群の地質や岩層によく似ている。板並層群は板並付近の姉川流域に分布する粘板岩層と、七尾山の山頂や山腹に分布するチャートおよび粘板岩層によって特色づけられる。起し又遺跡付近は、姉川層と呼ばれる粘板岩や頁岩で形成された地層で、川は深いV字谷を刻む。姉川層より北は、中生代の末頃に諸家花崗岩が貫入して、石灰岩層の北部で熱変成を受けた地層が見られる。この花崗岩層は、起し又川上流のサナギ谷などでもみられ、中世以降、これを原石として墓碑・石臼などの生産が曲谷集落でおこなわれている。

伊吹山地の自然

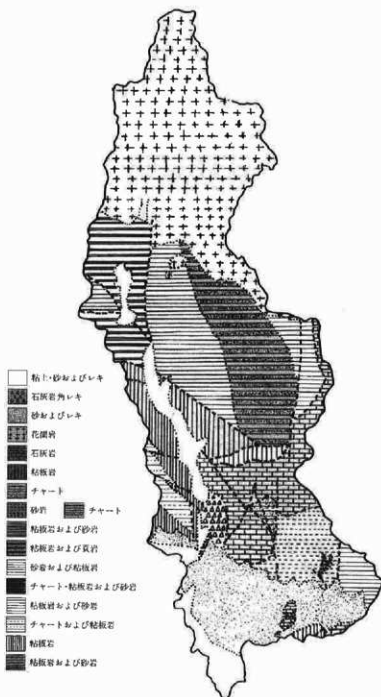
伊吹山付近は若狭湾と伊勢湾がせまってくる本州で最も狭い部分にあたり、まわりは中部山地と雲仙・鈴鹿山地、丹波山地に囲まれている。この最も狭い部分をめぐり、冬は若狭湾から北西の季節風が、夏は伊勢湾から南東の風が入ってくる。伊吹山地とその山麓を含む伊吹町の気候は、日本海側気候区北陸型に属すといわれ、気温が低く降水量が多いうえ特に冬季の積雪が多いことが特徴とされている。わずかに太平洋側気候区混在型といわれる気象状況を示すのは南西山麓地区の一部で、起し又遺跡がある町北部は、姉川沿いの山峡に位置することから日照時間が少なく、最高気温と最低気温の差が大きいばかりでなく、降雨・降雪量も多いため、県内屈指の豪雪地帯となっている。

姉川上流の甲津原や足保川・板名古川の上流には落葉樹を主とする自然林が広大な面積にわたって広がっている。町内では珍しいブナ林も残っている地域である。トチノキ・クリ・オニグルミ・ミズナラ・コナラ・カシ・シイ・バイ・ヤマモモなど木の実が食用となる樹木も多い。

また、伊吹山地には多くの生き物が生息している。ツキノワグマ・イノシシ・ホンシュウジカ・ニホンカモシカ・ニホンザル・ホンドギツネ・ホンドタヌキ・ノウサギ・イタチ・ムササビなどのほ乳類が生息しているほか、姉川水系は魚の種類も生息数も多かったようで、イワナ・アマゴ・カジカなどの溪流魚の他に、アユ・オイカワ・カワムツ・アカザ・アブラハヤ・ヨシノボ

リ・ウナギなどが見られる。

〈参考文献〉伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史 自然編』伊吹町1992



第2図 伊吹町の地質図

第2節 歴史的環境

伊吹山麓の遺跡群の研究史は、大正13年に中川泉三が杉沢遺跡出土の御物石器と磨製石斧や伊吹遺跡の石剣を「伊吹山下の石器」のなかで紹介したのに始まる。これは、明治以来、遺跡や遺物への関心が深い地元の方々により、勝居神社周辺を中心に石器など多くの遺物が採集・保管されていた事実が前提になっていたものと思われる。昭和3年には、島田貞彦が「有史以前の近江」を報告し、杉沢遺跡の石器13点を掲載しているほか、中川も「坂田郡春照村辻村義男邸出土の石斧と弥生式土器」を発表している。引き続き昭和11年に『滋賀縣史蹟名勝天然記念物概要』のなかで杉沢遺跡を取り上げている。このような気運の中、昭和13年に小林行雄らにより、坂田郡内で初めての発掘調査がおこなわれた。ごく一部の調査であるにもかかわらず、2組の縄文時代晩期後半の合口甕棺が発見され、「近江坂田郡春照村杉沢遺蹟」のなかで、縄文時代の葬法の一つとして広く紹介された。

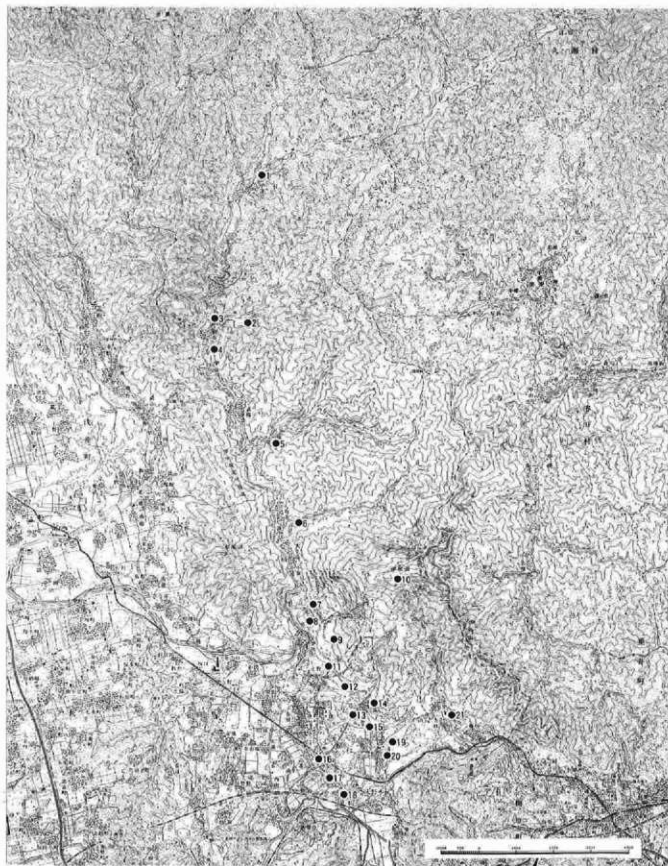
このように、杉沢遺跡を核として、比較的早くから取り組まれてきた山麓の考古学研究は、『改訂近江國坂田郡志』の編纂に集大成される。石器時代を扱った、「有史以前の遺蹟遺物」では、町内の出土遺物として上平寺、大清水、高番、杉沢、村木、小泉小字奥泉、太平寺、上野などの伊吹山麓の各遺跡や伊吹山頂遺跡などを取り上げ、採集された石器を詳しく解説している。なかでも、杉沢遺跡についてはこれまでに採集された多数の石器の採集地点を地図上に記載し、発掘調査の成果を取り入れ、遺跡の解明をはかろうとしている。

この『坂田郡志』を最良の手引き書として、以後も引き続き遺跡調査が進み、昭和63年のほ場整備事業に先立って杉沢遺跡発掘調査をはじめとする発掘調査と、平成元年から平成3年までの詳細分布調査をはじめ、地元の方の表面採集などを含めると、伊吹町内では、現在21カ所の縄文遺跡を確認している（第3図、第1表）。しかし、発掘調査をおこなった遺跡はわずかで、多くが数点の石器が採集されているにすぎず、その正確な位置さえわからない遺跡も多い。

上野の人塚遺跡では、旧石器時代に属すと考えられる木の葉形尖頭器が採集されている。これが伊吹町内で最古の遺物である。縄文時代早期には、山間部の起し又遺跡でキャンプサイト的な生活が営まれはじめたようで、わずかではあるが高山寺式や穂谷式などの押型文土器が出土している。また、山麓の東野遺跡では、押型文土器終末期に出土する異形部分磨製石器とよばれる特殊な石器が採集されている。

前期に属す遺跡や遺物は発見されていない。

中期の土器を出土している遺跡は5遺跡確認されており、伊吹山麓や山間部で最も活発に縄文人が活躍した時期である。山間部の起し又遺跡では、第3章で述べるとおり中期末から後期初頭にかけての住居跡5棟と配石遺構などを確認し、中期初頭船元Ⅱ式土器にはじまり後期初頭まで継続する土器群が出土した。また、起し又遺跡からさらに4kmさかのぼった甲津原で中期末の土器片が採集されている。源流甲津原から渓谷を作りながら約20km流れ下った姉川が、流れを西に変える谷口の左岸段丘上に伊吹遺跡があり、ここから出土したという船元式土器片1点が「有史以前の近江」に紹介されている。今後の調査がさらに進めば、姉川渓谷部の段丘上ではさらにこの時期の遺跡の発見が期待される。山麓の政所川右岸に立地する井の田遺跡では、ほ場整備中



第3図 町内の縄文遺跡分布図

中期後半の東海系土器群が、一部瀬戸内系土器、在地系土器を伴って出土した。打製石斧、磨石、黒曜石片、石棒も出土している。また、大清水遺跡では中期のものと思われる大型の石棒があるが、正確な遺跡の位置については明らかでない。湖北の晩期遺跡を代表する杉沢遺跡でも、一部この時期に遺跡が営まれているようで、L線部に渦巻き沈線をもつものや、沈線間に刺突をもつ中期後葉的な土器があり、また、大清水遺跡同様の大型石棒が墓石に転用された形で発見されている。

後期の土器を出土した遺跡は4遺跡である。起し又遺跡では引き続き集落が営まれている。配石遺構もこの時期の初頭に属す可能性があり、6基の埋設土器には中津式系の七器がみられ、後期初頭のものと考えられる。今回の調査区では、中津式以降、後期末の宮滝式までみられ、約20m谷側の平成4年度調査区では、中津式に続く福田KⅡ式・北白川上層式・元住吉山式など後期中葉までの継続した土器群が出土している。これは遺跡内で生活の拠点が移動した結果と思われる。起し又遺跡から直線にして約4km姉川を下った、山間部の足伏川合流点に内座遺跡がある。平成6年の発掘調査で、二次堆積土中から少量の縄文土器片が出土した。集落は、後期前半の中津Ⅱ式段階にはじまり、北白川上層Ⅱ式類似や一乗寺K式あるいは元住吉山式相当の土器が出土していることから、後期後葉まで認められる。山麓では、井の田遺跡で、北白川上層式や平行する北陸系の後期中葉から後葉の土器が認められるほか、杉沢遺跡でも後期の土器が見られる。

晩期は、姉川上流山間部では起し又遺跡、内座遺跡で微量の突帯文土器が出土しているほか、伊吹遺跡出土の剣を模した石刀はこの時期のものと考えられている。一方、山麓では拠点集落として杉沢遺跡が営まれる。住居跡は見つかっていないが、現在まで9組の土器棺墓が出土しており、大規模な墓域を形成していたことがわかる。土器棺の年代は晩期終末期にあるが、昭和63年の調査では、場所を現集落の南端に移して晩期前半の土器群（滋賀Ⅱ式並行期）が出土している。また、晩期特有の石器である御物石器や、多頭石斧、小型の石棒や石刀などもこの時期のものであろう。

弥生時代の遺跡は、姉川渓谷部の小泉遺跡、姉川が平野部に出たところの台地上にある岩ノ上遺跡、伊吹山麓の弥高川扇状地に立地する堂ノ前遺跡、その下流の高番遺跡および杉沢遺跡、政所川左岸の井の田遺跡があるが、いずれもわずかな遺物が採集されているだけで、遺跡の性格等ははっきりしない。

古墳は、大清水の岩館山山頂に円墳があったといわれ、伊吹山麓上野の人塚、耳塚は石室の一部がむき出しており、6世紀代の古墳である可能性が高い。その他、この時期の集落等については調査例もなく、わずかに高番遺跡などの調査で遺物が出土したのみである。

〔引用・参考文献〕伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史 通史編上』伊吹町1997

第1表 伊吹町内の縄文遺跡一覧

| No | 遺跡名 | 旧石器 | 縄文時代 | | | | | | 弥生 | 出土遺物・遺構 | 発掘調査 | 所在地 |
|----|--------|-----|------|----|----|----|----|----|--|-------------------|------|-----|
| | | | 草創期 | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 | | | | |
| 1 | 西山 | | | | | △ | | | ・中期木の土器片表面採集 ・他に集落内で磨製石斧、石皿採集 | 未調査 | 甲津原 | |
| 2 | 起し又 | | △ | | ◎ | ◎ | △ | | ・中期末～後期初頭が中心 ・切目石錘を中心に石器90点出土 ・竪穴住居跡5棟、埋設土器、配石 | 平成4、6 7、8年調査 | 曲谷 | |
| 3 | ムカイラ | | | | | | | | ・土器小破片出土（時期不明） | 平成5年試掘 | 曲谷 | |
| 4 | 大平(安場) | | | | | | | | ・縄文土器片が採集されたと伝える | 未調査 | 甲賀 | |
| 5 | 内座 | | | | | | ○ | △ | ・後期の縄文土器片が押し流された状態で出土 | 平成6年調査 | 上板並 | |
| 6 | 長谷 | | | | | | | | ・磨製石斧 | 未調査 | 下板並 | |
| 7 | 峠平 | | | | | | | | ・小型磨製石斧表面採集 | 未調査 | 小泉 | |
| 8 | 伊吹 | | | | △ | | | △ | ・中期船元式土器1点 ・剣を模した装飾のある石剣 | 未調査 | 小泉 | |
| 9 | 太平寺 | | | | | | | | ・磨製石斧 | 未調査 | 太平寺 | |
| 10 | 伊吹山頂 | | | | | | | | ・石鏃、石匙、剥片 | 未調査 | 上野 | |
| 11 | 上野 | | | | | | | | ・磨製石斧 | 未調査 | 上野 | |
| 12 | 人塚 | △ | | | | | | | ・尖頭器 | 平成9年試掘 | 上野 | |
| 13 | 野頭 | | | | | | | | ・石鏃、石斧 | 未調査 | 上野 | |
| 14 | 堂ノ前 | | | | | | | △ | ・石鏃、弥生土器 | 未調査 | 弥高 | |
| 15 | 東野 | | △ | | | | | | ・異形部分磨製石器、石鏃、石匙 | 未調査 | 弥高 | |
| 16 | 高番 | | | | | | | △ | ・叩き石、石斧、石鏃、石棒、勾玉 ・弥生～平安中期の土器、遺構 | 平成2、3年発掘 | 高番 | |
| 17 | 杉沢 | | | | △ | △ | ◎ | | ・晩期前半および後半の土器 ・合口甕棺9基 ・磨製石斧等石器多数 | 昭和63年 平成3、7年発掘 | 杉沢 | |
| 18 | 村木 | | | | | | | | ・石斧、石棒 | 未調査 | 村木 | |
| 19 | 井の田 | | | | | ○ | △ | | ・東海系の土器群 ・打製石斧、石棒、黒曜石剥片 | 平成元年表探 | 大清水 | |
| 20 | 大清水 | | | | | | | | ・石棒 | 未調査 | 大清水 | |
| 21 | 上平畑 | | | | | | | | ・磨製石斧 | 未調査 | 上平寺 | |

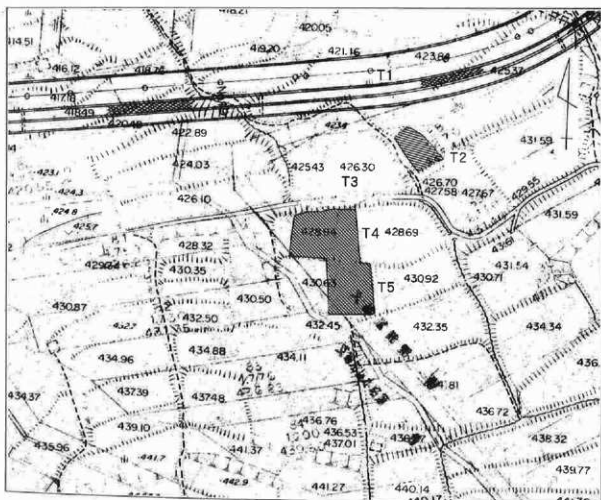
◎多い ○少ない △微量

第2章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

今回調査をおこなった起し又遺跡は、平成3年におこなった伊吹町内遺跡詳細分布調査（東草野地区）で縄文遺跡と確認したもので、縄文時代後期の縁帯文土器片などを調査地周辺の水田で表面採集した。遺跡を発見しにくいこのような山間部で確認することができたのは、起し又地区に壬申の乱に関連する言い伝えがあり、また、過去に土器出土の報告があったため、詳細な調査をおこなった結果であった。平成4年には、姉川治水ダム建設に伴う県道山東北線付け替え工事に先だて、現在の調査区の北隣で発掘調査をおこなった（T1）。調査の結果、遺構は11個のピットと落ち込み状遺構を検出しただけであったが、早期および中期初頭から後期中葉の上器片が出土したことから、遺跡のおおよその年代観をつかむことができた。また、早期押型文土器の出土で町内最古の遺跡であることが判明し、飛騨地方の土器が出土したことから東日本との交流が予想できたことなど、今回の調査につながる試行的調査となった。

今般、団体営ほ場整備事業が計画され、起し又遺跡で事前に発掘調査の必要性が生じた。調査は、伊吹町の依頼により伊吹町教育委員会が実施し、現地調査は試掘調査の結果に基づいて調査を3つに分け、平成6年10月18日より12月1日、平成7年5月24日より8月3日、平成8年5月16日より7月18日までおこなった。



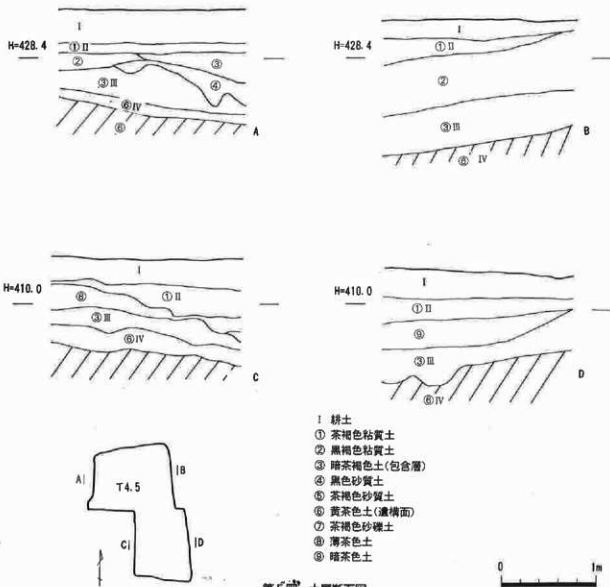
第4図 トレンチ配置図 (S=1/1000)

第2節 発掘調査の方法と経過

調査は、ほ場整備事業地区内において、起し又遺跡の周知の範囲を中心に、県道より山側の上起し又地区全域を対象として試掘調査を実施した。試掘調査は、平成6年10月18日より10月24日におこなった。0.4㎡級バックホーで約2m×3mのトレンチを20～25m間隔で46カ所設定して、遺構と遺物の有無について確認した。

試掘調査の結果、5ヶ所のトレンチにおいて縄文土器片が出土した。試掘調査から遺跡の面積はおよそ2750㎡と推定される。これらの結果に基づいて協議をおこない、工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲を発掘調査し、資料の記録保存化をはかった。

調査区は、標高約430m前後の地点にあり、谷底の起し又川に落ちる段丘状の地形の中間付近、傾斜がやや緩やかになったところに位置している。発掘調査は総面積837.5㎡で、現地調査は、0.4㎡級バックホーを用いた表土掘削のあと、人力による遺構検出、遺構内掘削をおこない、遺物の検出、写真撮影、平面図の作成等をおこなった。平成7年7月31日、平成8年7月10日には、遺構全面の空中写真測量をおこなった。



第5図 土層断面図

第3章 遺構と遺物

第1節 層序

本遺跡は、起し又川左岸段丘上に立地している。

現地表面は、南東側が山に接して高く、北西側は起し又川の谷に向かって低くなっている。調査区の山側で標高約431m、谷側で標高約425mをはかり、平成4年度の調査区を含めた遺跡のレベル差は約7mである。水田は段丘斜面を切り盛りして開墾されたようで、T4北隣のT3では、縄文時代の遺構面が削り取られて、耕土を剥ぐと地山があらわれた。

基本的な層序は第I層より第IV層まで区分される。耕作土である表土第I層が約20～30cmあり、その下には、造成時の埋土（第II層）が堆積していた。この層は、田面をフラットにするために山側に厚く谷側では約70cm前後堆積して土手を形成する。遺物包含層（第III層）は約30～50cmあり、T3では水田造成時に削平されていた。T2では、包含層上層に含まれる土器は細片が多く、下面の土器は拳大から幼児大の礫と混在していた。粘質の土質であるが山からの崩落層と思われる。T4・5の遺物包含層は比較的安定している。遺構面を形成する第IV層は、山側のT4・5でやや緩やかになっていて住居跡などの生活面が検出できた。ここからT2および平成4年度調査区に落ち込んでいく。

以下、各土層の概略を記す。

第I層 耕土。しまりはあるが粘性は少ない。場所により攪乱による土器を含む。黒褐色土。

第II層 1～5cm大の石を多く含む。茶褐色粘質土。10～25cm。

第III層 暗茶褐色土。上層の黒色が濃い層と同色で拳大の礫を含む中間層と、茶褐色土層の3層に細分される。いずれも粘性があり、中間の層に比較的多くの土器が含まれる。20～45cm。

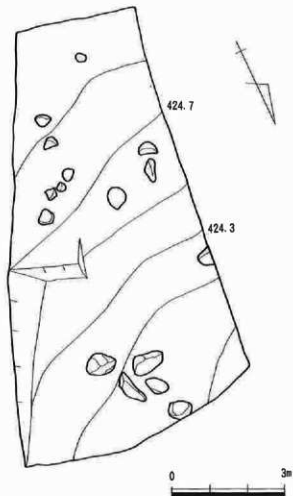
第IV層 黄茶色土。しまり、粘性ともにあり、小石を多く含む。

第2節 遺構

遺構面は南東から北東へ傾斜しており平坦地はほとんどない。住居跡などを検出したT4・5は約7度程度の傾斜があった。確認された遺構はほとんどが縄文時代に属するものと考えられる。主な遺構は、竪穴住居跡5棟、埋設土器6基、配石遺構、土坑・ピット57基（縄文時代の遺物が出土した土坑・ピット）である。

5軒の住居跡のうち、SH1・SH4は平面形や規模が確認できた。SH2・SH3は、炉跡をもつて住居跡と確認できるが、平面形は明確でなく、住居に伴う柱穴もはっきりしない。SH5は浅いくぼみをもつのみで、その内容は明らかでない。埋設土器は主に住居に隣接して検出した。いずれも正位で埋設されており、SX1・SX3・SX6の土器は底部に穴がつけられていた。また、土器内部に石が入っているものや立石が伴っているものがみられた。

本遺構より検出した遺構について、住居跡、土器埋設遺構、配石遺構、その他の遺構の順で述べていく。



第6図 遺構平面図 (T2)



第7図 遺構平面図 (T4・T5)

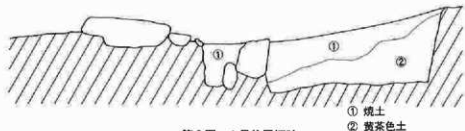
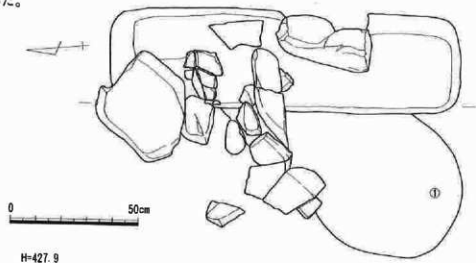
1. 住居跡

1号住居跡 (SH1)

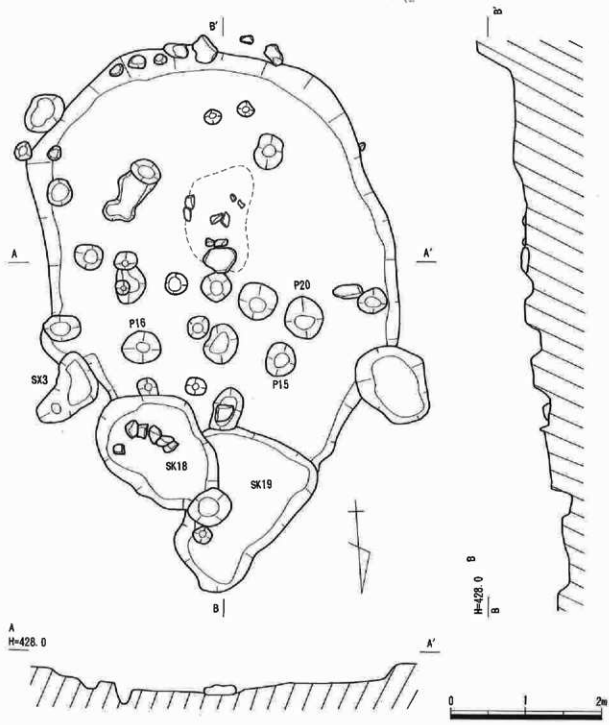
SH1は調査区中央付近で検出された。遺物包含層である暗茶褐色土を掘削していくと、第IV層に掘り込まれた黒色土の楕円形プランを確認した。住居跡の覆土は少量の小角礫をふくむ黒色粘質土で、木炭の小片がわずかに混っていた。覆土の中央から山側を中心に縄文中期および後期の土器片と石斧2点、小型石斧1点、石鏟3点など出土した。セクションベルトを残しながら掘り下げると、山(南)側の壁際付近から中央にかけての部分で、遺構面の直上に赤く焼けた土が堆積していた。これを取り去ると中央付近から炉を検出した。

完掘後のSH1の平面形は、おおよそ東西約4.5m、南北約5.5mの楕円形をしており、中央に石囲炉が組まれている。遺跡は傾斜地に営まれているので、山(南)側の壁の立ち上がりは深いところで約50cm認められたが、地山面が北に傾斜している谷側では、地山への掘り込みが約15cmとわずかで、もっとも谷側には直径1.5m、深さ約35cmの楕円形土坑(SK18)と、これに切られた不定形の土坑(SK19)があり住居のプランは判然としない。後述するSH2とSH4にも谷側に繋いで土坑がある。SK18・19は住居跡に伴うものかもしれない。

石囲炉の規模は、残っていた石と炭や焼土を多く含む掘り込みから長径約80cm、短径約70cm、深さ約30cmの長方形をしていたものと推定される。平らな面を持つ焼けた石が北側および東西の一部に数個ずつ組まれていたが、南側と西の残りの部分には石がなかった。また、内部を2つに仕切るように、強い熱をうけて割れた石が平らな面を両側にして立てられていたことから、複式炉であった可能性も考えられる。炉の北に隣接して石皿と思われる直径約40cmの扁平な石が置かれていた。



第8図 1号住居炉跡



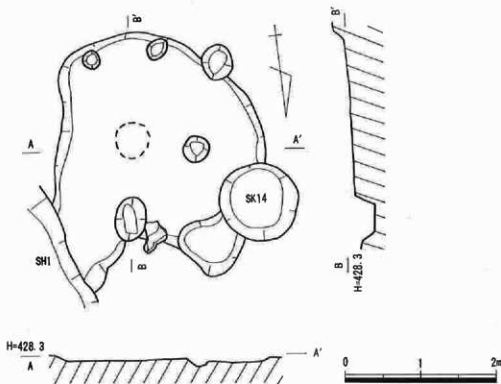
第9圖 1号住居跡 (SH1)

ピットは床面で23カ所、山側壁面で3カ所確認したが、このうちP15・16・20などが主柱穴と考えられ、その大きさは、径約35～50cm、深さ約20～60cmである。また、壁際の3基はいずれも中央に向かって斜めにうがたれており、住居の建造物に伴うものと考えられる。竪穴の北東端に土坑SX3があり、穿孔された深鉢形土器の底部が正位で検出された。

SH1の時期については、床面直上から検出した土器から中期末と考えられる。

2号住居跡 (SH2)

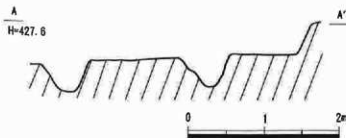
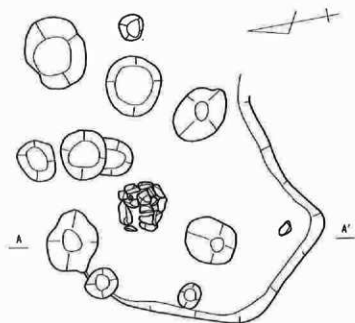
SH1の南西に接して位置している。両者の関係はSH2をSH1が切っていると思われる。遺物包含層の掘削中に、南北に約1.7m並んだような状態の石列と、途中から分かれて北東方向に向かう石列を検出した(配石遺構3)。SH2は、この石列を残しながら掘り上げて検出した住居跡で、径約2.7mの円形プランを呈するが、竪穴の掘り込みは15cm前後と浅く、谷側ははっきりしない。中央に焼土が堆積しており炉跡と推定されるが残りが悪く明確ではない。この焼土層の上には風化した直径約40cmの扁平な花崗岩が置かれていたが、先の石列に伴うものと思われる。床面で4カ所のピットを検出したが、主柱穴と思われるのは炉西側1基である。竪穴の北西端には直径約1m深さ約40cmの円形土坑(SK14)がある。出土した土器から中期末と考えられる。



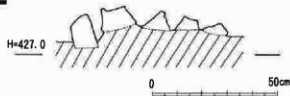
第10図 2号住居跡 (SH2)

3号住居跡 (SH3)

SH3はSH1の北西に約1m離れて営まれている。第IV層を掘り込んで作られているが、遺構検出時にはプランが不明確だったために不定形の落ち込みとして掘削していた。しかし、石囲炉が出土したために住居跡と判断した。竪穴はSH1と同じように山側で約45cmの壁面を持つものの、谷側では地山面の掘り込みがほとんどなく平面プランははっきりしない。炉がSH1のように中央付近にあったと仮定すると3m前後の南北に長い楕円形の住居跡になる。炉跡を取り囲むように5つの土坑を検出したが、いずれも直径約50~60cm、深さ約22~40cmで他の住居跡の柱穴と較べると大きい。石囲炉は8個の平らな面を持つ角礫を立てて約70×65cm、深さ約17cmの五角形をしている。検出時には炉内東半分にも石が充填されていたが、強い熱をうけて割れているような石はなかった。床面の西南端で無文土器の胴部がつぶれた状態で出土した。その他、覆土や土坑内の土器から中期末の住居と考えられる。



第11図 3号住居跡 (SH3)



第12図 3号住居炉跡

4号住居跡 (SH4)

SH4とSH5は平成8年度の調査区で確認した住居跡で、SH4はSH1から東南山側へ約6.5m離れて営まれている。第IV層を掘り込んで作られており、土器を含む黒色粘質土で覆われている。住居跡の中央付近には焼土があり炉跡と考えられる。また、中央から南側にかけては踏み固められたような締まった床面になっていた。

発掘後の平面形は、おおそ東西約3m、南北3.5mの隅丸方形を呈している。山(南)側の壁の立ち上がりは約30~40cm認められる。谷側は地山面の掘り込みがみられないが、SH1同様、北東端に竪穴に接して土坑SK33がある。SK33は径約1m、深さ約50cmで穴際に3個の石が置かれていた。

炉跡と考えた焼土には若干の炭が混じっており、焼土跡に接して作業台と考えられる30cm前後の河原石が平らな面を上にして設置されていた。SH1やSH3のような石囲いの炉は検出されなかった。

ピットは床面で12個確認した。径約20cm前後、深さ約10~15cmと径約40cm、深さ約25~55cmの2種類がある。支柱穴ははっきりしないが、P63は径約70cm前後の楕円形の大型ピットで、底に約35×25cmの扁平な河原石が設置されており、柱を支える根石と考えられる。また、SH4から北へ約1.5m離れた地点で、底部穿孔の深鉢形土器(SX1)が立石を伴って埋設されていた。後期の中津式土器が埋設された集石遺構SX6もSH4の西2mに位置している。

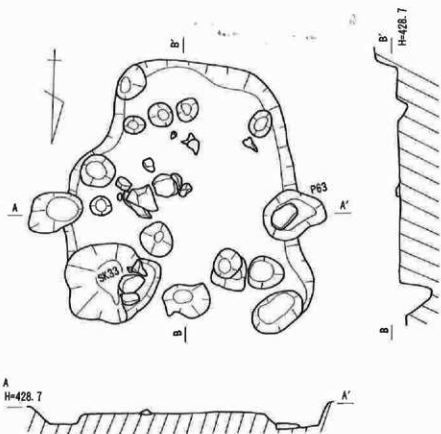
この住居の時期は、中期末から後期初頭のものと考えられる。

5号住居跡 (SH5)

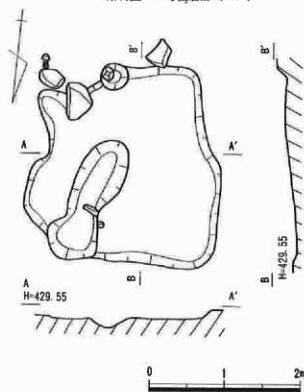
SH4の南西山側約2mのところまに位置している。約2.5×2.5mのおおむね隅丸方形をしめす竪穴である。3~5cmの掘り込みが四周を回っているが、内部からは炉跡や柱穴は検出されなかった。北東方向から中央にかけて溝状の浅い落ち込みがある。

出土した土器も少なく、住居になるかどうかとも判断としないが、他の4軒と同一時期のものと考えられる。

西へ約60cmのところまに中津式土器を埋設した遺構(SX5)を検出した。



第13图 4号住居跡 (SH4)



第14图 5号住居跡 (SH5)

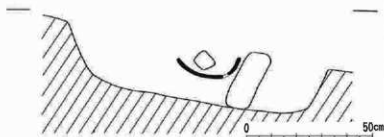
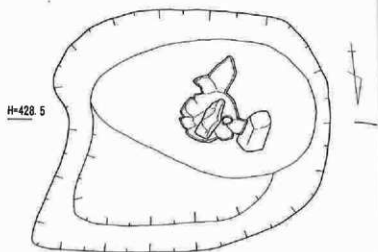


2. 埋設土器

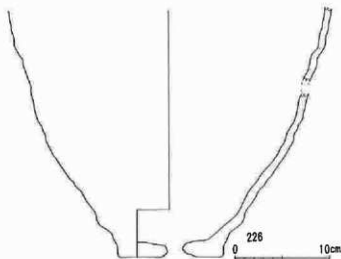
土器を埋設した遺構は、あわせて6基検出した。住居跡や配石遺構と共存する可能性のあるものも含まれるが、ここでは土器埋設遺構として説明する。

SX1 (第15・16図、図版5・11)

住居跡SH4の約1.5m北で検出した。第IV層を掘り込んだ約1.1×1m、深さ約20cmのほぼ楕円形の土坑で、中央付近から深鉢の胴部がやや傾いた正位の状態に埋め込まれていた。田面の直下に当たることから、上半部は耕作により掘削されているものと考えられる。土器の底部は直径3cmほどの穴が開けられていた。また、土器内から長さ約18cm、幅約7cmの棒状の河原石が落ち込んだ状態で出土した。土器の西側側面に接して、長さ約25cm、幅約10cmの四角柱の砂岩質の石が添えられたような状態で検出した。この石は全面が磨られており叩いて凹んだ痕跡がみられた。おそらく石皿や砥石として用いられたものが土器の埋設に伴って二次利用されたものと考えられる。復元した土器(226)は口縁部を欠いており、底部約11cm、残存高26cmの無文土器(C14群土器A類)である。他に土坑内から出土した土器片は黒色粘質の埋土に含まれたものであり、埋設土器に伴うものはなかった。



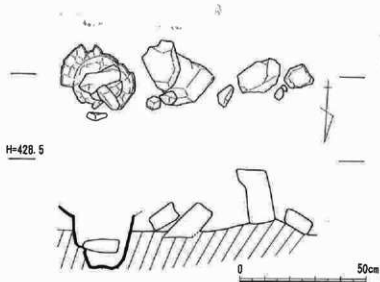
第15図 埋設土器遺構 (SX1)



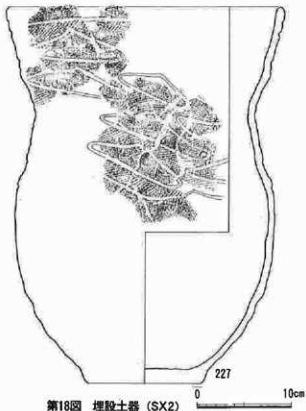
第16図 埋設土器 (SX1)

SX2 (第17・18図、図版5・11)

SX1 から約3m北に位置している。南北約2.4m、最大幅約1mの細長い土坑(SK2)の北端から検出した深鉢形土器で、口縁部を残して正位に埋設されていた。土器内からは長さ約17cm、幅約7cmの棒状の石のほか4個の石が出土した。底部穿孔はみられなかった。調査時の掘削で口縁部が遺構面より大きく出ているが、本来は遺構面直下に埋設されていたものと思われる。埋設土器に接するように西側の遺構面に7個の角礫が直線上に並び、なかに滑らかな石の面をもつ立石もみられたが、土器に共存するものかどうかはわからない。これより西に土坑内の立石や半円形の配石遺構がみられることから、何らかの意図があるものと考えられる。土器(227)は今回の調査で完形に復元できた数少ないもので、口縁部から胴部にかけての帯状文様帯に三角形の窓を連続に開けた磨り消し縄文をもつ、口径約29.5cm、底部径約12cm、高さ約39.7cmのキャリパー状深鉢で、後期初頭の中津Ⅱ式土器の変容したもので、K1群に属す。



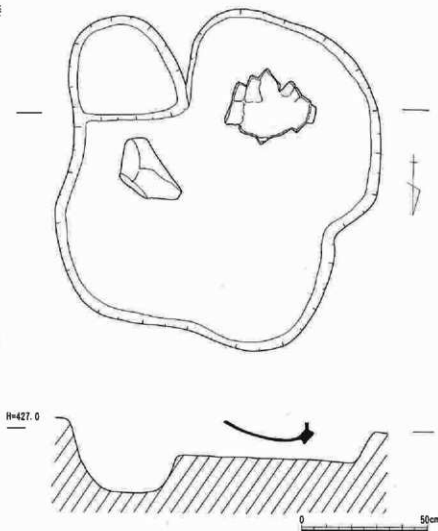
第17図 埋設土器遺構 (SX2)



第18図 埋設土器 (SX2)

SX3 (第21図、図版6・11)

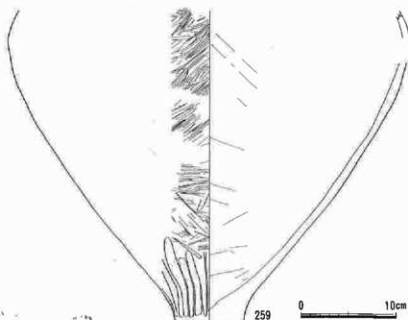
住居跡SH1の北東端に接する土坑で、東西約80cm、最大幅約55cmの洋梨形をしている。中央やや南よりに深鉢形土器の底部が正位に置かれていた。底部はSX1同様4cm大の穴が開けられていた。土器から約10cm離れて長さ約20cm、幅約7cmの棒状の河原石が倒れていたが、おそらくSX1のように土器に接して置かれていたものかもしれない。この土坑には直径約15cm、深さ約20cmのピットが北東端にある。底部穿孔の埋葬に伴う墓標の柱穴かもしれない。土器(252、第39図)は底部径約9.3cm、残存高約7.5cmを残すのみで、文様は明らかではない。底部穿孔、柱状の石が土器に接して残っていることからSX1に類似する。



SX4 (第19・20図、図版6・11)

SH1の北約2mのところ検出した南北140cm、東西120cm、深さ約15cmの浅い土坑内に深鉢形土器が横たわった状態で出土した。上半分は後世の攪乱によって失われたものと考えられる。同じ土坑内の北東約30cm離れたところに割れた大型の石皿(第63図、87)が出土している。復元した土器(259)は底部径7.4cm、残存高32.7cmの無文の深鉢形土器(C14群A類)である。

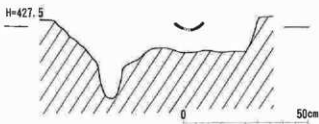
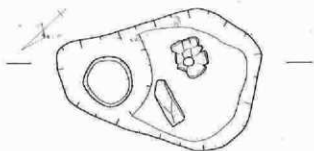
第19図 埋設土器遺構 (SX4)



第20図 埋設土器 (SX4)

SX5 (第22・23図、図版6・11)

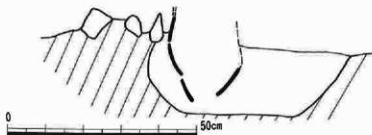
住居跡SH5の西側に隣接している。SH5の掘り方から約80cm離れた、南北約40cm、東西75cm、深さ約22cmの楕円形土坑の北端で深鉢形土器が検出された。土器は第IV層を掘り込んで胴部が正位に埋設されており、口縁部は攪乱によって失われたものと思われる。また、底部の穿孔はみられなかった。土器内部の土は薄茶褐色の粘質土で、中から4cm位の角礫が数個含まれていた。土器の北側に接して、遺構面上で2列に並んだような8個の角礫を検出した。これらの石には特に目立った特徴はみられなかった。復元した土器(278)は、胴部に磨り消し縄文を持つ底径9cm、残存高18cmの深鉢形土器で、後期初頭の中津式土器(K1群)に属するものと判断される。



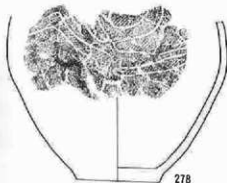
第21図 埋設土器遺構 (SX3)



H=429.65



第22図 埋設土器遺構 (SX5)



278

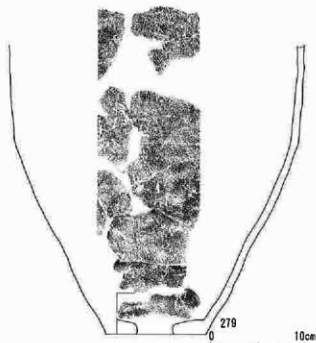


第23図 埋設土器 (SX5)

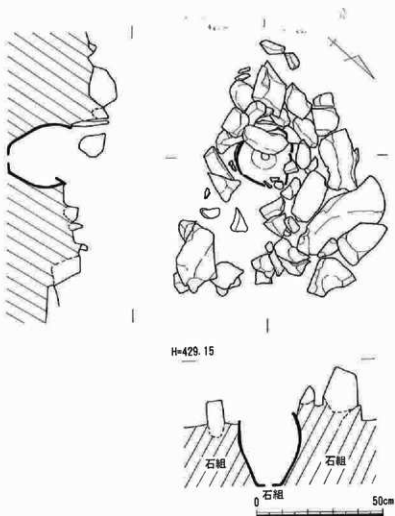
0 10cm

SX6 (第24・25図、図版7・11)

住居跡SH4の西約2m、SH5から北へ約2mの地点で検出された。遺構面に約5~40cm大の礫が径約1mの半円形に集めた状態で検出された。この配石遺構の上場の石をはずしていくと、中央西よりに深鉢形土器がほぼ正位の状態で見出されているのを検出した。本遺構は、他の埋設土器遺構と異なり土器は袋状の石組遺構にすっぽりと取まった状態で出土した。石組遺構内は、口の部分で幅約35cm、深さ約40cmをはかる。掘り形は明瞭ではないがわずかに西側で黒色土層が認められることから、石組遺構よりやや大きい掘り形内に組まれたものと考えられる。石組の石は埋設土器の器形に沿って密着した状態で組まれていることから、まず、掘り形内に扁平な石を組んで台石とし、その上に土器を安置し周りに石を組んでいくという方法がとられ、埋設したうえで地表面に円形の配石を置いたものと考えられる。土器内および配石遺構内や掘り形から若干の炭を検出した。配石遺構は、南西にも広がっているようで、残存する石から直径1mの円形を呈する可能性がある。配石や石組に使われた石の中に、磨ったり叩いたり焼けた痕跡のあるものはみられなかった。土器(279)は、粗製の深鉢(C14群A類)で口縁部近くにひび割れに対する補修孔が認められる。底部径約11cm、高さ約32cmをはかる。



第24図 埋設土器(SX6)



第25圖 埋設土器遺構 (SX6)

3. 配石遺構群

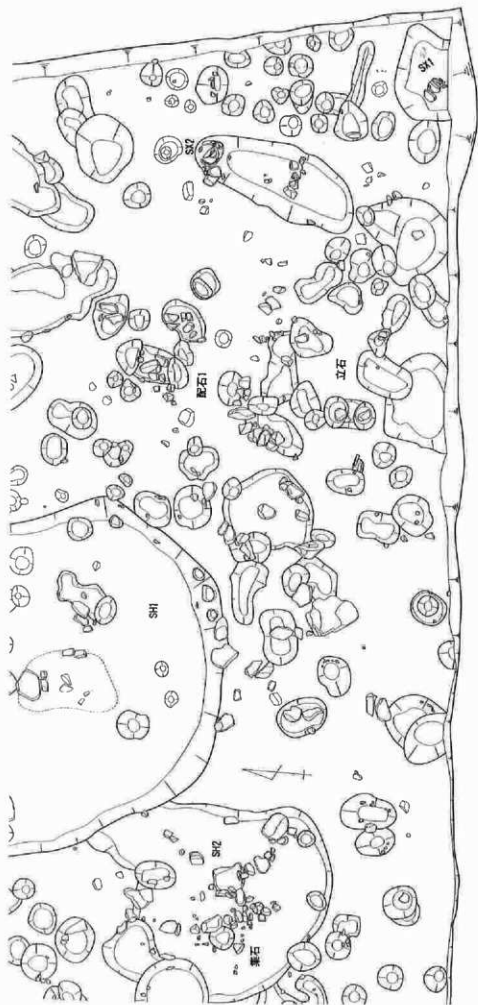
意図的に石を配したと思われるものや、その可能性がある遺構を含む礫が集中している区域を配石遺構群として報告する。今回の調査では調査区の中央付近、ちょうど平成7年調査区(T4)と平成8年調査区(T5)にまたがって多くの礫を検出した。特に住居跡SH1の山(南)側に集中して分布しており、他に住居跡SH2の覆土上や住居跡SH4の西側、SH5の東側でも径40cmの石皿と思われる石を中心に礫が集中している遺構が検出されている。埋設土器として報告したSX2やSX5に接して並べられた可能性のある石や、特殊な石組遺構SX6の上を覆っていた半円形の配石もこの配石遺構群のなかに含まれる。また、やや離れているが、SH1の北側で検出したSX4も、割れた石皿を伴っていることを考えると配石土坑としてとらえることができる。

ここでは、石を意図的に並べた可能性のある遺構や、土坑の掘り形に沿って石が並べられた配石土坑、ピット内の立石などを広い意味で配石遺構ととらえて報告する。これらの遺構群は、住居跡SH1よりは、やや新しく中期末から後期初頭に属するものと思われる。

配石遺構1 (第27図、図版8)

住居跡SH1の南側に集中する礫は約100個あり、大きさは約5cm~40cmとさまざまである。この礫群の範囲は南北約5m、東西約8mをはかる。このうちSH1に接する幅40cm前後の扁平な石は、堅穴上にはみ出した格好で検出された。これは、堅穴住居が廃棄されてからある一定期間たち、堅穴が埋まる過程で石が置かれたことを意味している。このことから配石遺構群は住居跡よりも新しいものと考えられる。

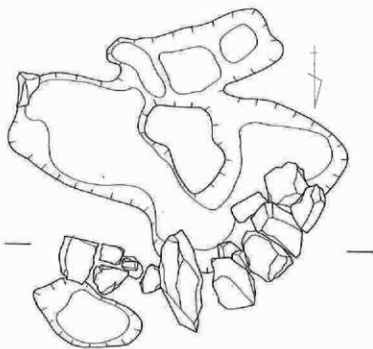
配石遺構1としたものは、礫群のほぼ中央に位置するもので、約5cm~40cmの角礫14個が浅い不定形の落ち込みの縁に、延長約110cmの弧を描くように置かれていた。中央やや東よりに長さ約40cm、幅約15cmの長細い角礫が横位に検出され、両側の石も幅20cm前後のものを中心に配置されている。耕土直下で検出したために山(南)側の部分が耕作によって失われていることも考えられる。埋設土器SX6の上の面の配石遺構と同じように本来円形を描いていたものかもしれない。また、一つだけ突出して大きい中央の石は、立っていた可能性も考えられる。しかし、人為的なものか否かを判断する根拠はつかめなかった。



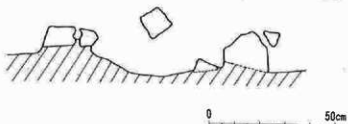
第26图 SH1 周边遗址群

配石遺構2（立石）（第28図、図版8）

配石遺構1の南約1mのところ南北に二つ並んだピットがある。北側は約28cm×約20cm、南側は約32cm×23cmでそれぞれ平面楕円形をしている。黒色粘質の埋土を掘るとすぐ幅17cm前後の石の頭が現れた。それぞれ掘り上げていくと北側のピットでは、長さ約30cmの角が丸い棒状の河原石がピット内に立てられた状態で出土した。砂岩質の石で、磨られて平らになった面が1面あり、砥石のように使われていた石が2次利用されたものと思われる。南側のピット内にも長さ約25cmの棒状の角礫が立てられて出土した。この石に使用痕などは認められなかった。北側の石は頭部が欠けており、耕土直下に当たることから耕作によるものと考えられる。埋設当時は地表面に突出していたものかもしれない。

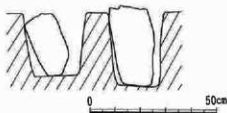
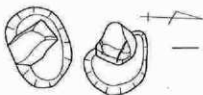


H=428.5



第27図 配石遺構1

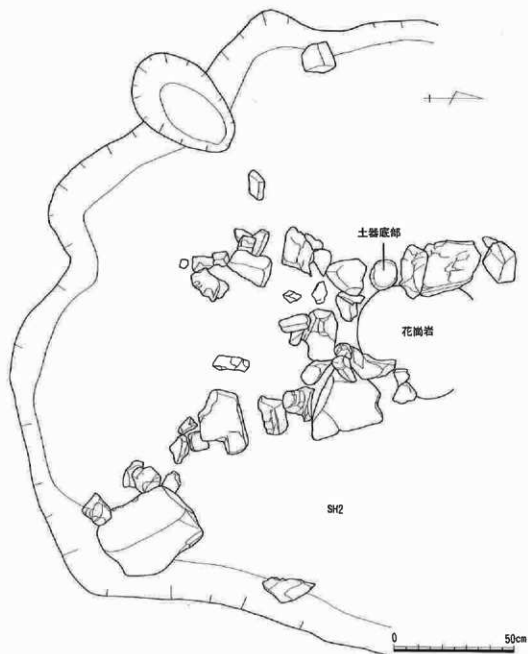
H=428.25



第28図 配石遺構2（立石）

配石遺構3（集石）（第29図、図版9）

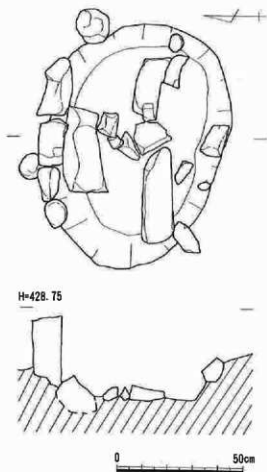
住居跡SH2の覆土上で検出した石列で、14個ほどの石が南北方向に約140cm直線的に並び、その南東方向に約30～40cm大の扁平な石を中心に数十個の石が散在していた。南北方向の石列の中に平底の土器底部が1点出土した。石の散布はSH2の竪穴の範囲内に収まっており、住居廃絶後に何らかの意図で石が置かれた可能性が考えられる。



第29図 配石遺構3

配石遺構 4 (第30図、図版9)

住居跡SH4の西側に隣接して検出した遺構で、上の上っている礫をはずしていくと、南北73cm、東西95cm、深さ15cmの楕円形土坑の縁の部分や内部に16個の角礫や円礫が配されていた。特に南側には4個の円礫が縁に沿って並び、そのうちの1個は長さ約30cmの棒状角礫がちょうど土坑の縁に立てられているような状態で検出された。出土遺物はなく、性格は不明である。



第30図 配石遺構 4

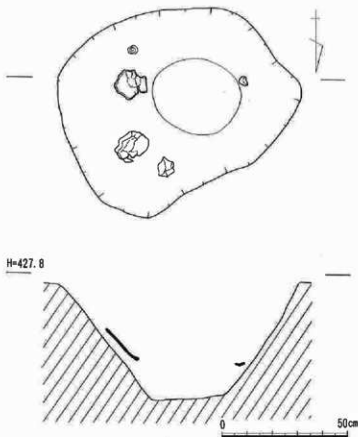
4. その他の遺構

本遺跡からは、多数のピットや土坑を検出した。これらの埋土は漆黒の土と、黒色土および茶褐色土で、前者は新しく、田の土が入り込んだ可能性があるが、後2者は縄文時代の遺物が出土しているものがあることから縄文時代の遺構とみることができる。遺物が出土した遺構は、ピット36基、土坑21基である。

出土遺物から特に時期を想定できるものは、中期後半の里木・咲畑系土器でまとまるSK8、中期末のSK1、SK17~19、SK23、SK29、P20、P59と、中期末から後期初頭のSK28があり、その他も、最盛期である中期末を中心に、中期後葉から後期初頭に属すものと考えられる。

また、石器でもっとも多い数をしめる石錘を出土したピットや土坑は、P1、P3、P10、SK2、SK9、SK17、SK18などで調査区の北東に集中している。

調査区の中央から南側で焼土跡を5基検出した。住居跡SH4の南東約50cmの焼土跡は径約1mの隅丸方形を呈していた。住居跡SH5のすぐ南にあるものは径約80cmで、SH5では炉跡を検出なかったことから、この住居に伴う屋外炉の可能性もある。SH5から南東へ約3m離れた山側にも、不定形の焼土跡が2基検出された。確実にこれら焼土跡に伴う遺物がなかったことから、明確な時期は不明である。



第31図 SK17平面図

第3節 遺物

1. 縄文土器

イ、縄文土器の概要

今回の調査で出土した縄文土器は、早期の押型文土器片をわずかに含むほか、中期中葉から後期中葉までの時期が比較的継続してみられ、さらに晩期まで若干の土器片が混在している。特に、中期末から後期初頭にかけての土器群を中心に、当地の地域性を反映して多数の様式を含み複雑な様相をみせる。遺構内出土土器は、比較的中期末から後期初頭のまとまった時期に集中しており、当遺跡が営まれた中心がこの時期であることを示している。逆に、包含層からは、後期を中心にバラエティーに富む良好な破片資料が多くみられた。

今回の報告では、各遺構出土土器を中心に一部包含層出土土器を含めた。出土した土器片は総数約8,000点で、この中から選別・分類をおこなったが、時間的・予算的制約から、不十分な報告になったことをお詫びしたい。

分類は有文土器を中心に、現在用いられている型式設定を適用しながら、文様構成や器形などにより26群に分類した。この中には脚部および底部、時期不明の土器などもそれぞれ1群として扱っている。

各群の内容は下記の通りである。このうちSは早期、Cは中期（ただしC18～20群土器については後期に属す可能性のあるものも含まれる）、Kは後期、Bは晩期を表す。

S 1 群土器

早期後半に西日本を中心として展開した押型文系の高山寺式土器

C 1 群土器

東海地方中期初頭に位置づけられる北裏C1式系の土器

C 2 群土器

関東・中部・東海に展開する中期初頭の五領ヶ台式系の土器

C 3 群土器

東海地方中期中葉の北屋敷式系の土器

C 4 群土器

西関東・中部の中期中葉に展開する勝坂式系の土器

C 5 群土器

中期中葉から後半に属す船元・里木式系の土器

A類 船元Ⅱ式に類似するもの

B類 船元Ⅲ・Ⅳ式に類似するもの

C類 里木Ⅱ式に類似するもの

C 6 群土器

東海地方を中心に中期後半に展開した炉畑式・映畑式系の土器

A類 炉畑式に類似するもの

B類 咲畑式に類似するもの

C7群土器

東海地方の神明式と呼ばれる土器に類似するもの

C8群土器

関東地方を中心に中期後半に展開した加曾利E式系の土器

C9群土器

北陸系またはC1・3・6・7群土器以外の東海系土器の特徴をもつ中期土器

C10群土器

中期末に近畿地方を中心に展開した北白川C式でいう深鉢A類と呼ばれる器形の土器群のうち、口縁部文様帯を隆帯で表現する土器。当地方に標式遺跡をもつ醍醐式・番の面式と呼ばれる在地系の土器

A類 区画内を縄文で描くもの

B類 区画内を太い矢羽根沈線で描くもの

C類 区画内を細い矢羽根沈線で描くもの

D類 区画内を刺突で充填するもの

E類 区画内を櫛描文で充填するもの

F類 区画内の情報が不明なもの

C11群土器

いわゆる深鉢A類のうち、口縁部文様帯を沈線で表現する在地系の土器

A類 区画内を刺突で充填するもの

B類 区画内を太い矢羽根沈線で描くもの

C類 区画内を細い矢羽根沈線で描くもの

D類 区画内の情報が不明なもの

C12群土器

いわゆる深鉢A類のうち、口縁部文様帯を多重沈線で表現する在地系の土器

C13群土器

北白川C式でいう深鉢C類と呼ばれる器形の土器

A類 文様を刺突で表現する在地系の土器

B類 文様を沈線で表現する在地系の土器

C14群土器

口縁部が無文の深鉢形土器

A類 無文土器

B類 縄文土器

C類 櫛描き沈線文土器

C15群土器

胴部に垂下する沈線や微隆起をもつ東海系の土器

- A類 垂下沈線と櫛描き文（篋描き文）で表現するもの
- B類 垂下沈線と矢羽根沈線で表現するもの
- C類 微隆起と櫛描き文（篋描き文）で表現するもの
- D類 微隆起と矢羽根沈線で表現するもの

C16群土器

胴部に垂下沈線をもつその他の土器

- A類 垂下沈線と縄文で表現するもの
- B類 垂下沈線と刺突で表現するもの
- C類 垂下沈線のみのも。または摩滅して不明なもの

C17群土器

その他、胴部に沈線や微隆起をもつ土器

- A類 曲線的な沈線で描くもの
- B類 曲線的な沈線区画文を描くもの
- C類 曲線的な沈線と縄文で描くもの
- D類 微隆起と縄文で表現するもの

C18群土器

浅鉢類

C19群土器

特殊な器形の土器

- A類 有孔壺型土器
- B類 注口土器

C20群土器

脚部および底部を一括した

C21群土器

形式または時期不明の土器

K1群土器

後期初頭の磨り消し縄文をもつ中津式系の土器

K2群土器

縁帯文系の土器

K3群土器

宮滝式系の土器

B1群土器

晩期に属すと考えられる土器

以上の分類には、便宜的な部分や曖昧な部分があり、また、C5群・C6群の中期後半の里木Ⅱ式や咲畑式の影響を受けた土器が中期末までみられるように、各群内においても時期差があるものが含まれる。

ロ、遺構から出土した土器

1号住居跡(SH1)出土の縄文土器

もっともまとまって出土したが、確実に住居跡に作るものは59くらいで、ほとんど履七からの出土である。C5・6群のように中期後半に属す多少古いものも含まれているが、全体に中期末から後期初頭というまとまった時期の上器が出七しており、この間の時期差はほとんどないものと思われる。ここでは前述した土器分類によりつつ、順に記述する。

C5群の土器(第32図1~20、図版14)

B類(1~5)

1・2は隆帯の両側に半截竹管状工具により平行沈線文を施しており、船元Ⅲ式に類似する。3・4は筋の太い縄文を施す。5は縄文の条が交互に深浅に押捺されている。船元Ⅳ式に比定できる。

C類(6~20)

6はキャリパー状深鉢の口縁部で、口縁下に1本の沈線を引き千鳥状の交互刺突による波状文を施文している。地文は燃糸文で、口縁端部には細かい刻みを施し外面口唇部をなでている。里木Ⅱ式に類似する。7は交互刺突を入れて太い波状文を作ったあと、上ドを横沈線で整えている。地文は船元式のような粗い縄文(LR)で口縁の端部にまで及んでいる。里木Ⅱ式の要素をのこしながら、やや新しい時期に属すものと考えられる。胴部には中津式につながる紡錘文がつく可能性がある。中期末から中津式に続く時期で、従来平式とよばれる中期末に特徴的な日本海側の交互刺突をもつ。8~10も交互刺突による粗い波状文をもつ。11・12はキャリパー状深鉢の口縁部で、器面がよく磨かれている。1本の沈線とその上またば下に1条の刺突列を施している。6のような交互刺突による波状文の簡略化した文様と考えられる。13・14は竹管による波状文を施す。15は口縁部に1条の波状沈線を施し、斜めに3本の沈線を描いている。16・17は竹管による併行線文と波状文を施す。18は頸部でくびれながら外反して立ち上がる土器の口縁部で、密な燃糸文を口縁端部下まで施す。

C6群の上器(第32図21~23、図版14)

A類(21・22)

21・22はそうめん状貼り付けを押し引きで圧着させて文様を描くもので、張り出しの強いキャリパー状深鉢の口縁部で、22は口唇部立ち上りの部分である。22の内面には指押さえによる成形の痕跡がみられる。炉畑式に類似する土器である。

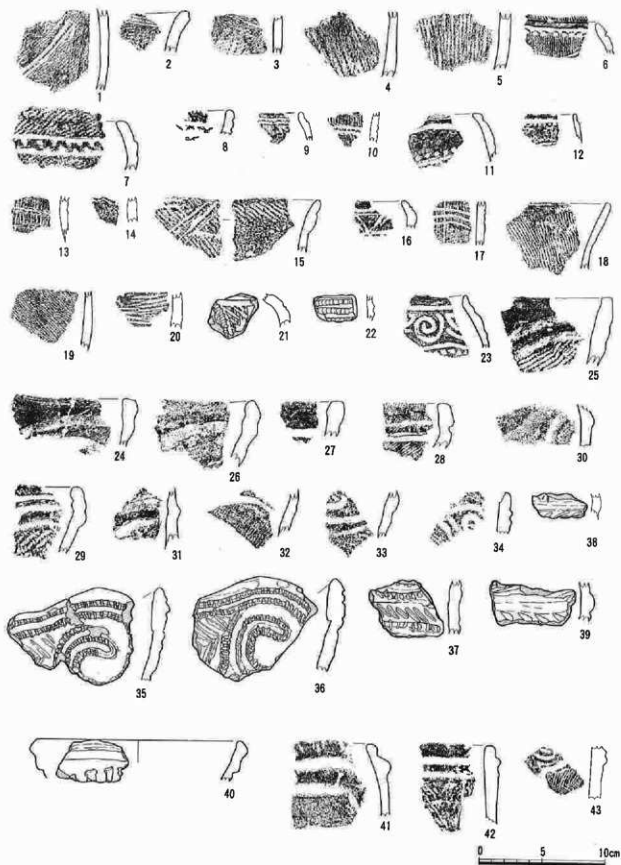
B類(23)

23はキャリパー状深鉢の口縁部で、沈線による渦巻文を描いている。これはA類のそうめん状貼り付けを簡略化したものと思われ、さらに押し引きのかわりに刺突文を用いている。内面はなで調整がおこなわれており、咲畑式の要素を保ちながらもかなり新しい時期に属すものと考えられる。

C10群の上器(第32・33図24~55、図版14・15)

A類(24~34)

口縁部文様帯を隆帯で表現するもので、隆帯の区画内を縄文で描いているものをA類とした。



第32图 1号住居跡出土縄文土器(1)

24~27は口縁端部を肥厚し、その下に1条の隆帯区画をもつもので、内部を縄文で充填している。24・26は波状口縁になる。28は隆帯区画の内側を竹管状工具による沈線を施している。29は口縁の下に竹管状工具による2条の沈線を引いている。34は隆帯区画の横に渦巻文またはS字文が施されている。

B類 (35~40)

隆帯の区画内に太い矢羽根沈線で描く土器群。35・36・37は同一個体で、波状口縁の下に渦巻状の隆帯を貼り付け、その両側に沈線を引き刺突を施している。隆帯は頸部にもつけられているものとみられ、区画の内側にも沈線文と刺突を巡らせ、区画内に太い矢羽根沈線が描かれている、口縁内部は折り返して肥厚させている。39は隆帯区画内に矢羽根を、頸部に斜めに鋭く押し出した刺突を巡らす土器片である。40は一応B類に含めたが、口縁部下に沈線、その下に竹管状工具による矢羽根状刺突を施している。

C類 (41~43)

41は口縁部で両側に太い沈線が引かれた隆帯区画をもつ。区画内は摩滅してわかりにくいが櫛状の細い矢羽根沈線が描かれているものか。42も口縁部直下に隆帯区画をもつ土器で、縦の櫛状矢羽根沈線が描かれている。43は矢羽根沈線状の文様が描かれているが、赤茶色の細かい胎土をもつことから搬入された土器の可能性がある。

F類 (44~55)

隆帯区画をもつものの、区画内の情報が不明な一群である。44・45・46は口縁部に横位の沈線を引くもので、その下に隆帯区画をもつ。47は口縁下の隆帯区画の間に刺突を施している。51は隆帯区画の内側に沈線を引き、その上から刺突を施している。55は高い隆帯によって区画を描く。

C11群の土器 (第33図 56~59、図版15)

A類 (56~58)

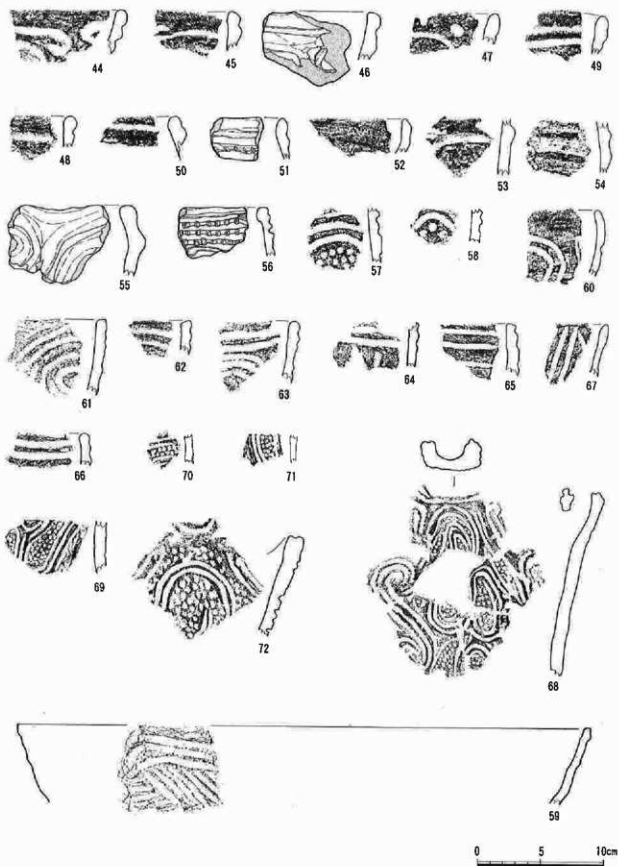
56は、口縁部に1条の沈線を引き、その下に刺突を施した3条の沈線を巡らすもので、口縁内部は折り返して肥厚させている。刺突を施した沈線の下に屈曲した沈線が描かれている。57・58は沈線区画内に刺突を充填している。

B類 (59)

口縁部に3条の沈線による区画文を描き、区画内を太い矢羽根沈線で描いている。口縁内部をわずかに折り返している。1号住居跡(SH1)の床面に張り付いて出土した。

C12群の土器 (第33図 60~67、図版15)

口縁部文様帯を多重沈線で表現する在地系土器である。60~62は、口縁部直下に沈線で多重渦巻き文を描いている。それぞれキャリパー状深鉢の口縁部である。63は口縁部に2条の沈線を巡らせ、その下に渦巻き文を描いている。64~66は口縁部に横位の多重沈線を引くもので、67は斜めに沈線を施している。



第33图 1号住居跡出土縄文土器(2)

C13群の土器（第33・34図 68～78、図版15・16）

A類（68～75）

68～71は同一個体で、器形は中期末に近畿地方を中心に展開した土器型式の北白川C式の深鉢C類に該当するが、沈線による渦巻き文様内に軌跡に刺突を充填する手法は京都など近畿中央部には見られず在地色の強い土器である。口縁部は中空の山形突起で、口縁端部にも2重沈線を巡らせ刺突を施している。また、口縁端部を折り返して、肩部には胴部から続く渦巻き文を描き、山形口縁の側面にはわらび手文を用いている。口縁部の沈線には刺突を施している。また、内面の折り返し部にも2条の沈線を引き、押し引き状に刺突を施す。P20から同一個体の土器が出土している。72～74も同様に渦巻き状多重沈線と刺突によって描く中空山形突起をもつ土器で、突起は68よりも緩やかで刺突は大きく深い。突起縁部部に沈線に囲まれたわらび手文をもつが、刺突は施されていない。75は前二者と個体は異なるが同様の文様構成をもつ。

B類（76～78）

山形突起をもち文様を沈線で表現する。76・77は口縁端部を折り返す山形突起で縁部部に沈線文を施している。76は山形突起の頂点に渦巻き状の文様を描き、そこから放射状に沈線を引き下ろしている。77は山形突起に沿って2本の沈線を引きこから斜め方向に多重沈線を引いている。78は口縁端部を折り返さない低い山形口縁をもち、口縁に沿って複雑な4本の多重沈線を描く。山形突起が退化したものと考えられる。

C14群の土器（第34図 79～87、図版16）

A類（79～81）

無文の深鉢形土器口縁部で、79は口縁端部を平らにしている。81は丁寧な調整をおこなっており、口縁端部をやや平らにしたゆるい波状の口縁を呈する。

B類（82～84）

縄文を施している深鉢形土器の口縁部で、82は口縁部から縄文を縦に転がしているもので、幅約3cmの縄文の両側が無文帯となっていることから帯縄文をもつものと思われる。時期的に中期末から後期初頭に現れる。83は口縁部に縄文を転がす。

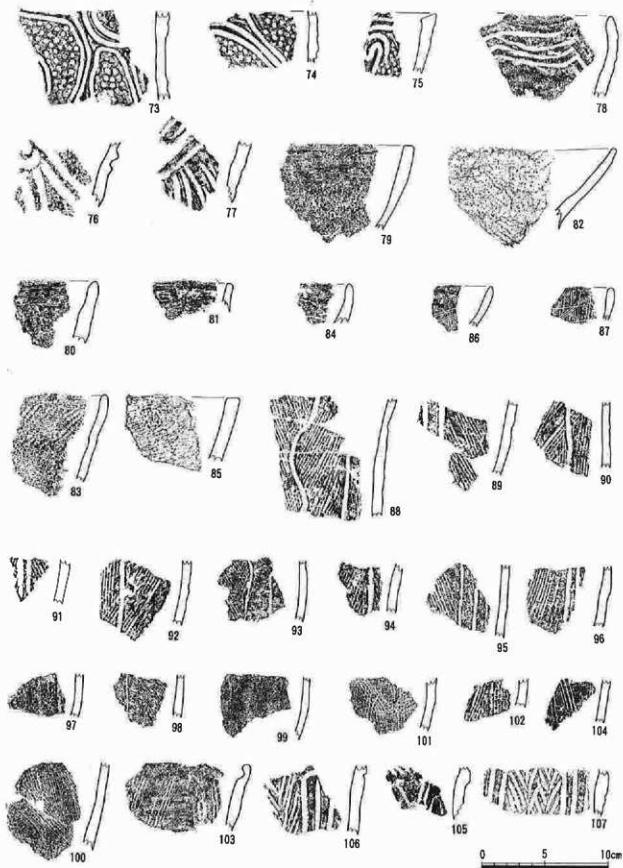
C類（85～87）

櫛描沈線文をもつ深鉢形土器の口縁部。85は口縁端部を平らに成形し櫛状工具で調整されている。86・87は同一個体で、内面はよく磨かれ、外面は櫛状工具により縦横斜めに沈線が施されている。

C15群の土器（第34・35図 88～118、図版16・17）

A類（88～104）

深鉢形土器の胴部で垂下する沈線や微隆起で分割する文様をもつ東海系の土器のうち、垂下沈線間を櫛描文または篋描文で充填する土器群。88～91は同一個体で、92も同じ土器である可能性が高い。2本の垂下沈線で胴部を分割し、交互に櫛状工具による集合沈線を施文して、その中央に蛇行沈線を引き葉脈状文を描いている。器形はキャリバー形を呈す。93～97も垂下沈線と櫛描文を描くもので、93は蛇行沈線を葉脈状文の中央に引く。壺形土器の胴部と思われる。95は3条の垂下沈線をもつ。98・99は垂線も櫛状工具により描かれる。



第34图 1号住居跡出土縄文土器(3)

100・101は交互に入り交じって規則性を持たない描文で、101では櫛状工具による集合沈線を途中でV字に曲げて描いている。103は口縁部でこの土器群に入らないかもしれないが、口縁内側を指頭圧痕によってくぼませ、外面は櫛状工具による斜め沈線を引く。104も同一個体である。

B類 (105~114)

垂下沈線間を矢羽根沈線で表現する土器群。垂下沈線には2条のものと3条、それ以上のものが見られる。105はキャリパー状深鉢のくびれ部で口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する刻みをもつ隆帯および胴部の矢羽根沈線である。106もくびれ部付近とみられヘアピン状に折れ曲がって垂下する沈線の中にもう1本の沈線が引かれている。107~109は比較的太い沈線が引かれ、107では沈線間に2単位の矢羽根沈線が施文されている。114は2条以上の蛇行沈線と1条の沈線間に同じ向きで斜め沈線が充填されている。

C類 (115~118)

胴部を垂下する微隆起で分割して描文や矢羽根沈線を施すもので、115・116は描文を斜めに引き、117・118は矢羽根沈線を施文する。

C16群の土器 (第35図 119~151、図版17・18)

A類 (119~135)

胴部を垂下沈線と縄文で表現する土器。119はキャリパー状深鉢のくびれ部で口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する隆帯があり、胴部は斜縄文を施し2本の幅の狭い沈線を垂下させる。120~123は同一個体で2本の沈線間は磨り消している。126は3条の深い沈線を引き不規則な縄文を転がす。127・128は磨り消しによる分割沈線間に斜縄文を充填する。

B類 (136~139)

胴部を垂下沈線と刺突で表現する土器。136は壺状の胴部で3本単位の太い沈線の中を直径6mmの棒状工具による刺突で充填している。土器片の下部に横位の沈線があることから垂下沈線ではなく、沈線による胴部区画の可能性もある。137も2~3条の沈線間に刺突列を施す。138はキャリパー状深鉢の外反した胴部で2条の垂下沈線の間に竹管状工具による刺突を施す。139も同様の文様をもつ。

C類 (140~151)

胴部を垂下沈線のみで表現する土器を一括した。また、区画垂線間が摩滅してわからないものも含めた。140~142は垂線間に蛇行沈線を描くもので、140は上部でやや外反する。143・144は同一個体である。

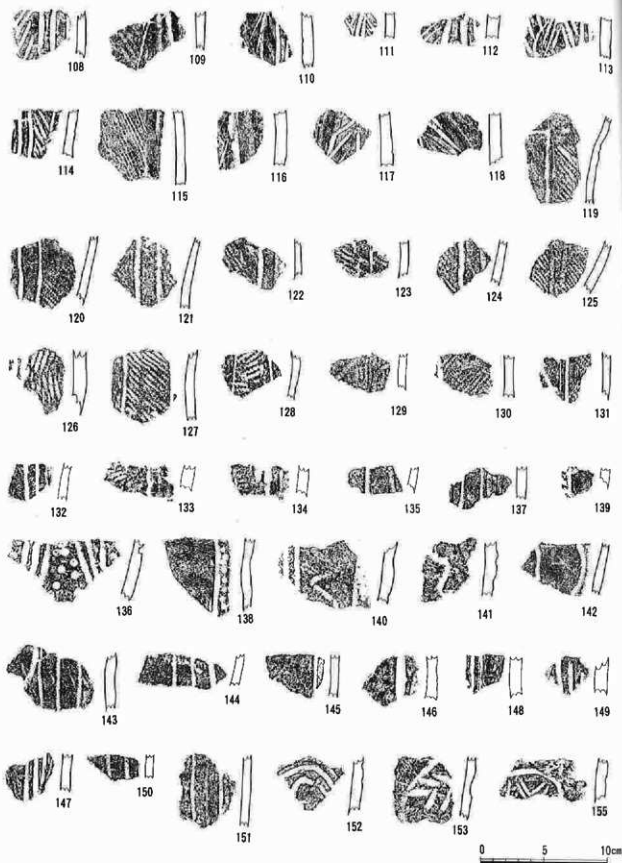
C15、16群ともに中期末に位置づけるが、若干年代観の違う遺物が含まれている可能性もある。

C17群の土器 (第35・36図 152~166、図版18)

C15、16群に含まれない、胴部に沈線や微隆起をもつ上器群を一括した。

A・B類 (152~160)

曲線的な沈線や曲線的な沈線区画文で描く土器の胴部。152は渦巻き文をもつ。153~155は区画内に矢羽根状の文様が施されている。156はキャリパー状深鉢の屈曲部で2重沈線によって窓状区画文が描かれているものと思われる。157も同様の器形の土器でJ字状の区画文を描く。



第35圖 1号住居跡出土縄文土器(4)

C類 (161~164)

曲線的な沈線と縄文で表現するもので、163は縄文地に垂下沈線と蛇行沈線を施文している。垂下線の両側に縄文が認められるが、C16A類に属するものか。164は縄文地に3本のやや垂んだ沈線を引く。

D類 (165・166)

165は縄文を地紋として2本の隆帯を張り付けて文様を描く。胴部が膨らむ壺形土器で脚部がつく可能性がある。細かい砂を多く含む胎土は、本遺跡で散見する信州・関東系の土器に似る。C20群の土器(第36図 272~275、図版29)

底部を一括した。図化した4点とも胴部が大きく開いてつく底部である。いずれも平底で、273~275には底部圧痕が明瞭にみられる。

K1群の土器(第36図 167~172、図版18)

167は口縁端部内面を折り返して肥厚する波状口縁をもつもので、口縁部直下に横走する磨消縄文帯をもつ。山形口縁の下には曲線状の磨消縄文が描かれており、破片の割れ口にあたる曲線内にも1条の沈線があることから渦巻き状の磨消文を呈するものと思われる。この渦巻き文の左右にも磨消縄文が施されており、左側の文様は割れ口に沿って胴部に垂下する。内面および外面の無文帯は筥削りによる調整が施されている。口縁部が無文帯にならないことから中津式でも古いタイプに属し後期初頭のものである。168・169は口縁部で、168は折り曲がった口縁部下の沈線間に縦の縄文が入る。胎土の様子から中期に属す可能性もある。169は磨消縄文帯がなく、口縁下に沈線が横走するが、精巧な磨きが施されている。

2号住居跡(SH2)出土の縄文土器

住居跡履土から出土した土器群で、前述した土器分類によりつつ、順に記述する。

C5群の土器(第37図 173~175、図版19)

A類 (173)

船元Ⅱ式に類似する土器で、173は燃りの粗い縄文を地文とし、低い貼り付け隆帯上に刻目をつける。波状口縁をなし口縁外面を肥厚させて貝殻圧痕を巡らせる。内面口縁部下にも縄文を施す。

C類 (174・175)

キャリバー状の深鉢で、燃糸文を地文とする里木Ⅱ式に類似する土器である。175は胴部から頸部にいたるくびれ部にあたり、燃糸文の上に竹管状工具による波状沈線を施し、そこから上は無文帯となる。

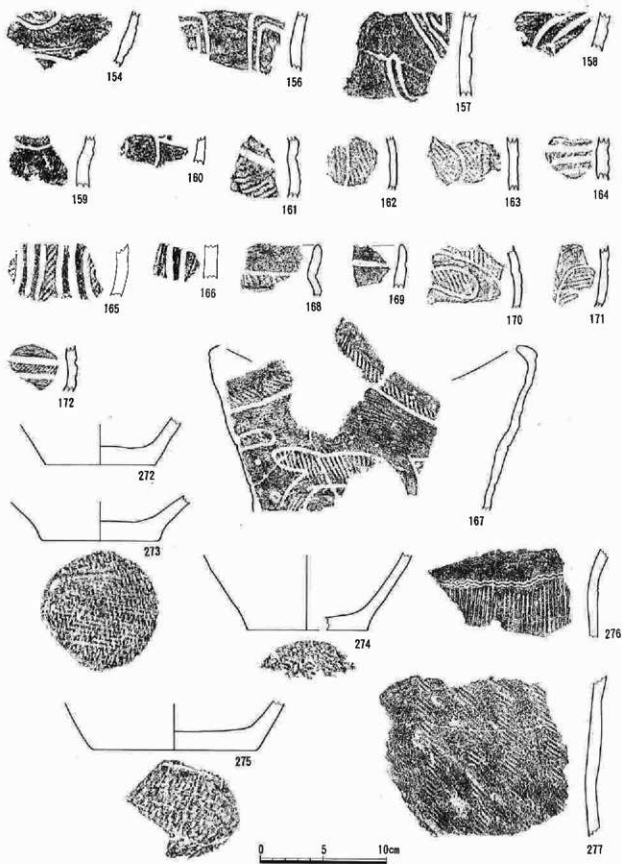
C6群の土器(第37図 176、図版19)

B類

口縁部に2本の沈線を引き、端部に刻みを施している。キャリバー状深鉢の口縁部で、中期中葉の咲畑系土器と思われる。SH3の200と同一個体である。

C10群の土器(第37図 177、図版19)

D類



第36图 1号住居跡(5)・SX1出土縄文土器

波状口縁の下に隆帯による渦巻き文を描くと思われる土器で、SK1の281同様に隆帯内に刺突が充填されるものか。

C11群の土器（第37図 178、図版19）

A類

渦巻きを描く沈線区画内を竹管状工具による刺突で充填している。

C13群の土器（第37図 179～181、図版19）

A類

179は、渦巻き状多重沈線と刺突によって描かれる中空の山形突起をもつもので、文様構成がSH1の72に似ており同一個体の可能性がある。180は同様に中空突起をもつ土器の胴部で、73・74と同一個体である。

C14群の土器（第37図 182、図版19）

C類

櫛状工具による沈線文を縦横に描く口縁部無文系深鉢の胴部。

C21群の土器（第37図 183、図版19）

形式および時期が不明なものを一括してC21群としたが、本資料は中期末の東海系の土器と思われるが、類例に乏しく明確なことはわからない。口唇部の立ち上がりで、直線の隆帯で区画した間に蛇行する粘土ひもを貼り付け、端部にも同様の文様を施している。口縁内部を折り曲げてやや肥厚させる。

K1群の土器（第37図 184～186、図版19）

184は、おそらく椀状をした土器の口縁部で、口縁直下に磨消縄文によるJ字文を描く。中津I式の新段階に属すものか。

3号住居跡（SH3）出土の縄文土器

住居跡履土から出土した土器群で、全体に咲畑、里木Ⅱ式系土器群を中心にまとまっている。

C3群の土器（第37図 187、図版19）

口縁部につくやや内傾して立つ角状の突起で、内側にしずく形の窓がつけられている。東海地方中期中葉に位置づけられる北屋敷式土器で発達した角状突起に類似する。本遺跡ではこの1点のみみられる。

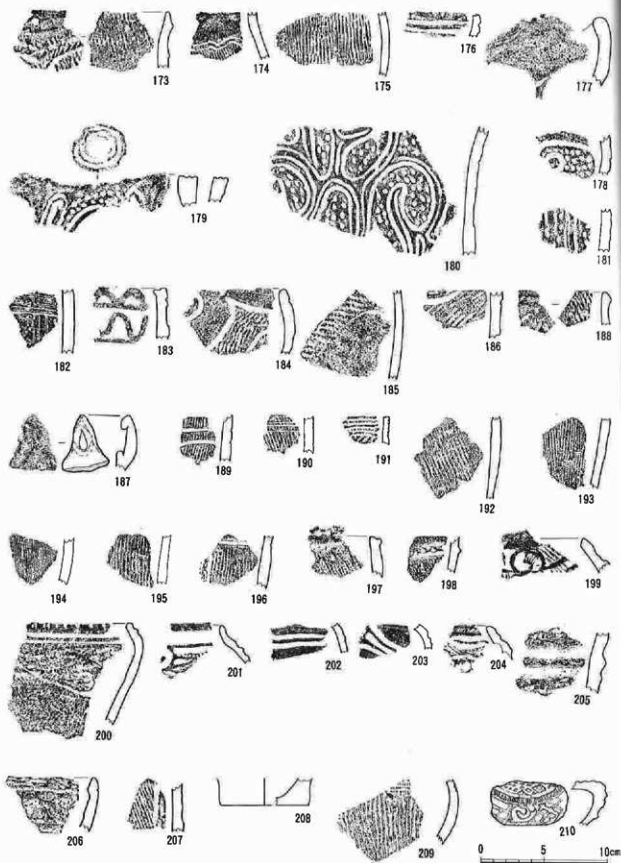
C5群の土器（第37図 188～198、図版19）

188は、口縁外面に貝殻圧痕、内面に粗い縄文を施す船元Ⅱ式系土器でA類に属す。189～196は、摺糸文を地文とし、平行沈線文を施すものである。C類の里木Ⅱ式に比定できる。197は、摩滅が激しいが、口縁部外側を折り返し、端部に竹管状工具による刺突を施す。198は、縄文地に刺突状の刻みをもつ隆帯を張り付けている。A類に属すものか。

C6群の土器（第37図 199～204、図版19）

A類（199）

口縁部が強く内彎するキャリパー状の深鉢で、そうめん状の貼り付け隆帯による渦巻き文や区画文を押しきりで圧着させている。隆帯区画内には斜め沈線を充填する。内面は指頭圧痕による調



第37图 2号住居跡・3号住居跡・4号住居跡(1) 出土縄文土器

整が施されている。炉煙式に類似する土器である。

B類 (200~204)

キャリアー形の口縁部で、主に沈線により施文されている。吹煙式に類似する土器群である。200は内彎する口縁部で、口縁部に2条の沈線を引き、端部に刻みを施している。201は、口縁内部に指頭圧痕を残すものの、従来そうめん状貼り付けで描かれた渦巻き文などの文様を沈線で表現している。202・203はきめの細かい胎土をもつ同一個体である。

その他の土器群 (第37図 205~208、図版19)

205は、口縁部文様帯を隆帯で表現する土器の口縁部に近い部分で、隆帯内の施文は不明である。C11群に属す。206は、C14群の無文系土器A類の口縁部で、器壁が粗く、口縁部をやや肥厚させて端部と内面直下に横方向の粗い刻みを入れている。207は、C15群A類の垂下する沈線と襷描きによる葉脈文をもつ胴部である。208は、平底の底部である。本遺跡出土の土器底部は、平底が主体で、若干くぼみ底のものがみられる。平底の底部には網代痕がみられるものがある。

4号住居跡 (SH4) 出土の縄文土器 (第37・38図 209~218、図版20)

住居跡履上から出土した土器群で、数量的にわずかで、確実に住居に伴うものはない。出土した土器の中に後期に属すものはみられず、中期後半から末葉の上器群である。

209は、C5群の土器で、燃糸文を地文に平行沈線を施文する里木Ⅱ式の胴部である。

210は、肩の張ったキャリアー状深鉢の吹煙系土器でC6群B類に属す。そうめん状貼り付けを渦巻き状に付け、格子目状に充填している。屈曲部には2条の貼り付け間に沈線を施したあと剝突を加えている。これは、吹煙式にみられるそうめん貼り付けを押し引きによって圧着させる手法を簡素化したものであろう。

211は、口縁部文様帯に沈線による高文と斜沈線を充填して表現する土器で、口縁端部を肥厚している。内側に蓋受け状の段がめぐる。吹煙式に続く東海の神明式(タイプ)系の土器でC7群とした。把手のつかない器種である。

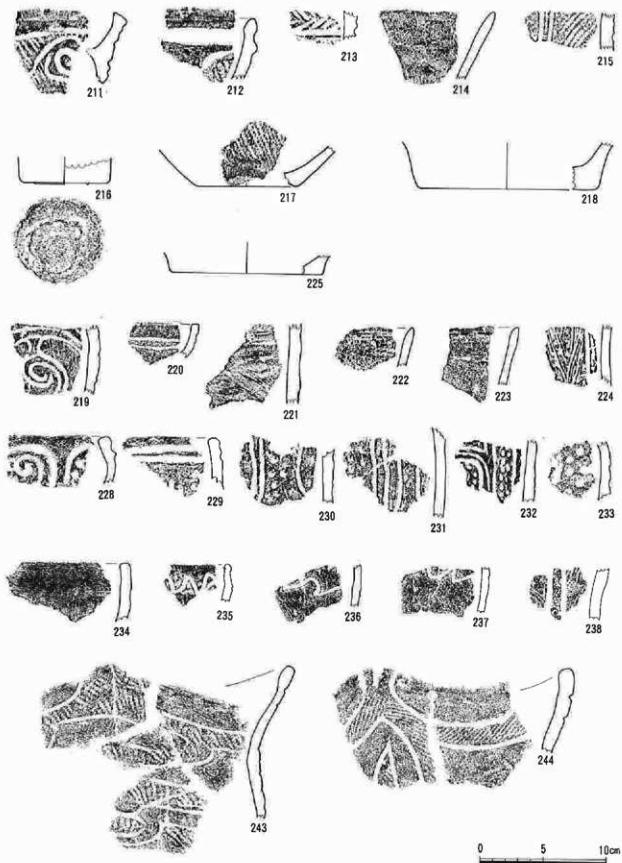
212は口縁部文様帯を隆帯で表現する在地系土器で、隆帯区画内を縄文で施文するC10群A類に属す。内面はていねいに磨かれている。213も在地系の土器で、口縁部文様帯を沈線で区画し、その中に太い矢羽根沈線を挿くC11群B類土器である。215は、胴部に垂下する2状の沈線をもち、縄文を施すC16群A類に属す。

214はC14群A類で、深鉢形土器の無文の口縁部。216~218は底部(C20群)で、216には平底の底部に円形の剝離痕が残る。この土器には、台(脚)がついていたものと考えられ、これが剝離したものであろう。217は縄文が底部近くまでついている。C5群の船元式土器のくぼみ底である。

5号住居跡 (SH5) 出土の縄文土器 (第38図 219~225、図版20)

浅い竪穴の住居跡履上からの出土で、出土量は少なく、船元Ⅲ式系の小破片を含む。図化したのは7点である。

219は、C6群として取り上げるが、器形は吹煙系のキャリアー状深鉢または壺型をなし、



第38图 4号住居跡(2)・5号住居跡・SX2(1) 出土縄文土器

胴部に沈線による渦巻き状の区画文をもつ土器である。区画内を斜行沈線で充填する。喫煙土器は胴部無文であることから、中部高地の曾利式または長野県伊那谷地方に分布する唐草文系土器の影響を受けているものと考えられる。加曽利E2式併行か。本道跡では胴部の残欠が出土しているが、このタイプの土器につくものかもしれない。221～223はC14群の無文系土器口縁部。224は、C15群A類土器である。

埋設土器遺構(SX1)から出土した縄文土器(第36図 276・277、図版20)

土器の埋設遺構SX1からは、主体となる無文系土器226のほかに数点の土器破片が出土している。図化したのは2点である。276はC5群C類の里木Ⅱ式土器で胴部に半截竹管による波状文を引く。277は、1.5～2cmの間隔をあけて縦に縄文を転がす帯縄文で施文された深鉢形土器で、中期末から後期初頭にみられるものである。277が埋設土器と近い時期のものか。

埋設土器遺構(SX2)から出土した縄文土器

土器を埋設した遺構SX2からは、主体となる中津系土器227のほかに40点前後の土器片が出土している。磨消縄文をもつ後期初頭の中津系土器群(K1群)でまとめ、前段階となる中期末の土器群も含まれるが、両者の時期差はほとんどないものと考えられる。

C11群の土器(第38図 228・229、図版21)

中期末の北白川C式土器でいうところの深鉢A類に属するもので、口縁部文様帯を沈線で表現し、区画内を刺突で充填する在地系の土器である。228は、渦巻き文をもち区画内部に径6mmの刺突を施す。

C13群の土器(第38図 230～233、図版21)

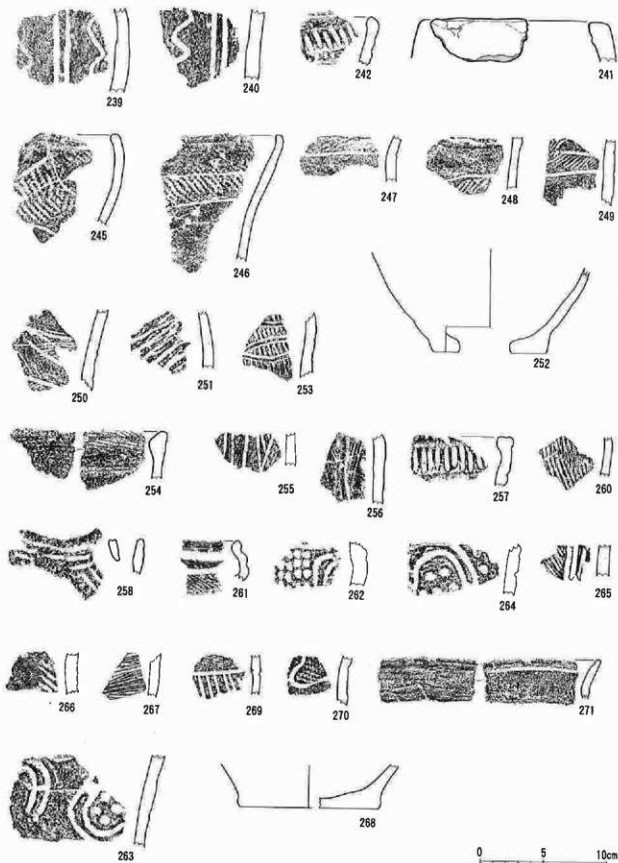
北白川C式で深鉢C類とされる山形突起をもつ器形の胴部にあたる土器を一括した。文様を執拗な刺突で表現する在地系土器である。230・231は同一個体で曲線の多重沈線と刺突によって施文する。232は渦巻き状になると思われる多重沈線内を細かい刺突で充填している。

K1群の土器(第38・39図 243～250、図版21)

SX2の主体である埋設土器227と時期を同じにする土器群で、後期初頭の中津式土器である。243は、直径1cmほどの穴を開けた中空突起をもつ波状口縁の深鉢形土器で、波状口縁の下にJ字文が押し上げられてつぶれたような状態で描かれている。在地化した中津系土器で初頭でも古い時期に属す。244も波状口縁の深鉢形土器で、口縁頂部に3本の刻みを施し、その下に鋭いJ字文を描く。どちらも口縁部をやや肥厚させる。245・246は同一個体で緩やかな波状口縁をもつ。

その他の土器群(第38・39図 234～242・251、図版21)

234は描描き沈線文のC14群C類の土器。235・237は同一個体で、口唇部に蛇行沈線を施し、以下を無文にする薄手の深鉢形土器である。238はC15群A類。239・240は同一個体でC16群C類に属す。241は台付き土器の台部で、上面は接続部で土器と剝離し、下部は欠損している。約5.5cmの間において中空の窓が開いている。242は、摩擦が激しく口縁部になるか判断できない。斜めに太く短い沈線を施している。本道跡で出土している勝飯式に類似する土器と細かい胎土が似て



第39圖 SX 2 (2), SX 3 · SX 4 出土織文土器

いることから、東日本系の土器かもしれない。時期・形式とも不明でC21群土器とした。251は間の広い摺系文を施文する。

埋設土器遺構(SX3)から出土した縄文土器(第39図 253~258、図版21)

埋設土器252に伴って出土した土器を一括する。時期的にまとまっていない。

253は、半截竹管による平行沈線文を施すものでC5群C類に属す。254は、口縁内部を肥厚させて縄文を施す無文系土器である。255・256は、胴部に垂線をもつC15群土器で、255は垂下沈線に分割されて矢羽根沈線を描くB類、256は微隆起と櫛描文で表現するC類である。257は、SX2の242と同一個体である。258は中空の山形突起で、口縁部に刺突をめぐらせ、縁帯部には両側に刺突した横沈線を3本施している。中津式にみられる文様でK1群とした。

埋設土器遺構(SX4)から出土した縄文土器(第39図 260~271、図版21)

埋設土器259に伴って出土した土器群を一括した。時期的なまとまりはみられない。

260はC5群A類。261は、口縁部が張り出すキャリパー状深鉢の口縁部で、口縁部を丸く肥厚させ、2条の沈線の区画内に縄文を充填する。内面はなで調整を施す。262~264は、沈線と刺突によって文様を構成するもので、262は、いわゆる深鉢A類で口縁部文様帯を沈線で区画する在地区系土器のうち、区画内を刺突で充填するC11群A類に属す。263・264は同一個体で、C13群A類の山形突起をもつ深鉢C類の胴部と思われる。渦巻き状多重沈線内を刺突で充填している。265はC15群A類。267は条痕文系土器か。

271は、口縁内部に1条の沈線を施すもので、中・後期にはみられず晩期(B1群)に属すものか。

その他の土坑・ピット・焼土から出土した土器

遺物が出土した土坑・ピットを中心に通し番号をふった。各遺構ごと、あるいは近接するものをまとめて土器分類によりながら順に記述する。

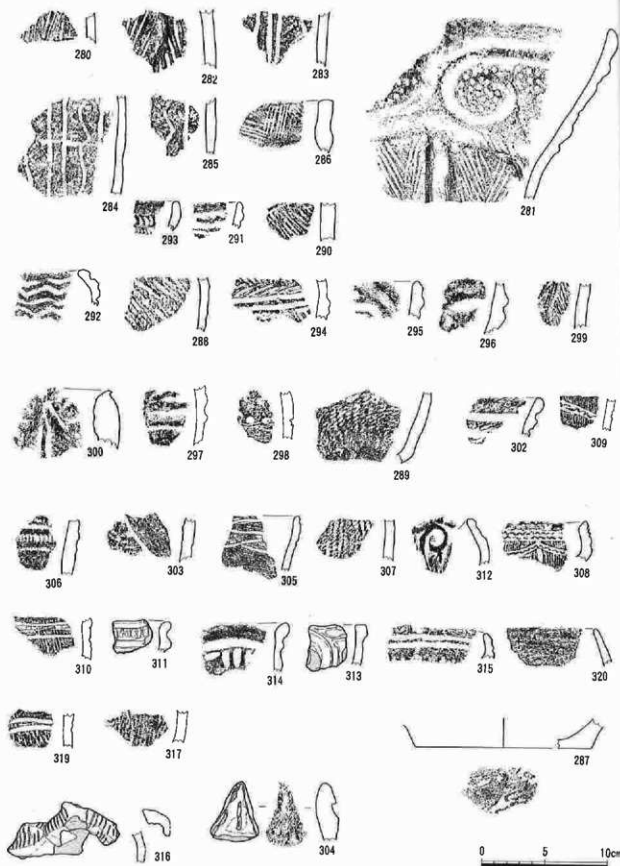
SK1(第40図 280~287、図版22)

土器埋設遺構SK1から西に約1m離れた直径約1.2m、深さ約36cmの土坑である。出土した土器は、おおむね中期末でまとまっている。

280は、隆帯と半截竹管による平行沈線文を施す船元Ⅲ式土器でC5群B類に属す。

281は大型の破片で、厚手でキャリパー型口縁の器形を呈する土器である。口縁部文様帯に隆帯で楕円形の区画文を配し、区画内を刺突文により充填しておりC10群D類に分類される。口縁部をやや肥厚させて波状口縁にしている。口縁部文様帯の下に刺突列と隆帯をめぐらせて胴部文様帯と区画している。胴部には2本の微隆起文を垂下させて縦位分割し、矢羽根沈線を描く。胴部の右端に曲線状の微隆起があり、これが分割された区画中央に蛇行して垂下している可能性がある。282は同一個体で、蛇行して垂下する微隆起と矢羽根沈線文である。

286は、立ち上がる厚手の口縁部で、端部を平らにし口縁直下に6本単位の櫛状工具により交互に斜め沈線を施文する。その下に隆帯状の盛り上がりがありC10群F類の変容であろう。



.. 第40圖 土坑 (SK) 出土縄文土器 (1)

283~285は、垂下沈線をもつ胴部でC16群土器である。283は3本の垂下線で分割され、縄文を充填し中央に蛇行垂下沈線を施す。284・285は同一個体で、2本の垂下線で縦位分割し、蛇行沈線を垂下させる。

SK2 (第40図 288~303、図版22)

埋設土器SX2と重なる土坑で、南北約2.4m、東西約1m、深さ約24cmの細長い土坑である。

288~293は船元・里木Ⅱ式土器に類似する土器群である。289は底部近くまで縄文が施された船元系のくぼみ底部である。290はC類の里木Ⅱ式、291は口縁部下に交互刺突による波状文を描く。291・292は里木Ⅱ式土器のくずれたものか。

294~297は、C10群の口縁部を隆帯で表現するものである。294は区画内に矢羽根沈線を施文する。298は器面に刺突を施していることからC11群土器か。299は垂下する微隆起に矢羽根沈線を描くC15群B類の土器。300は厚手であるが鋭利な山形突起で、中央に微隆起を垂下させる。302・303は後期の土器である。

SK4 (第40図 304、図版22)

304は、角状の山形突起で、外面および縁部部に長細い刺突文を連続に縦位に施文している。東海地方で中期中葉に展開した北屋敷式土器(C3群)の系統かと思われるが、刺突してとがる突起はC13群土器にもみられることから中期末に属す可能性もある。

SK5 (第40図 305、図版22)

薄手で焼きの固い深鉢で、口縁直下に1条の沈線とさらにその下に交互に3本の斜め沈線が引かれている。器面が丁寧に磨かれ、スガが付着している。後期の土器(K1群)で、加曾利B式併行かやや新しい時期のものであろう。

SK8 (第40図 306~317、図版22)

長径約70cmの楕円形土坑で、深さ約43cmを測る。出土土器の中には、ごくわずかに中期末のものが含まれるが、ほとんどが中期後半の里木・咲畑系土器の系統にまとまる土坑である。

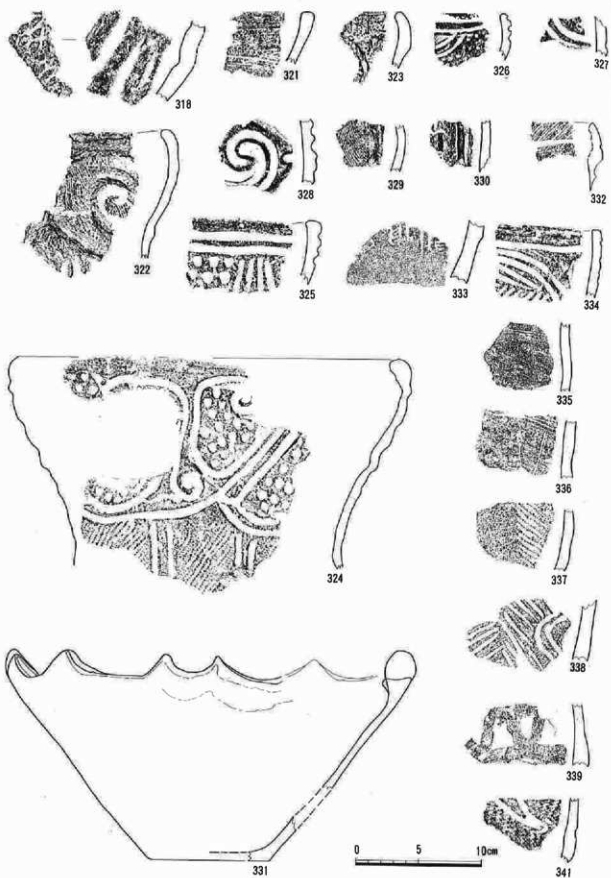
306は、細かい砂状の胎土で赤く焼き上げられた土器で、隆帯区画の両側に竹管状工具による刻みと、押し引きによるものと思われる爪形文を配し、その下にさらに三角形の小さな刺突を施文している。西関東や中部地方の中期中葉に展開する勝坂2式土器に類似する。

307~310はC5群土器で、307は船元Ⅱ式に類似し、防坂系土器と併行する。308~310はC類の里木Ⅱ式に類似する土器で、交互刺突による波状文や沈線文を施文する。

311~315は、C6群B類の咲畑式に類似する土器群である。311は、口縁の立ち上がり部に貼り付けを押し引きで圧着させている。312は、そうめん状貼り付けで渦巻き文を描く。313は、口縁端部を平たくまとめたもので、太く深い沈線により渦巻き文が描かれているものと思われる。314は、肥厚させて丸みのある山形口縁の下に3本の太い雨だれ文を施文している。咲畑式の文様構成を残す新しい段階のものか。315は、キャリバー形口縁部で2条の沈線を引き、端部に刻みを施す。SH3の土器(200)と接合した。

316は、咲畑式に続く神明式の橋状突起で、そうめん状貼り付けに変わって斜め沈線により施文されたものである。橋状突起の上下にも橋部がついていたようである。

SK9 (第40・41図 318~321、図版22)



第41圖 土坑(SK)出土繩文土器(2)

直径約70cm、深さ約8cmの浅い土坑で、中に数点の石が入っていた。

318は、早期後半に西日本を中心として展開した押型文系の高山寺式土器である。外面に約1.1cm×0.6cmの穀粒状楕円形押型文を施文する。内面は太い斜行沈線が約1.5cmの間隔を置いて施される。本遺跡では包含層からも同様の土器が出土している。また、平成4年の調査では高山寺式土器に続く穂谷式土器の破片が出土している。

319は2本沈線を引き、撚り戻しの無節縄文が施文されている。320はC14群C類の櫛描き沈線を引く無文系土器の口縁部である。

SK17 (第41図 322~332、図版13・23)

住居跡SH3の北東に隣接する土坑で、約75cm×約95cmの楕円形を呈し、深さ約46cmを測る。出土土器は、おおむね中期末にまとまる。

322・323はC10群土器で、キャリパー状口縁の深鉢である。322は、口縁部文様帯に貼り付け隆帯による渦巻き文を描き渦巻き内を櫛状工具による櫛描文で充填しておりE類である。胴部の文様は2本以上の垂下沈線で分割して、矢羽根状櫛描文を施文している。323の隆帯内の施文方法はわからない。

324~327は、深鉢A類のうち、口縁部文様帯を沈線で表現する在地系のC11群土器である。324は、端部を肥厚させたキャリパー状口縁で、沈線による区画文の内部を刺突で充填したものである。本資料では区画文に挟まれた渦巻き文が肥大化し、その内部も刺突で充填している。口縁部文様帯と胴部文様帯を、口縁部文様帯に連結した波状沈線で区画している。胴部は、垂下する2条の沈線で分割し、縄文を充填している。325は、口縁下に2本の沈線を引き、さらに4本の縦位沈線を用いて区画文を描き約8mmの刺突で充填している。口縁内側端部をややつまみだしている。326は325の文様構成を省略化したような感がある。3点はA類、327は区画内文様の不明なD類である。

328は、深鉢A類のうち口縁部文様帯を多重沈線で表現するC12群土器。329・330は、胴部文様を垂下する微隆起と櫛描文で表現するC15群土器C類である。

331はC18群土器で、底部から大きく外に開く浅鉢である。波状口縁の頂部に1つの突起と2つの突起が各4個づつ交互についている。口径約32cm、底約9.5cm、高さは約16cmを測る。北白川C式に属するものであろう。

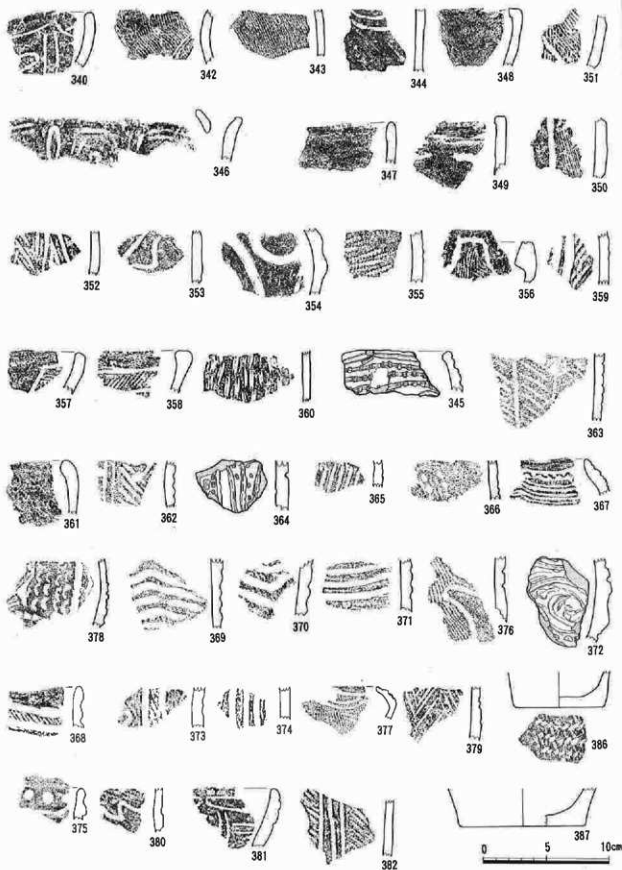
SK18 (第41図 333~341、図版23)

1号住居跡の北側に掘り込まれた径1.7m前後の楕円形の大型土坑である。出土した土器から、この住居に伴う土坑と考えられる。

333は粒の細かい砂状の胎土で固く焼かれた土器で、全体に赤茶色をしている。深鉢形土器の底部近くで、上側に隆帯・刻み状の斜め短沈線・半截竹管状工具による連続刺突を縦位に配置している。西関東の中期中葉にあたる勝坂2式土器に類似するもので、中部地方では藤内式に併行する。SK8の306とともに勝坂式土器の主要分布圏にちかいタイプのものである。

334は、C11群B類の土器で、口縁部に1条の沈線を引き、文様帯を2条の沈線で区画して太い矢羽根沈線を描くもので、1号住居跡床面に張り付けて出土した土器(59)と同一個体である。

339は、幅1~1.2cmの粘土ひもを蛇行して張り付けた文様をもつ。2号住居跡で出土した口唇



第42圖 土坑 (SK) 出土繩文土器 (3)

部や端部に蛇行するそうめん状の粘土ひもを貼り付けた土器(183)に文様構成が似ており、183の文様要素をデフォルメして胴部に転移したのか。時期・形式とも不明でC21群とするが、中期末の土器か。

340は波状口縁で、口縁下に沈線が横走り、波頂部下に2本の沈線を垂下させて、その両側にヘアピン状の沈線を横位に描く。沈線内に縄文はみられない。中期末の土器であるが、限りなく中津式(K1群)に近いものである。

335・336は無文系土器C14群C類。337は、帯縄文を胴部に転がす中末から後期初頭の土器。338は、蛇行する2条の沈線に太い矢羽根沈線を施文するC15群B類の土器である。341はK1群の磨消縄文土器である。

SK19(第42図 342~358、図版23)

1号住居に接し、SK18に切られている大型の土坑である。出土した土器群から、住居跡に伴う土坑と思われる。

342~344は中期後半の土器で、342・343は里木Ⅱ式系土器、344は咲畑系土器のくびれ部の波状沈線である。

345はC11群A類で、口縁部下に4本の沈線を引き、下3本には沈線状に刺突を施している。この沈線列の下に曲線状の沈線がみられる。口縁内部をやや肥厚させる。指頭圧痕により破片の中央部がつぶされている。346は、醍醐遺跡にもみられる北白川C式の深鉢C類と呼ばれる土器の中空山形突起で、C13群B類の沈線による文様を描くものである。外面は突起に沿って3条の沈線をめぐらせ、その中にS字文を描いているようである。突起天部には二重の沈線がめぐり、縁帯部にはヘアピン状沈線を施す。347~349は無文土器。350~353は、垂下沈線と櫛描文や矢羽根沈線、蛇行垂下沈線を施文するC15群・C16群土器。354は、C17群の胴部に曲線的な沈線を施文する土器で、壺形の器形をもつ。中期末から後期初頭に多くみられる器形である。

356~358は、K1群の磨消縄文をもつ土器で、356は山形口縁で、口縁端部および縁帯部を肥厚させている。C13群の山形突起をもつ深鉢(346)と356は、時期的に中期末から後期初頭として共存してもおかしくない土器群である。

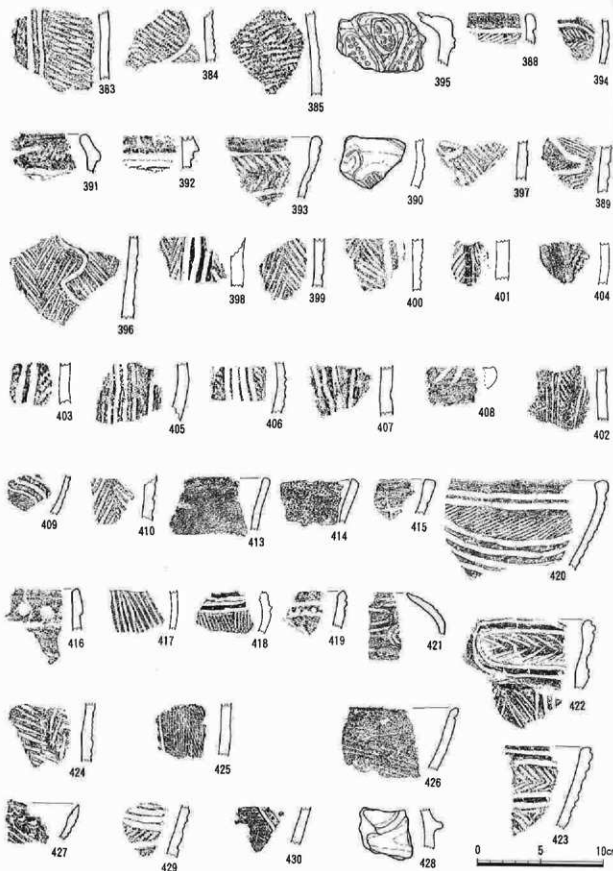
SK20・21(第42図 359・360、図版23)

SK20は、1.1m×1.1mの楕円形土坑で、底に角礫が集められていた。出土した土器はほとんどなく、359はC15群B類の2本の垂下沈線と矢羽根沈線で表現したものである。SK21は、SK20の東側にある。360は、先が欠けた二股状工具で短い沈線が乱雑に引かれている。SK30で口縁部が出土しているので後述する。

SK23(第42図 361~366、図版23)

出土土器があらかた中期末にまとまる土坑である。360は隆帯区画内に沈線を充填するC10群D類。362・363はC15群B類で、363は1本の垂下沈線で胴部を幅3cmに分割し区画内に斜沈線を描く。364はC16群B類で、垂下沈線内に刺突で充填する。

365は、半截竹管文を横並べに施文するもので、器壁が薄く、中期中葉に中部地方西部にみられる土器か。366は、赤く焼けた細かい精選された胎土がC4群土器に類似する。縦に2条D字文が施文されている。



第43回 土坑(SK)出土縄文土器(4)

SK24 (第42図 367~376、図版24)

SH4の北側の接する1.4m×0.7mの不定形の土坑である。凶化できなかったが、C5群土器の小破片を比較的多く含んでおり、比較的時期幅の広い遺物が出土している。

367は里木Ⅱ式系土器で、口縁部に沈線を2本引いて丁寧に交互刺突することによって波状文を描く。その下に竹管文を施文している。C5群C類である。368~371は、吹煙系の口縁部および胴部で、立ち上がる波状口縁の下に2本の沈線を引き、その間に刻みを施す。これに続く波頂部の下には、渦巻き状沈線が引かれているものと思われる。369・370は同一個体で、371とともに吹煙系土器のくびれ部の連弧文であろう。中期後半の土器群である。

372はC10群F類土器の口縁部文様帯で、隆帯により渦巻き文を描いている。渦巻き文の下の刺突は、口縁部文様帯と隆帯を区画するものであろう。373はC15群A類で、垂下する2本沈線と描文・蛇行沈線により施文されている。374はC16群C類。375は、有股肥厚した口縁部に円形刺突を施す。376はK1類の磨消縄文をもつ土器である。

SK25・26 (第42図 377~380、図版24)

調査区の南端に位置する隣り合う土坑で、SK25は直径約1m、SK26は2.3mの長細い形をしている。SK25からはC5群土器の小破片など中期の土器が出土している。377は、強く屈曲する口縁で、端部に連弧文を施すC5群C類の里木Ⅱ式に類似する。378は細かい胎土で焼かれた薄手の土器で、半截竹管状工具による押し引きと、連続する4列の刺突を施している。東海系の中期中葉の土器か。SK26からは、矢羽根沈線をもつC15群土器(379)と後期の磨消縄文土器片(380)が数点ずつ出土している。

SK28 (第42・43図 381~389、図版24)

中期末から後期初頭の土坑である。381は、口縁部に向かい合うへアピン状の沈線区画をもつもので、C11群土器の沈線区画が口縁部直下まで押し上げられて、中に何も施文しない退化したものと考えられる。中期末の土器である。382~384は同一個体で胴部を3本の垂下沈線で分割し、縄文を転がしたうえで中央に蛇行沈線を垂下させる。386・387は平底の底部である。386は外反せずに立ち上がるもので、底部疔痕をもつ。388・389はK1群土器で、389は376と同一個体である。

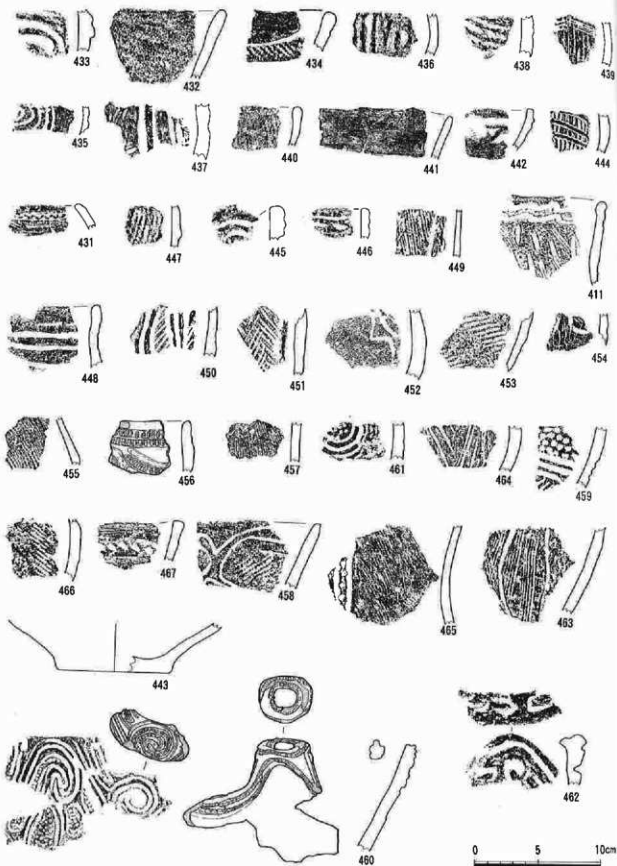
SK29 (第43図 390~407、図版24)

径約1m、深さ約55cmを測る、平面が隅丸方形を呈する土坑で、埋設土器SX5や配石遺構4に隣接する。出土した土器は、ほぼ中期末の時期に固まる一群である。

390~392はC10群土器で、口縁部文様帯を隆帯によって表現する。390は区画内に縄文を施すものである。393・394はC11群で区画内に矢羽根沈線を施す。394は、細い矢羽根沈線の下にもう一列向きを変えて斜沈線を施す。395は、北白川C式でいう深鉢C類で、口縁部を折り曲げて、区画内に刺突を充填している。C13群のA類である。

396~401はC15群土器で、胴部に垂下する沈線や微隆起をもち、矢羽根沈線を施文する。396~399は沈線や蛇行沈線を垂下させるB類。400・401は微隆起を垂下させるC類である。

402~405は、垂下沈線と縄文で表現する胴部をもつC16群土器。406・407は、曲線的な沈線や微隆起をもつC17群である。



第44図 ピット(P)出土縄文土器(1)

SK30 (第43・44図 408~411、図版24)

408は、刻み目をもつ隆帯が剥離したもの。409は薄手の土器で、波状沈線間に刺突を施す。411は、先が二股に欠けた工具による沈線で、口縁部に2条の波状文を引き、胴部にかけて粗雑な短沈線を引いている。ハの字文とするなら、曾利式土器にみられる密なハの字文が粗雑なものに変わり縦の区画がなくなる唐草文系土器の文様に類似する。口縁部の波状文も飛驒の唐草文土器にみられる手法という。これらの影響を受けた土器か。

SK31 (第43図 412~417、図版24)

配石遺構4に伴う土坑である。

412はC10群F類土器で、隆帯で渦巻き文を表現する。413~415は、口縁部が無文のC14群A類の土器である。416は、SK24の375と同一個体で、口縁外面を有段肥厚させ刺突する。417は条線文土器である。

SK32 (第43図 418~427、図版25)

418・419は里木Ⅱ式系土器で、419は、口縁部の沈線間に刺突を施している。C5群C類である。420は、寸胴形を呈する深鉢の口縁部で、2本と4本の沈線区画内に縄文を充填している。吹如系の文様構成で越美山地山間部にみられる。C6群B類。

422・423は同一個体でC10群C類である。口縁文様帯の隆帯区画内に矢羽根沈線を施文し、胴部は3本の垂下沈線で分割し矢羽根沈線を施す。424は、蛇行して垂下する微隆起に矢羽根沈線を施文する胴部でC15群D類。

SK33 (第43図 428~430、図版25)

住居跡SH4の北東に掘り込まれた、直径約1.2mの土坑である。

428はC10群C類。429はC17群C類。430は補修穴をもつ。

P1・2・3・7・9 (第44図 431~437、図版25)

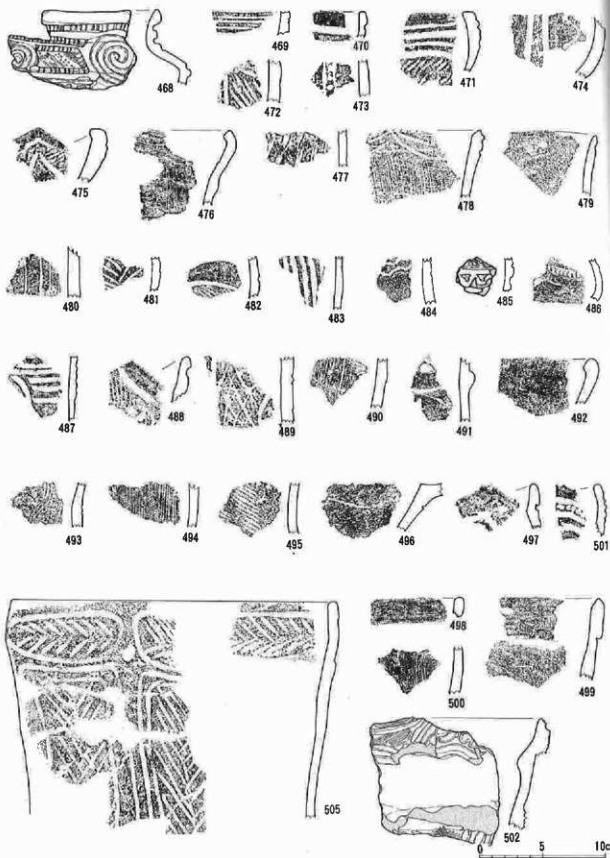
土器埋設遺構SX2周辺で検出したピットからの出土品を一括する。431はP1から出土した。C5群上器のC類で口縁部に交互刺突による波状文をもち、波状の沈線を施す。里木Ⅱ式に類似するものである。P2出土の432はC14群A類の無文系土器口縁部。P3からは433~435が出土した。433は隆帯で表現する口縁部でC10群上器、434は、磨消縄文を文様にもつ口縁部で、SX2の243と同一個体のK1群の中津式系土器である。435は多重の渦巻き文をもつ縁帯文土器の胴部と思われ、K2群に属す。P3はSX2と時期を同じくする遺構か。436は、隆帯で表現する壺形土器の胴部と考えられる。437は、C13群B類で、北白川C式という深鉢C類の山形口縁である。

P10 (第44図 438~443、図版25)

直径約30cmの小さなピットから比較的まとまって遺物が出土した。438・439はC5群土器で、438は大きく粗い縄文を施す赤く焼けた土器で船元式に類似する。439は、里木Ⅱ系土器である。440・441は無文土器口縁部。442は、口縁部に隆帯を貼り付ける薄手の土器である。443の底部は大きく外に開く。

P13・14 (第44図 444~446、図版25)

1号住居SH1の北東で検出したピットで、444は、P13出土のC5群土器。445・446は、P14出



第45図 ビット(P) 出土縄文土器(2)

土の土器口縁部で、445は口縁部文様帯を沈線で描くC11群である。

P15 (第44図 447~454、図版25)

1号住居SH1内の北側で検出したピットで、約60cm×40cmの楕円形を呈する。底に約25cm大の扁平な石を置く。447は、口縁外面をやや肥厚させ貝の背圧痕で施文する。C5群A類船元Ⅱ式に類似する。448は大きな土器で、口縁部外面を折り曲げて肥厚させ、3本の沈線で文様を描く。C6群B類の咲畑系土器である。449~451はC15群土器で、450・451は、垂下する微隆起で胴部を分割し矢羽根文や蛇行する微隆起を中央に描く。452は曲線的な沈線で文様を描く壺形土器の胴部で、C17群の土器。453は、縄文間に無文帯を置く帯縄文を施文した土器で、中期末から後期初頭にみられる。

P16 (第44図 455・456、図25)

1号住居内の北側で、SK18に切られた状態で検出した。455・456は、どちらも中期後半の土器で、455は燃糸文を施す里木Ⅱ式土器の胴部。456は、沈線による渦巻き文と押し引き沈線で施文するキャリパー状の口縁部で、咲畑系の土器である。そうめん状の貼り付けを捨てたやや新しい時期のものと考えられる。出土遺物から、P16は1号住居に先行する遺構である。

P20 (第41図 457~467、図版26)

1号住居内の西側で検出した径約50cm、深さ約60cmの円形土坑である。中期末にほぼまとまる土器群が出土した。住居に伴う遺構と考えられる。

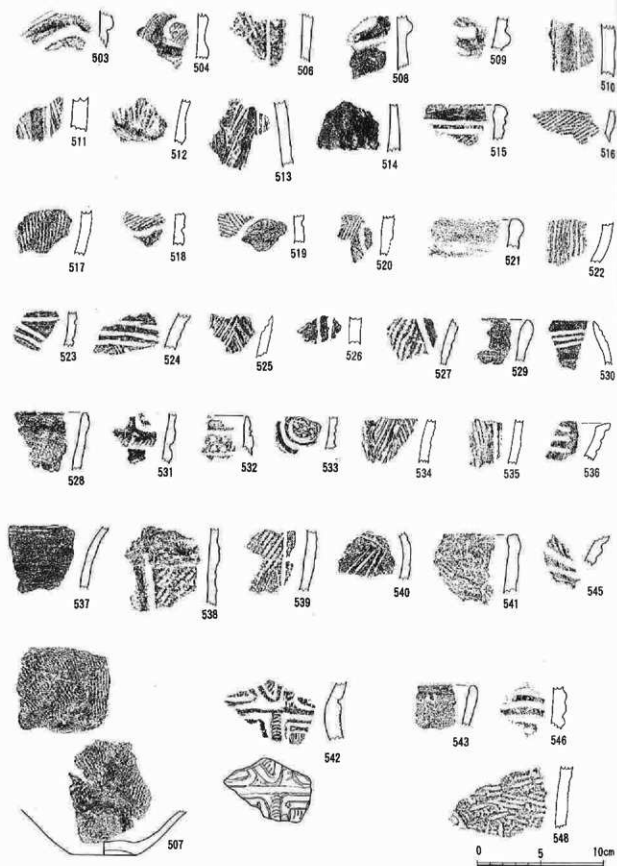
457は、C5群に属す土器である。458は、口縁部区画内に縄文を充填するもので、C10群A類と考えられるが、隆帯でなく沈線による区画になっている。459は、C11群A類の口縁部文様帯を刺突で充填するもので、胴部の矢羽根沈線がみえる。460・461はC13群A類である。460は中空の山形突起をもついわゆる深鉢C類で、住居跡履土から出土した68と同一個体である。462も山形突起で、文様を沈線で描くB類である。外面は口縁に沿って沈線を描き、中央にS字文、その両側にも斜めにS字文を施文し、折り返した口縁頂部や縁帯部にも同様にS字文を施している。463は、垂下沈線と櫛描文のC15群A類。464はB類の矢羽根沈線文である。465はキャリパー形深鉢のくびれ部で、垂下する2本の沈線間に刺突を施す。本遺構において中期末に所属する遺物とすると、日本海側の平式の影響を受けたものか。

P22 (第45図 468、図版26)

3号住居SH3の東側に位置する。468は、口唇部が立ち上がるキャリパー形口縁で、そうめん状貼り付けを圧着させるため押し引きにより文様を描く。キャリパー一部上部には沈線による渦巻き文を施文し、これは側面についで渦巻き文を描く可能性がある。上からと横からの視点を意識した文様構成である。渦巻き間には押し引きで区画文を作り、区画内に縄文が残る。口縁内部は指押さえて成形する。C6群A類、か畑式土器である。

P24 (第45図 469~475、図版26)

3号住居の西端で確認したピット。469・470は中期後半のC5群とC6群土器、472は、C15群B類。473・474は、C16群の土器で、474は壺形土器か。475はK1群で、波状口縁の磨消縄文土器である。



第46図 ビット (P) 出土縄文土器 (3)

P25・26・28・29・31 (第45図 476~483、図版27)

P25から平成8年調査区となる。P25~31は、調査区の南東側で検出した。476は、櫛栞文をもつ口縁部でC14群C類の土器である。477は、SK30出土の411と同一個体。478・479はP26から出土した。478は外反気味の口縁部で、櫛栞文を地文にして口縁部に刻みを施し、口唇部に連弧文を描く。中期中葉から後半の土器で、船元Ⅲ式系の土器か。480はP28、481はP29、482・483は、P31から出土した。

P37・38・39・41 (第45図 484~497、図版27)

5号住居SH5周辺のピットである。484~489はP37から出土した。484・485はC5群の土器で、485は2条の粘土紐を貼り付けた波状文で里木Ⅱ式の系統か。486・487は、C6群の喫煙式系の土器で、486は強く屈曲した口縁で刺突列を施文する。488は波状口縁で、篋状工具による細い沈線で施文する。491~496はP39から出土した。491は、C10群隆帯区画の土器。493は、蛇行する併行沈線をもつ。495は、帯縄文を施文する。496は、後期初頭の双耳壺と考えられる。細い連続刺突を耳の部分に押し引く。後期初頭の双耳壺の耳は本来器壁を突き抜けないが、本資料は穴が空いていたものと思われる。497はP41から出土した波状口縁である。

P47 (第45図 498~500、図版27)

4号住居SH4の西に隣接するピットで、498は、喫煙系土器(C6群)の立ち上がる口縁の先端部である。499は、口縁部外側を中期特有の有段肥厚させるもので、里木Ⅱ式あたりに併行するか。

P49・50・51・52 (第45・46図 501~522、図版27)

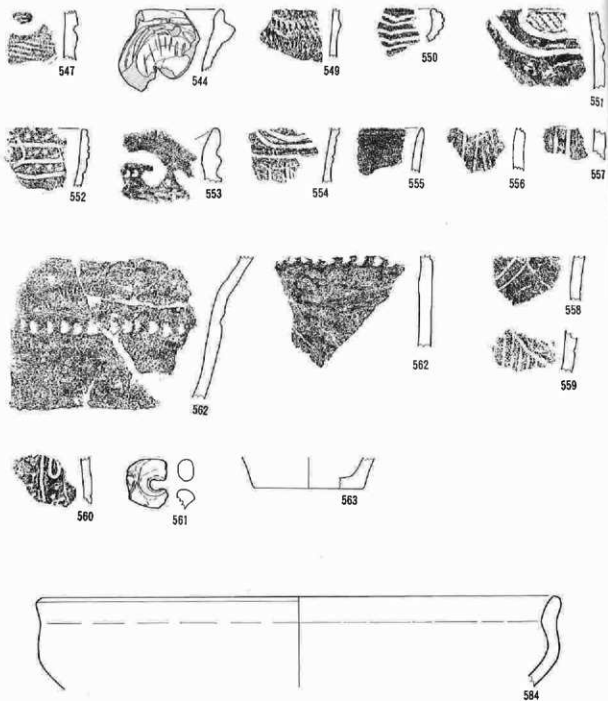
調査区西側中央付近のピット群である。

501~506はP49から出土した。501は、C6群B類の喫煙系土器。502は、C7群の神明式土器に類似するもので、口縁部外側を肥厚して曲線的な沈線や櫛栞文で施文している。無文帯を置いて胴部との境にも隆帯をもつ。上下の隆帯間に橋状把手がついていた痕跡がある。胴部は3本以上の垂下沈線に櫛栞きの矢羽根文が描かれる。口縁内部には低い蓋受けがつく。そうめん状貼り付けがみられないことや蓋受けが退化していることから、神明式でも時期的に新しいものであろう。503・504は、C10群の隆帯区画をもつ土器。505は、楕円形の沈線区画内に矢羽根沈線を描き、区画間の下に円形刺突をしている。胴部は、2重の沈線により長方形に分割され、雑な矢羽根を描く。C11群B類の土器である。506は505と同一個体の可能性がある。P49は、中期後半から中期末にまとまる。

507~511は、P50から出土した。507は、C5群C類の里木Ⅱ式土器のくぼみ底の底部である。燃承文が底部付近まで施文される。508・509は、隆帯区画のC10群土器。510・511は、C15群C類の垂下する微隆起と櫛栞文をもつものである。それぞれ同一個体である。

512~520は、P51から出土した。512は、隆帯の両側に半截竹管による平行沈線文を施文しており、船元Ⅲ式に類似する。513は、蛇行して垂下する微隆起と沈線で施文する胴部で、C15群D類である。514は脚付き土器の底部付近で、脚がついていた部分が外側に盛り上がっている。515~520は同一個体で、K1群の中津系土器である。このピットでは中期と後期が混在している。

521・522は、P52から出土した。このピットは小破片が多いが、里木系土器片と中期末の土器で



0 5 10cm

第47図 ビット(P) 出土縄文土器(4)・包含層出土(584)

まとまる。

P53・54 (第46図 523～536、図版28)

4号住居SH4の北西端にあるピットで、中期末が主体の土器片が出土している。

523はC6群に類似する。524は口縁部と胴部を沈線で区画する文様帯で、胴部に櫛状工具による矢羽根文が引かれる。525・526はC15群の土器である。527はC16群A類の垂下沈線と縄文で表現された胴部で、沈線には鋭利な刺突が施されている。52・529は無文系土器の口縁部で、528は植物の実を転がした擬縄文を施文している。西日本の中期末から中津式段階にみられる。

530～536はP54から出土した。530はC6群の咲畑系の土器。531は、隆帯を貼り付け、沈線に刺突を施している。532はC11群、533はC13群土器の胴部であろう。534・535は、垂下する微隆起と矢羽根沈線をもつ。

P55 (第46図 537～540、図版28)

4号住居SH4内の両側にあるピットである。537は、咲畑系土器の胴部であろう。538・539はC16群で、538は、P53の527と同一個体で、胴部と口縁部の間を隆帯で区画する。

P56・57・58 (第46図 541～543、図版28)

541はP56からの出土で、C14群B類土器で、胴部に結節縄文により蛇行沈線状の文様を施する。中期末に属す。542はP57から出土した中期中葉に西関東・中部地方を中心に分布する勝坂2式に類似する土器である。細かい砂で赤く焼き締められた土器の屈曲部で、半截竹管の内面を用いた半隆起状の沈線による縦横に走る沈線や区画文のコーナーがみえる。縦位の沈線や区画文内に爪形文を刻む。内面は丁寧に磨かれている。543はP58出土の無文土器口縁部である。

P59 (第46・47図 544～548、図版28)

中期末にまとまるピットである。544は、口縁部に隆带状の盛り上がり貼り付け、内部に細い沈線を描き、外縁部には、太い沈線によるS字文を描く。口縁外面を折り返して肥厚させている。545・546は、隆帯により口縁部に施文する土器でC10群土器。545は隆帯内に縄文を充填する。547は、中期末の渦巻き文を描く土器である。

P60 (第47図 549～561、図版28)

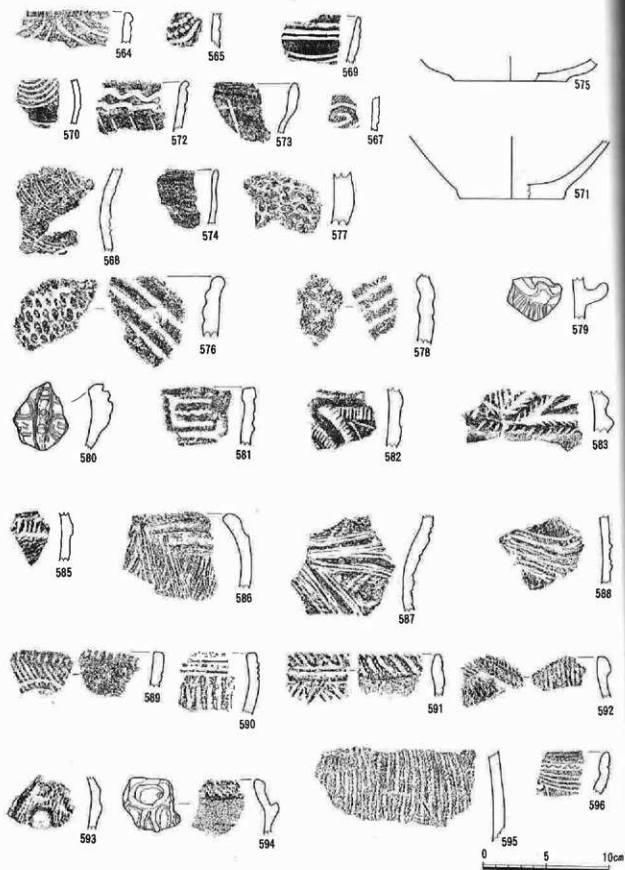
549は、隆帯上に刻みを施す船元Ⅱ式土器に類似するもので、C5群A類土器である。550はC5群C類に属す可能性のある内彎する口縁部。551はC10群土器。552～554はC11群土器で、554は、沈線区画文の下に垂下線と矢羽根沈線を施す。556・557は胴部の矢羽根沈線文。558～560は、胴部に曲線的な沈線で文様を描く。561は、装飾的な突起で、C7群などに伴うものか。

P62 (第47図 562・563、図版28)

562は、C6群B類の咲畑式土器の系統を残す土器で、大型厚手のものである。器形はキャリパー状の深鉢をなす。胴部の屈曲部や下にD字状の刺突をめぐらせている。

焼土1 (第48図 564～568、図版29)

調査区南側の焼土層1内から検出した。564は、口縁部文様帯を連弧文だけで表現した中期末の土器。568は胴部のくびれ部で、曲線状の櫛描文を施文する。



.. 第48圖 焼土・包含層出土 (1) 縄文土器

焼土3 (第48図 569~571、図版29)

5号住居SH5の北側にある焼土層で、569は、C5群B類の咲畑系土器の口縁部である。沈線だけで区画文を描く。570は、C12群の多重沈線で施文する。

焼土4 (第48図 572~575、図版29)

4号住居SH4の南東に隣接する焼土層から出土した。572は、二又になった施文具で口縁部に2条の横位波状文と斜めの短沈線を施す。575は、外に大きく張り出す底部で、壺形土器のものか。

ハ、包含層から出土した土器

包含層から出土した土器を報告する。遺構からは中期末から後期初頭を中心とする土器が出土しているのに対し、包含層からは、早期、中期中葉から後期中葉、晩期と比較的幅広い時期の遺物が出土している。

ここでは、中期末から後期初頭以外の土器群を中心に取り上げた。したがって、必ずしも包含層全体の様相を紹介したのではなく、諸般の事情から十分な分類・考察が加えられていないことをお断りして、資料の提示としたい。

S1群土器 (第48図 576~578、図版30)

いずれも早期後半に西日本を中心に展開した押型文系の高山寺式土器である。576は外反する口縁部で、長径1.1cmの穀粒状の楕円文を施文している。口縁内部には太い斜め沈線を引く。578は、表面の楕円文が摩滅している。3点とも胎土が似ており、同一個体の可能性がある。

C1群土器 (第48図 579、図版30)

細かい胎土を用いて硬く焼かれた土器で、角状の突起を貼り付け、その下に沈線を施している。東海地方中期初頭の北裏C1式土器に類似するものか。

C2群土器 (第48図 580、図版30)

内彎する口縁部で、縦に隆帯が付き、その上を刻んでいる。隆帯の脇に押し引きを施し、半截竹管による平行沈線文が描かれる。五領ヶ台式系の土器か。

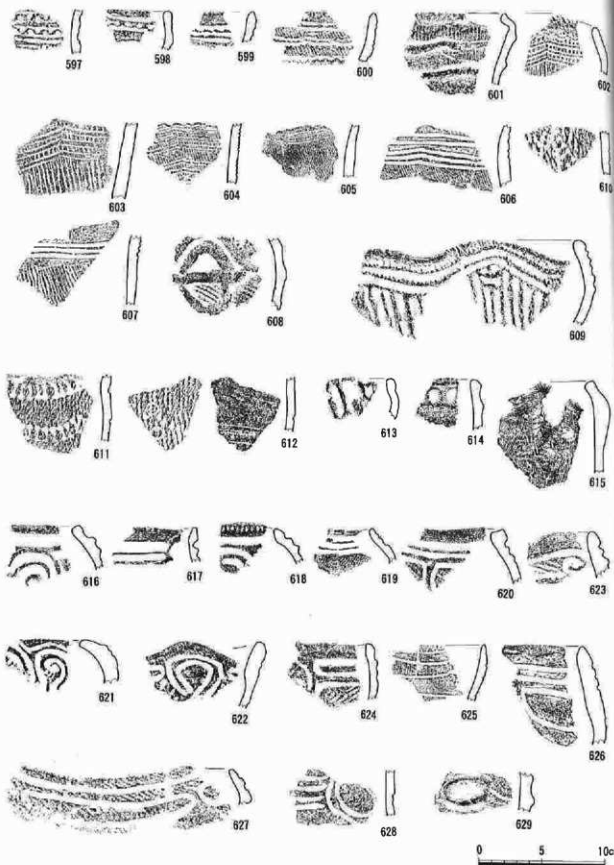
C4群土器 (第47・48図 580~584、図版30)

中期中葉を中心に展開する勝坂式土器に類似する土器群である。581は、口縁端部を肥厚させ、隆帯とC字の爪形文を横位に施文する。勝坂式の古いタイプか。582は、キャタピラ状の押し引きが施文される。583は、勝坂式より新しい中部高地系の土器。584は無文土器で、独特の細かい胎土が本遺跡出土のC4群土器と類似する。

C5群土器 (第48・49図 585~615、図版30・31)

中期中葉から後半に属する船元式・里木Ⅱ式系の土器をまとめた。585・592が船元Ⅱ式土器(A類)に類似するほかは、ほとんどが船元Ⅲ・Ⅳ式(B類)と里木Ⅱ式(C類)に類似する土器群である。

586は船元Ⅲ式に類似し、隆帯両側に半截竹管を施し三角形の区画文を描く口縁部である。590は、船元Ⅳ式にみられる縄巻き縄文の可能性がある。593は、隆帯上に刻みをもつもので船元Ⅱ式の可能性がある。594は、隆帯の貼り付けにより文様を描くもので、内面に縄文を施している。船元Ⅲ式の範疇か。596・597は、里木Ⅱ式の交互刺突による波状文がみられ、597は粗い。



第49图 包含层出土绳文土器 (2)

599は、交互刺突になっていない。600は、半截竹管で無理矢理引いたような波状文と、交互刺突による波状文をもつ。602は、口縁部下に半截竹管による波状文と連弧文を描く。609は、陸帯と太い沈線で描く波状口縁で、船元Ⅲかその直後の土器か。610は刺突による連弧文を描く。614は、貝殻による圧痕をもつ。

C 6 群土器 (第49・50図 616~634、図版31)

B類の吹煙式に類似するか影響を受けた土器である。630は、厚手の土器の胴部で沈線による渦巻き文と雨だれ文を描く。632・634は吹煙式土器の胴部で、634は連弧文の下に縄文を施している。吹煙式土器に類似もしくは影響を受けた在地系の土器である。627は、粗い胎上をもつ。

C 7 群土器 (第50・53図 635~640、図版12・31・32)

神明式土器に類似する土器群である。635は、口縁部の文様帯が立体化し、上下2段の貼付隆帯に橋状把手がついている。把手の上部は角状に張り出しており、円形の窓が開いている。橋状把手と隆帯上には太い刻みが施されている。口縁部内面には蓋受け状の段がめぐる。636は、立ち上がる口縁を持つ口縁部がキャリパー状に張り出すもので、沈線区画内には斜行沈線を入れて矢羽根文を描いている。区画文の間には把手が張り出している。この把手の上部に押し引きを施していることから、吹煙式の要素を残した神明タイプの土器と思われる。637は、粗い押し引き状の渦巻き文と刻みで文様を描く装飾把手。638は、立体的な口縁部で、口縁端部に太い円形刺突を施している。639は、押し引きで文様を描いている。640は、口縁部に立ち上がる装飾把手と思われ、内側に渦巻き文を描く。

C 8 群土器 (第51図 674、図版30)

関東地方を中心に中期後半に展開した加曾利E式に類似する土器である。

C 9 群土器 (第51図 675~677、図版30)

北陸系またはC 6・7・15群以外の東海系の特徴をもつ中期土器を取り上げた。675・676は、竹管状工具で文様を描く土器で、東海地方中期中葉の山田平式あたりの時期に該当するものか。北陸では上山田式土器との関連がうかがわれる。

C 10 群土器 (第50図 641・642、図版32)

中期末の口縁部文様帯を隆帯で表現するもので、在地色の濃い土器である。包含層からも多く出土した。641は、隆帯区画内に刺突で充填している。胴部文様帯と区画する隆帯上に刻みを施す。

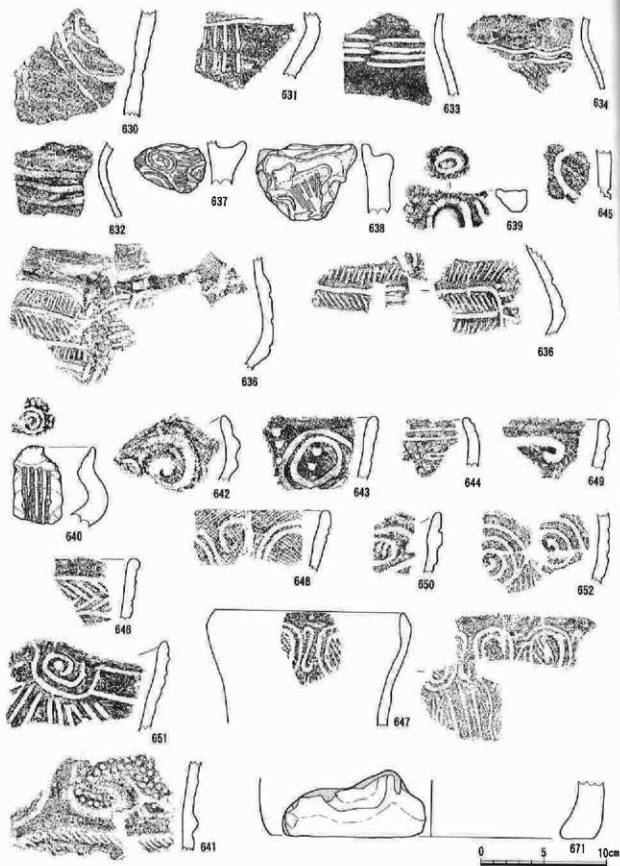
C 11 群土器 (第50図 643~650、図版12・32)

口縁部文様帯を沈線で表現する在地系の土器である。包含層からも多く出土している。647は、二重沈線による楕円形区画と、S字文を交互に配した口縁部文様帯をもつもので、胴部は3条の沈線で区画した中に、蛇行沈線で矢羽根沈線を描く。648も、ほぼ同様の口縁部文様帯をもつが、楕円形区画内は斜沈線でなく縄文を充填し、口縁端部にも縄文を施している。650は、ゆるやかな波状口縁をなす。

C 12 群土器 (第50図 651~652、図版32)

口縁部文様帯を多重沈線で描く土器である。

C 13 群土器 (第51・53図 653~659、図版12・32)



第50图 包含层出土绳文土器 (3)

北白川C式という深鉢C類と呼ばれる、山形突起などをもつ中期末の土器群。653は、おそらく5本の大波状の山形突起が立つもので、突起部外面にワラビ手文をはさんだ二つの窓枠状の区画文をもつ。区画内を矢羽根沈線で充填し、胴部は2本の垂下沈線で区画された中に斜行沈線を施す。656~658は同一個体で区画内を刺突で充填している。

C18群土器 (第51・53図 660・661、図版12・51)

浅鉢類。660は、交互刺突による大ぶりの波状文を3条めぐらせたもので、北白川C式に併行するか、やや古い時期のものと考えられる。丹後地方の平遺跡にみられる土器に類似する。661は、器面を精製したもので、特に内面を丁寧に磨いている。破片の下部には煤が付着している。無文系の浅鉢であろう。

C19群土器 (第51・52図 662~668、図版32・33)

662~666は、特殊な装飾をもつ壺型土器である。662~664は有孔壺型土器で、662は、2本の橋状把手が縦に並んでいる。663は、橋状把手が横につき、つばがまわる。つばを貫いて縦に孔が開けられている。664もつばがまわる口縁部で、つばを貫いて孔が開けられている。665・666は、壺型土器の装飾か。668は、後期初頭の壺型土器の胴部突起と考えられる。667は後期の注口土器の胴部で、口が欠けた部分だと思われる。668は、注口の部分である。

C20群土器 (第50・51図 669~671、図版33)

脚付き土器の脚部である。669は土器との接合部。670は脚部。671は窓が開く脚部の底部で、破片の両側が窓部にあたる。

C21群土器 (第53図 672・673、図版12・33)

時期および所属する形式不明の土器。

K1群土器 (第51・53図 678~687、図版12・33)

磨消縄文をもつ後期中津系土器である。683は口縁端部に縦の隆帯を張り付け、上に刻みを施している。687は、口縁端部に2条の沈線を引き、中に竹管状工具による刺突列を施す。中期末の北白川C式から後期初頭の中津式の時期に属するものか。

K2群土器 (第52図 689~714、図版33)

遺構からはほとんど出土していないが、包含層である程度みられた後期中葉の縁帯文系の土器を一括した。時間の都合で細かい分類をおこなえなかったが、口縁部文様帯が内面肥厚するもの、外面肥厚するもの、上面が肥厚するものの3タイプがある。690は、縁帯部が上部へ張り出したもので、沈線による区画文を描いている。口縁部が多角形をしているようで、角に縦の刺突を施している。691~693は同一個体で、波状口縁をもつ薄手の土器である。波頂部に粘土ひもを渦巻き状にしたものを3つ張り付けている。土器の内外面には、竹管状工具による粗い連弧文と斜行沈線を引き、内面波頂部に刺突を施す。堀之内2式の新しい段階か加曾利B1式あたりに併行するものか。701も波状口縁の内面を肥厚させ、口唇部に太い沈線と2点の刺突文をもつ。堀之内式の影響を受けたものか。703は、元住吉山I式土器。704は、口縁端部内面を肥厚させて、渦巻き文を施す鉢形の土器か。706は、縁帯文土器に伴う壺型土器。710~712は、無文系土器で口縁部を肥厚させている。口縁部には横に胴部には斜めの条痕を施している。北白川上層II式の無文系深鉢である。714は、口縁部の一部を肥厚させて山型に突出させた無文系土器で、バケツ型を呈す



第51圖 包安層出土陶文士器(4)

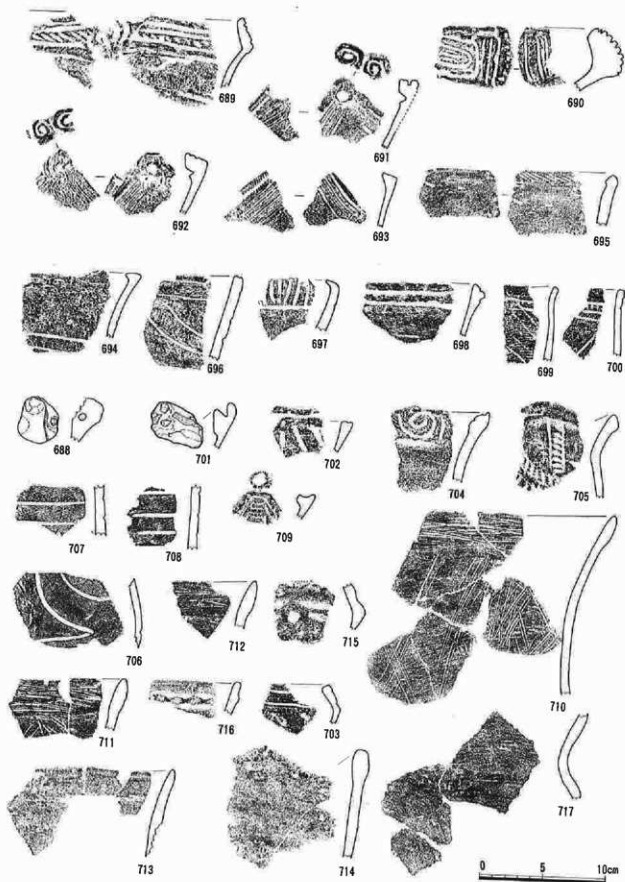
と思われる。堀之内Ⅱ式の影響がみられる。

K 3 群土器 (第52図 715、図版33)

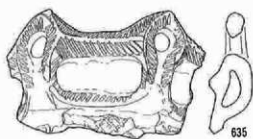
後期後半の宮滝式土器に類似するもので、1点みられた。715は土器の屈曲部で、扇状圧痕とその左右に2条の沈線を引く。沈線の始まりに刺突を施す。

B 1 群土器 (第52図 716・717、図版33)

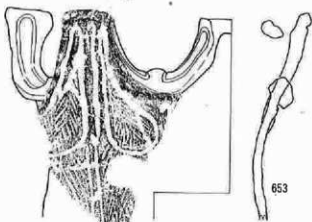
716は、口縁部下に凸帯を巡らせた晩期の土器で、凸帯上を指で押さえた刻みをつける。717は、晩期に属すと思われる壺型土器である。



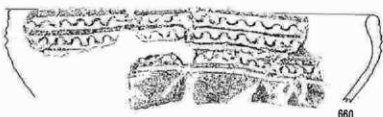
第52圖 包含層出土繩文土器 (5)



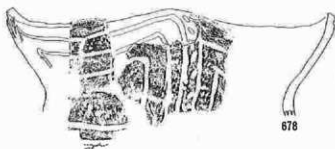
635



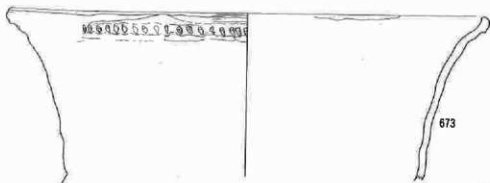
653



660



678



673

0 5 10cm

第53圖 包含層出土編文土器 (6)

2. 土製品

土製円盤 (第54図、図版34)

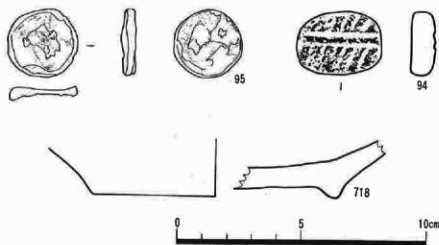
94は、平らな土器片の周縁を研磨して、3.4cm×2.5cmの楕円形に整形したものである。C5群の土器を用いている。95は、土器片を利用したものではなく、手づくねによって円形に作られたもので、中央を薄くし、平らな周縁を作り出している。直径約2.75cm、周縁の厚さは5cmを測る。用途は不明である。

3. その他の土器

山茶碗 (第54図 718、図版13)

今回の調査で、縄文時代以外の遺物として出土したのは、山茶碗ただ1点である。

718は、包含層から出土した山茶碗の底部で、三角形の高台を張り付けている。



第54図 土製品・山茶碗

4. 石器類 (第55図～第63図、図版34～図版38)

今回の調査で出土した石器類は、合計93点である。その種類と点数は第2表の通りである。

これらの石器類は、遺構内からの出土29点、包含層からの出土64点である。共存する土器よりほとんどが、縄文時代中期から後期にかけて製作・使用・廃棄されたものと考えられるが、時期の限定できる遺構から出土した石器以外は、時期的な限定はできなかった。出土した石器には石鏃、石匙、削器、打製石斧、磨製石斧、打欠石錘、切目石錘、凹石・磨石・叩き石、石皿、石棒である。石器の組成グラフは第64図の通りである。これを見ると、本遺跡では石錘の割合が約52.2%と、石器群のほぼ半数を占める。凹石・磨石、石皿がこれに続く。

以下、器種ごとに概要を説明する。

(1) 石鏃 (1)

1点出土した。平成4年の調査でも1点しか出土しておらず、本遺跡での出土数は、わずかに2点である。

1は、透明で美しい完形の石鏃で、石材は水晶である。1号住居SH1の覆土から出土した。鋭角な尖頭部をもち、基部は中央部がU字型にえぐれ、両脚の先端が尖る。

(2) 石匙 (2)

1点出土した。SK32からの出土である。石材は背みがあった質の悪いチャートで、作りも粗雑である。上方につまみがつけられており、直交するその下端の縁部が刃部となっている、いわゆる横型の石匙である。

(3) 削器 (3・4)

削器は剥片の縁部に刃部をつくるものである。はっきり削器といえるものは1点である。3は、剥片の縁部に、両側からの連続的な打欠によって調整することで刃部を作り出している。材質はチャートである。4は、削器としてとらえられないかもしれないが、三角形をした大型の剥片で、一辺を片側から磨いて刃部を作り出している。

(4) 打製石斧 (5～7)

3点とも包含層から出土した。5・6は、基部に向かって幅が細くなる、いわゆるバチ型をしている。5は、刃部が丸く磨滅している。6はサヌカイトを用いており、鋭利な刃部を作り出している。7は、刃部が開き、胴部から基部先端にかけて細くなる形状をしている。刃部は使用されて丸くなっている。

(5) 磨製石斧 (8～16)

9点出土している。9が1号住居SH1で出土、13がSK33で出土したほかは、すべて包含層からの出土である。14・15は基部を欠いているが、その他の石斧はほぼ完形をしている。最大幅から分類すると、45～50mmのもの3点(10、14、15)、57～62mmのもの5点(8、9、11、12、13)。その他、小型のもの1点である(16)。

8～11は、胴部がほぼ平行な、いわゆる短冊形と呼ばれるもので、いずれも刃こぼれが認められるが、10は、刃部の中央が刃こぼれによりくぼんでおり、刃を改めて研いでいる。11は、断面

が楕円形をしている。12・13は、基部に向かって幅が狭くなる、いわゆるバチ型をしており、13は三角形に近い形をしている。15は、刃こぼれがほとんど見られない。16は、小型石斧で基部が欠けている。木などに当てて基部を叩いて割る、たがねのような使われ方をしたのか。

(6) 打欠石錘 (17~20)

扁平な自然礫の長軸の両端を、打欠によってえぐりを入れている。打欠石錘は4点で、うち18・19は、SK29からの出土である。SK29は、出土した土器から、ほぼ中期末にまとまる土坑で、2点はこの時期に属するものであろう。また、17も1号住居SH1の履上から出土しており、本遺跡の打欠石錘は中期末から後期初頭の遺物であると考えられる。17は、打欠も少なく礫の自然なくほみを利用している。18は、平面が円形に近い礫を用いており、重さ25gを測る。19は、長さ約7.9cm、幅4.2cmの楕円形の礫で作られている。重さ約48gで、表面に擦痕が残されている。20は、重量が128gと出土した石錘のなかでもっとも重い。

(7) 切目石錘 (21~62)

43点出土している。楕円形の礫の長軸両端を研磨によって刻むもので、手のひらに入る大きさの円礫を用いている。遺構から出土したのは15点で、全体の35%を占める。その内訳は以下の通りである。32・35・54は1号住居SH1、52は4号住居SH4、62は5号住居SH5、51はSX5、44はP47、38はP50、26・47はP52、30はSK23、40はSK25、48はSK26、46はSK32、27はSK29から2点の打欠石錘とともに出土した。SH1・SH5・SK26以外の遺構は、出土土器からすべて中期に属するものであり、特にSH4・P52・SK23・SK29は中期末でまとまっている。このことから、切目石錘の多くが中期に属する遺物であると考えられる。

重さは最小のもので10g、もっとも重いものは100gを測り、平均値は約35gとなる。15~45gが中心の小型品がほとんどで、85g以上の大型品は3点である。なお、本遺跡出土の石錘については、第5章で田井中氏より考察いただいているので、こちらを参照いただきたい。35・37・54・56は、打欠と切目の両方が見られる。48は、表裏とも刻みの先を胴部にのぼして一周させている。網を結わえた糸を固定させるために施されたものと思われる。刻みの入れ方も、断面が角なものや丸いものがあり、前者が主流を占める。また、石の硬い材質からか、2・3度刻みを入れているものがある。多量に出土している小型軽量のもは、漁労器具に使われたものと考えられるが、大型のものが漁労に使われたものか、いわゆるもじり編みなどに使われたものかはわからない。

(8) 磨石・凹石・叩き石 (63~83)

あわせて20点出土している。遺構からの出土は2点で、5号住居SH5とSK33から磨石が出土しているほか、SH5東側の集石に凹石が1点混じっていた。これらの石器類は、基本的に円形や楕円形のやや扁平な河原石を利用している。河原石の平面もしくは側面に擦痕が認められるものを磨石(63~73)とし、一面ないしは両面以上に、打撃か擦りによる窪みがみられるものを凹石(74~80)とした。81は、手のひらのなかで握れる大きさの細長い河原石で、側面に打痕があり叩く使用が想定され、叩き石とした。

63・64は、大人の手のひらにすっぽり入る自然礫で、明瞭な擦痕はみられないが、擦られたようにやや減っている面があることから磨石とした。67~70は、握れる砂岩系の自然礫で、全体に擦られている。71~73は大きめの円礫で、72は、5mm大の石粒を含む質の粗い石材である。両平面・

側面とも平らで、69などのようにきめの細かい磨石とは違う用途が考えられる。74は、手の平に入る自然礫で、一面が平らで2点の窪みがみられる。75は、石のほぼ全面に、中央がやや深い窪みがあり、他の窪み石と趣を異にしている。78は、側面3面に擦痕がみられるもので、石棒状を呈していた可能性がある。

82・83は、配石遺構2として紹介した、南北に並んだ二つのピット内から出土した。82は、3面に擦痕があり、残る1面には3点の窪みがみられる。また、頭の部分も擦られて三角形をしている。83も、表裏2面が全面擦られており、焼けた痕跡がみられる。両者とも、砥石や磨石が2次利用されて、立石に用いられたものと考えられる。

(9) 石皿 (84~88)

5点出土した。厚さ3~6cmの板状のもの、大型の自然礫を用いたものの2種類がみられる。84~86は前者、87・88は後者にあたる。87は、上面が皿状に窪んでいる。SX4の土坑内で深鉢形土器とともに出土した。88は、1号住居SH1の炉跡に接して出土したもので、住居に伴うものである。

(10) 石棒 (89)

残存長約11.4cm、断面円形で直径約2cmの小型の磨製石棒である。一方にやや細くなっているが、両端を欠いているので、全体の形状はわからない。包含層から出土した。

(11) 剥片 (90~93)

90~92は、チャートの剥片で、削器としての利用も考えられる。

第2表 石器観察表

石鏃

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|------|
| 1 | SH1 | 2.0 | 1.3 | 0.3 | 0.5 | 水晶 | 完形 |

石匙

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|------|------|
| 2 | SK32 | 4.3 | 5.2 | 0.8 | 18.0 | チャート | 完形 |

削器

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|------|------|
| 3 | 包含層 | 4.0 | 4.8 | 0.8 | 18.0 | チャート | 完形 |
| 4 | 包含層 | 6.9 | 8.1 | 0.9 | 60.0 | 粘板岩 | |

打製石斧

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|-------|------|
| 5 | 包含層 | 10.7 | 5.3 | 0.8 | 70.0 | 粘板岩 | 完形 |
| 6 | 包含層 | 8.7 | 3.9 | 1.3 | 50.0 | サヌカイト | 完形 |
| 7 | 包含層 | 11.0 | 5.3 | 2.4 | 210.0 | 不明 | 完形 |

磨製石斧

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|-------|------|
| 8 | 包含層 | 12.5 | 6.1 | 2.3 | 305.0 | 蛇紋岩 | 完形 |
| 9 | SH1 | 11.9 | 5.9 | 2.5 | 310.0 | 不明 | ほぼ完形 |
| 10 | 包含層 | 10.1 | 5.2 | 1.8 | 205.0 | 蛇紋岩 | 完形 |
| 11 | SH1 | 14.4 | 5.7 | 3.0 | 360.0 | 細粒閃緑岩 | 完形 |
| 12 | 包含層 | 13.0 | 6.2 | 2.8 | 370.0 | 不明 | 完形 |
| 13 | SK7 | 9.5 | 5.9 | 2.3 | 225.0 | 不明 | 刃部欠損 |
| 14 | 包含層 | 5.9 | 5.0 | 2.5 | 120.0 | 不明 | 基部欠損 |
| 15 | 包含層 | 6.2 | 4.5 | 2.1 | 90.0 | 不明 | 基部欠損 |
| 16 | 包含層 | 5.8 | 2.1 | 1.0 | 20.0 | 不明 | ほぼ完形 |

打欠石鏃

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|------|
| 17 | SH1 | 4.4 | 3.7 | 1.1 | 20.0 | 不明 | 完形 |
| 18 | SK29 | 4.8 | 4.1 | 0.9 | 25.0 | 不明 | 完形 |
| 19 | SK29 | 7.9 | 4.2 | 0.8 | 48.0 | 不明 | 完形 |
| 20 | 包含層 | 8.0 | 4.9 | 2.2 | 128.0 | 不明 | 完形 |

切目石鐘

| Nb | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|
| 21 | 包含層 | 3.7 | 1.8 | 2.0 | 10.0 | 不明 | 完形 |
| 22 | 包含層 | 3.9 | 2.5 | 1.0 | 8.0 | 凝灰岩 | 1/2欠損 |
| 23 | 包含層 | 4.2 | 2.3 | 0.8 | 11.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 24 | 包含層 | 3.1 | 2.5 | 1.3 | 13.0 | 凝灰岩 | 1/2欠損 |
| 25 | 包含層 | 4.0 | 2.4 | 1.2 | 15.0 | 不明 | 完形 |
| 26 | P52 | 3.8 | 2.5 | 1.2 | 15.0 | 不明 | 完形 |
| 27 | SK29 | 3.5 | 3.3 | 1.0 | 15.0 | 不明 | 完形 |
| 28 | 包含層 | 4.0 | 2.5 | 1.2 | 17.0 | 硬砂岩 | 完形 |
| 29 | 包含層 | 4.8 | 3.2 | 0.8 | 18.0 | 不明 | 完形 |
| 30 | SK23 | 4.7 | 2.7 | 1.0 | 18.0 | 不明 | 完形 |
| 31 | 包含層 | 4.6 | 2.4 | 1.2 | 20.0 | 硬砂岩 | 完形 |
| 32 | SH1 | 4.0 | 2.9 | 1.3 | 20.0 | 不明 | 完形 |
| 33 | 包含層 | 4.0 | 3.2 | 1.1 | 20.0 | 不明 | 完形 |
| 34 | 包含層 | 4.4 | 3.0 | 1.4 | 20.0 | 硬砂岩 | ほぼ完形 |
| 35 | SH1 | 4.6 | 2.8 | 1.3 | 20.0 | 不明 | ほぼ完形 |
| 36 | 包含層 | 5.9 | 2.2 | 1.5 | 20.0 | 不明 | 1/3欠損 |
| 37 | 包含層 | 5.4 | 3.2 | 1.0 | 20.0 | 凝灰岩 | ほぼ完形 |
| 38 | P50 | 4.5 | 2.8 | 1.6 | 25.0 | 不明 | 完形 |
| 39 | 包含層 | 5.0 | 3.0 | 1.5 | 30.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 40 | SK25 | 4.6 | 3.0 | 1.4 | 30.0 | 不明 | ほぼ完形 |
| 41 | 包含層 | 5.2 | 2.9 | 1.6 | 30.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 42 | 包含層 | 5.3 | 3.2 | 1.4 | 30.0 | 不明 | 完形 |
| 43 | 包含層 | 5.5 | 3.8 | 1.3 | 31.0 | 凝灰岩 | ほぼ完形 |
| 44 | P47 | 6.0 | 2.9 | 0.9 | 32.0 | 不明 | 完形 |
| 45 | 包含層 | 4.9 | 3.4 | 1.4 | 32.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 46 | SK32 | 5.5 | 3.7 | 1.2 | 32.0 | 不明 | ほぼ完形 |
| 47 | P52 | 5.4 | 3.0 | 1.6 | 35.0 | 不明 | 完形 |
| 48 | SK26 | 5.0 | 3.3 | 1.7 | 38.0 | 不明 | 完形 |
| 49 | 包含層 | 5.6 | 3.5 | 1.3 | 38.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 50 | 包含層 | 5.2 | 2.8 | 2.1 | 42.0 | 不明 | 完形 |
| 51 | SK5 | 6.2 | 3.1 | 1.6 | 43.0 | 不明 | 完形 |
| 52 | SH4 | 6.5 | 3.5 | 1.4 | 43.0 | 不明 | 完形 |
| 53 | 包含層 | 5.8 | 3.6 | 1.6 | 45.0 | 不明 | 完形 |
| 54 | SH1 | 6.2 | 3.2 | 1.4 | 45.0 | 不明 | ほぼ完形 |
| 55 | 包含層 | 5.2 | 3.8 | 1.9 | 52.0 | 不明 | 完形 |

| | | | | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-------|
| 56 | 包含層 | 6.3 | 4.3 | 1.3 | 57.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 57 | 包含層 | 6.1 | 4.4 | 1.6 | 62.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 58 | 包含層 | 7.2 | 4.1 | 1.6 | 63.0 | 不明 | 1/4欠損 |
| 59 | 包含層 | 6.2 | 4.7 | 1.9 | 70.0 | 不明 | 完形 |
| 60 | 包含層 | 8.9 | 4.4 | 2.0 | 85.0 | 凝灰岩 | 2/3欠損 |
| 61 | 包含層 | 8.6 | 4.0 | 2.2 | 97.0 | 凝灰岩 | 完形 |
| 62 | SH5 | 6.1 | 4.9 | 2.3 | 100.0 | 不明 | 完形 |

磨石・凹石・叩き石

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|--------|----------|-------|
| 63 | 包含層 | 6.9 | 5.5 | 3.8 | 190.0 | 砂岩 | 完形 |
| 64 | 包含層 | 7.0 | 5.6 | 4.9 | 230.0 | 不明 | 完形 |
| 65 | 包含層 | 9.6 | 6.7 | 5.1 | 465.0 | 不明 | 完形 |
| 66 | 包含層 | 8.3 | 5.0 | 4.2 | 180.0 | 不明 | 3/4欠損 |
| 67 | 包含層 | 9.8 | 7.1 | 5.5 | 590.0 | 不明 | 完形 |
| 68 | 包含層 | 11.0 | 8.7 | 5.4 | 715.0 | 硬砂岩 | 完形 |
| 69 | 包含層 | 11.4 | 8.8 | 4.8 | 700.0 | 流紋岩 | 完形 |
| 70 | 包含層 | 12.2 | 8.0 | 5.4 | 753.0 | 不明 | 1/4欠損 |
| 71 | P40 | 9.2 | 8.3 | 7.8 | 830.0 | 不明 | 完形 |
| 72 | 包含層 | 10.2 | 9.0 | 7.5 | 1170.0 | 細粒黒雲母花崗岩 | 完形 |
| 73 | 包含層 | 12.7 | 11.4 | 9.0 | 1790.0 | 細粒黒雲母花崗岩 | 完形 |
| 74 | 包含層 | 8.3 | 5.9 | 5.9 | 450.0 | 硬砂岩 | 完形 |
| 75 | 包含層 | 8.5 | 6.1 | 4.6 | 297.0 | 石英斑岩 | 完形 |
| 76 | 包含層 | 11.1 | 8.2 | 4.9 | 645.0 | 不明 | 完形 |
| 77 | 包含層 | 10.8 | 9.0 | 6.9 | 945.0 | 不明 | 完形 |
| 78 | 包含層 | 6.4 | 8.0 | 7.8 | 540.0 | 不明 | 欠損 |
| 79 | 集石内 | 11.0 | 9.3 | 3.4 | 712.0 | 砂岩 | 完形 |
| 80 | 包含層 | 11.1 | 11.5 | 6.7 | 1210.0 | 硬砂岩 | 完形 |
| 81 | 包含層 | 10.6 | 3.5 | 2.8 | 195.0 | 不明 | 完形 |
| 82 | 立石 | 34.3 | 12.0 | 10.8 | 3300.0 | 不明 | 完形 |
| 83 | 立石 | 36.2 | 15.7 | 9.2 | 9000.0 | 不明 | 完形 |

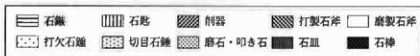
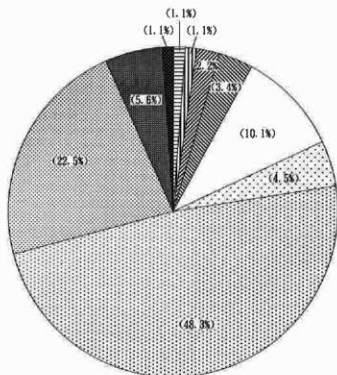
石皿

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|---------|------|-------|
| 84 | 包含層 | 13.7 | 13.8 | 3.1 | 1200.0 | 珪 石 | 欠 損 |
| 85 | 包含層 | 15.7 | 13.2 | 5.0 | 1970.0 | 緑閃石片 | 欠 損 |
| 86 | 包含層 | 18.4 | 18.6 | 6.0 | 3300.0 | 硬砂岩 | 欠 損 |
| 87 | SX4 | 18.6 | 28.9 | 16.1 | 10000.0 | 硬砂岩 | 1/4欠損 |
| 88 | SH1 | 39.5 | 37.2 | 12.7 | 23000.0 | 不 明 | 完 形 |

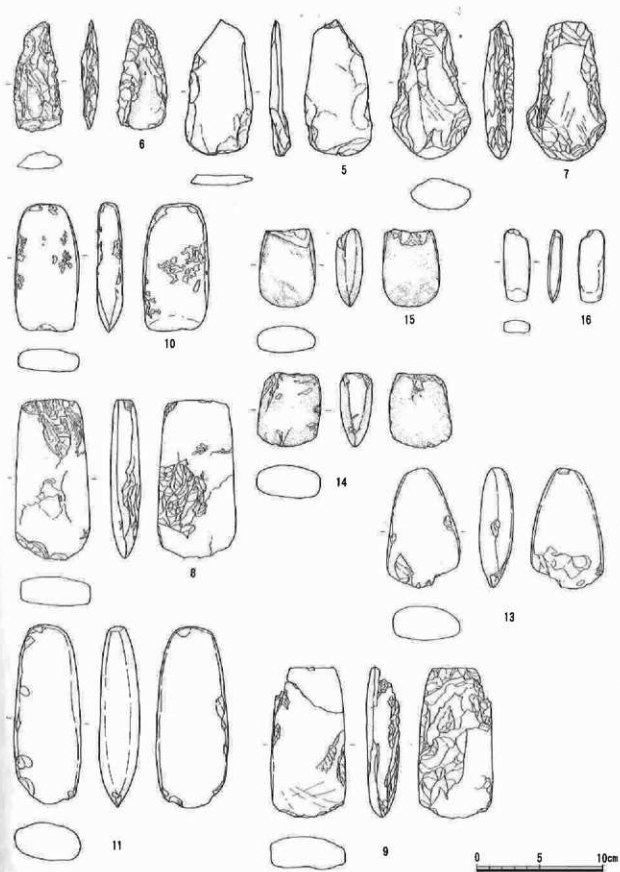
石棒

| No. | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石 材 | 遺存状態 |
|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|------|
| 89 | 包含層 | 11.4 | 2.0 | 1.6 | 60.0 | 不 明 | 両端欠損 |

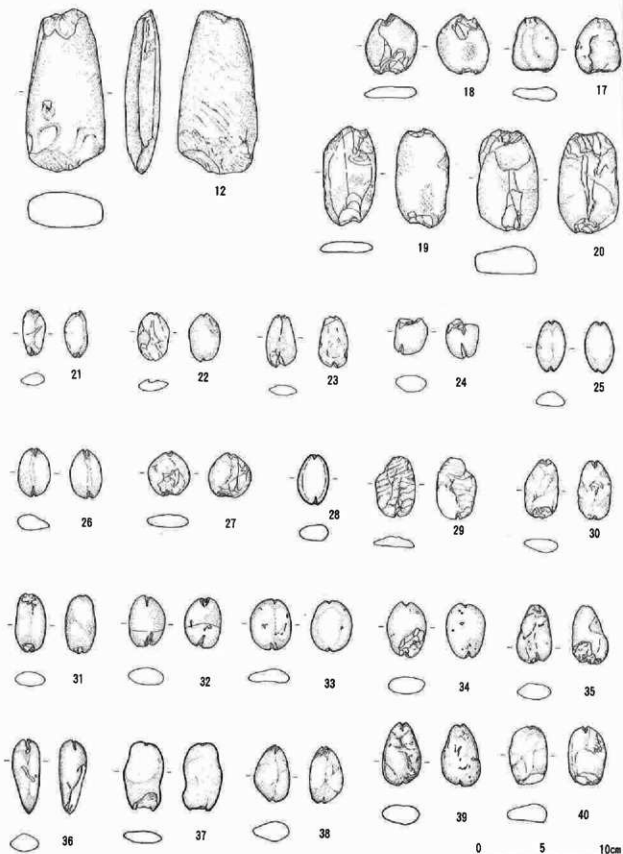
| 名 称 | 数 量 |
|--------|-----|
| 石 鏟 | 1 |
| 石 匙 | 1 |
| 削 器 | 2 |
| 打製石斧 | 3 |
| 磨製石斧 | 9 |
| 打欠石鏟 | 4 |
| 切目石鏟 | 43 |
| 磨石・叩き石 | 20 |
| 石 皿 | 5 |
| 石 棒 | 1 |



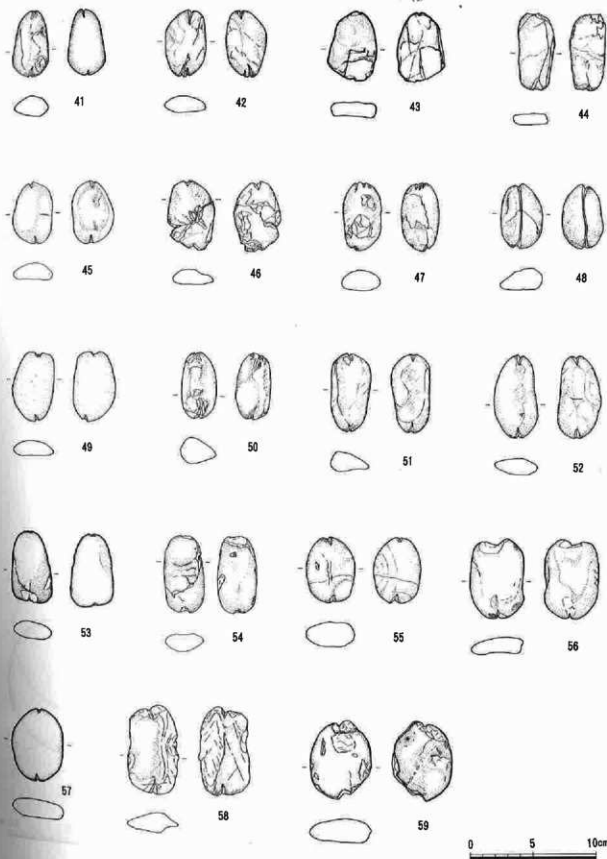
第64図 起し又遺跡出土石器組成



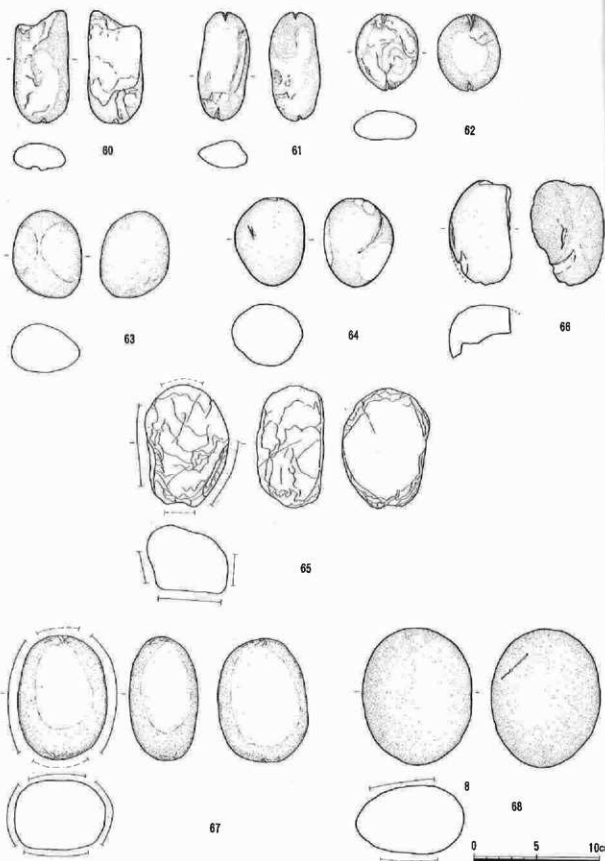
第56图 石器 (2)



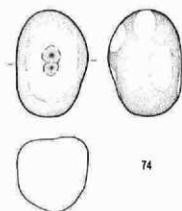
第57圖 石器 (3)



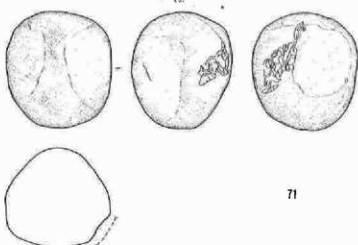
第58圖 石碇 (4)



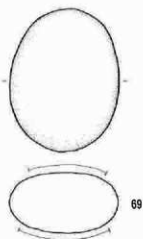
第59圖 石器 (5)



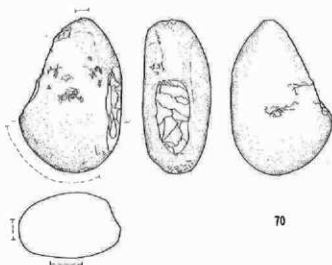
74



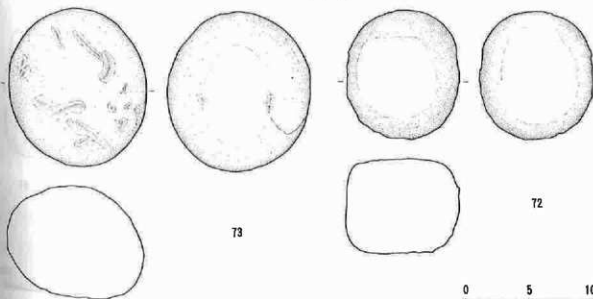
71



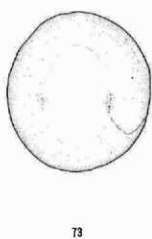
69



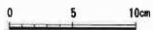
70



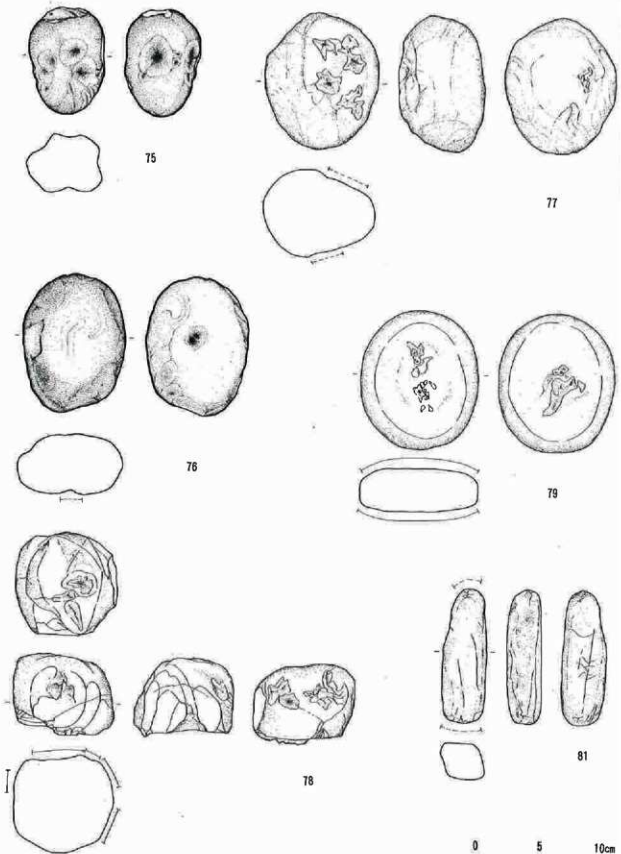
72



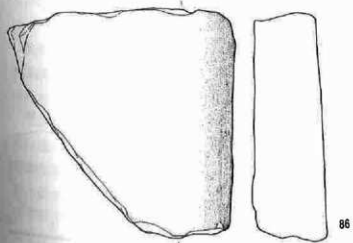
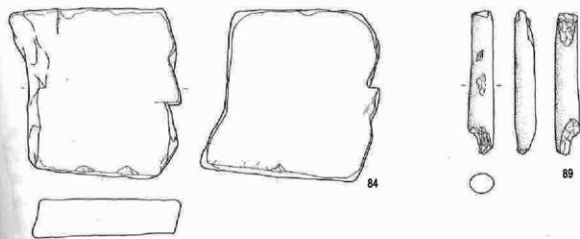
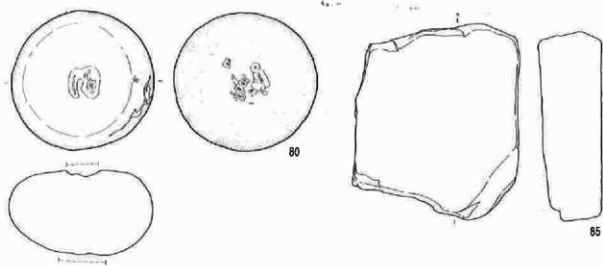
73



第60回 石器 (6)

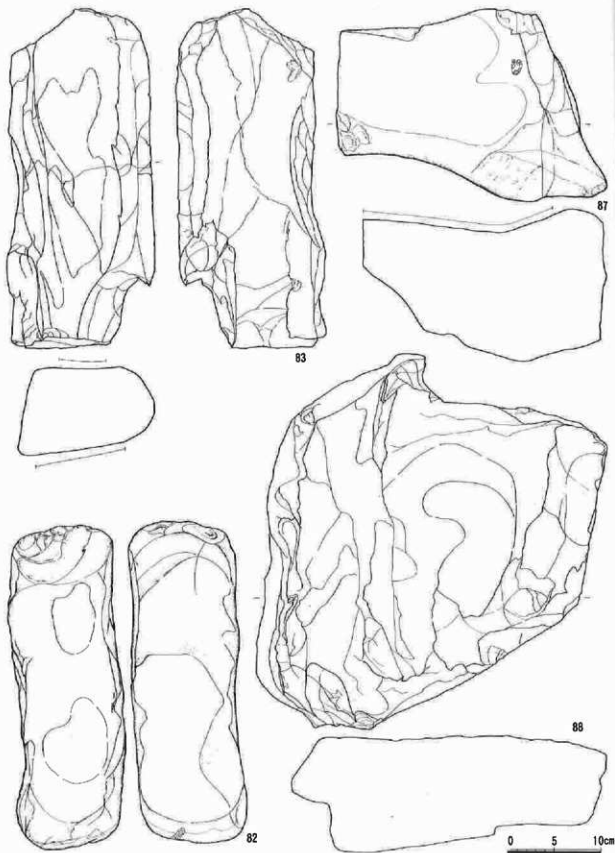


第61圖 石器 (7)



0 5 10cm

第62図 石器 (8)



第63圖 石器(9)

第4章 まとめ

土器について

包含層から出土した土器はバラエティーに富んでいるが、各遺構から出土した土器は比較的まとまっている。

起し又遺跡では、高山寺式土器や平成4年の調査で出土した穂谷式土器といった押型文土器最終段階の土器が、わずかではあるが出土していることから、縄文時代の古い段階（早期）から遺跡が始まっていることがわかった。前期から中期初頭の船元Ⅰ式までの土器は見られないが、中期前葉の船元Ⅱ式から後期初頭の中津式までは、比較的継続して集落が営まれているようである。包含層からは後期前葉の緑帯文系土器が出土しており、堀之内式の要素がみられるものや、中葉の元住吉山式土器や終末の宮滝式土器が散見できる。さらに、これ以降も何らかの活動があったようで、わずかに晩期の土器が出土している。

船元Ⅱ式から遺跡が始まるのは、近畿地方の他の遺跡でもみられる現象のようで、中期中葉では、基本となる船元Ⅱ・Ⅲ式土器に混じって、東海の山田平式に類似するものや中部地方の勝坂式などが入り、船元式土器分布圏の東辺部の遺跡として活発な交流がみられる。

中期後半になると、東海系の咲畑式土器に類似するものと、近畿の甲木Ⅱ式系の土器群が展開する。遺跡の中心となる中期の末葉には、両者の要素を残す土器群と、隆帯区画に刺突を多用する在地色の強い覆棚式に類似する土器が成立し、多くの系統の土器が同時に使われていたようで、複雑な様相をみせる。在地系土器は、沈線区画内にも刺突を充填するものから、大型の山形突起の土器となる。この時期には滋賀県東北部地域で起し又遺跡・配棚遺跡（東浅井郡浅井町）・番の面遺跡（坂田郡山東町）・古橋遺跡（伊香郡本之木町）などの集落が営まれており、在地色の強い土器など、一つの小文化圏としての独自性が顕著にみられる。また、起し又遺跡や番の面遺跡で、住居跡が発見されているのもこの時期である。

土器の出土状況や土器のもつ要素から、当遺跡において、中期末から後期初頭は一つのまとまった時期としてとらえることができそうで、中期末の在地系の大波状山形突起をもつ土器と同時に、外來の要素として中津式土器の古いものが共存している可能性がある。

後期は前葉の土器が多くみられ、中葉の頭くらいまでみられる。これは、越美山系でつながる奥美濃の旧徳山村（岐阜県揖斐郡藤橋村）の塚遺跡をはじめ、隣接する西美濃地域の春日村や池田町でも同様の現象のようだ。

土器群の基本は近畿にあると思われるが、美濃を中心にした東海系の影響を多く受けている。東は遠く関東から中部高地の土器である勝坂式などがみられる。平成4年度の調査で飛騨地方の特徴をもつ土器が出土したことから、飛騨から奥美濃を経由して入ってきたものであろう。勝坂系土器が出土している県内の遺跡への受け入れ窓口的遺跡でもある。伊吹山麓は、東日本と西日本を結ぶ重要な地点にあり、特に、東からの文化が近畿地方に流入する時期に、窓口的役割を果たし榮えている。晩期の杉沢遺跡では、飛騨・奥美濃地方の石器である御物石器が、県内で唯一出土している。近畿地方では奈良県の大森遺跡や橿原遺跡で出土しており、杉沢遺跡が近畿へ向

けての窓口であったことがわかる。中期末の東からの文化の搬入ルートは、中部高地から奥美濃を経由して、伊吹山北側の尾根道を利用して起し又遺跡や醍醐遺跡に入る山のルートが、重要だったと思われる。また、中期初頭の粟津湖底遺跡（大津市）では、搬入品の過半数が北陸系土器であるのに対し、時期や規模が違うとはいえ、起し又遺跡では明確な北陸系土器が1点も出土していない。北陸系土器の滋賀県への搬入ルートは、木之本方面から、琵琶湖沿いに進み、山間部には入っていないのではないだろうか。

遺構について

1号住居は、多少古い土器もあるがほとんど時期差なく、中期末のものと考えられる。2～5号住居も中期末から後期初頭というまとまった時期に属す。住居跡の切り合い関係がないことから、5棟が同時に存在したか、一時期に1～2棟づつが建っていたかはわからない。しかし、住居のプランが、槽田形を呈するもの1棟、円形1棟、隅丸方形2棟、不明1棟と違いがみられることや、炉の形態も、石囲い炉を持つもの2棟、地焼炉2棟、不明1棟と違いがあることから、各住居間に年代幅がみられるものと思われる。住居跡は、地形の制約から一様に山側を削ってつくられている。また、谷側には竪穴に接して大型の土坑が掘られているものが3棟あり、七坑内から出土した土器が、ほぼ中期末から後期初頭にまとまることから、住居に伴うものである可能性が高い。十坑の性格については不明である。縄文時代の竪穴住居跡は、湖北地方では、昭和30年に発見された番の面遺跡（坂田郡山東町）について2例目で、起し又遺跡のような山間部で発見されたのは県内では初めてのことである。また、県内の多くの中・後期の縄文遺跡が、湖岸および平野部の微高地上に位置しているのに対し、起し又遺跡は飛び抜けて高い位置にあり、縄文時代中期に、湖岸や平野部の文化とは別に、東からの影響を強く受けた山の縄文文化があったことが再確認された。

埋設土器は6基検出した。うち2基は、後期初頭の磨消縄文を持つ中津式土器が用いられており、4基が無文土器を使用していた。無文系土器の横位の1点以外は、正位に埋設されており、いずれも底部に穴が開けられていた。また、土器に接して石柱状の石が添えられていることから、同時期の同じ使用目的の遺構である可能性が高い。逆に、中津系土器を利用している方は、土器の底部穿孔がみられず、若干の時期差あるいは使用目的の違いがあるように思える。ただし、無文系土器も中津式に伴う可能性が高く、起し又遺跡の埋設土器は、全般に後期初頭のものである。

1号住居跡の山側では、多くの礫を検出した。これらは、石の一部が1号住居や2号住居の履土の上で検出されていることから、住居跡よりやや新しい遺構であろう。県内の配石遺構は、縄文時代後期のもので、中期末から後期初頭の段階でははっきりした遺構は発見されていない。配石遺構は、東日本の影響ではじまるものと考えられているが、今回の調査で、中期末から後期初頭に西日本に到達していることが明らかになった。

最後に、起し又遺跡の空間利用をみると、中期末は5棟の住居跡を伴う居住の場としての土地の使われ方がされており、後期にはいと、埋設土器や配石といった埋葬の場・祭りの場としての利用されていることが伺われる。

今回の調査では、縄文時代中期末を中心とする良好な遺構と、東日本と西日本の接点として重要な位置にあたる当地方の特性を示す土器群や、滋賀県北東部（湖北）という小地域文化圏独自の在地色の濃い土器群が出土した。しかし、第5章以外は執筆者の力量不足と時間的制約によって、不十分な報告とまとめになってしまった。実測図等についても、土器の情報や遺構の状況を第3者に伝えるには全く不備なものであることを痛感している。遺構は、現時点ですでに破壊されており、見る影もなく、調査担当者として深く反省している。土器・石器および配石遺構や炉を形成していた礎などは、町教育委員会で保管しているので、今後あらためて報告していく機会を持ちたいし、公開することで多くの研究者に広く活用され検討されることを願っている。

主要参考文献

- 泉拓良 1982 「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文時代中期後半を中心の一」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』
- 1988 「吹畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』
- 1989 「緑帯文土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』
- 伊藤樹樹・篠田通弘 1982 「美濃徳山村の切目石錘（越美山系をめぐって）」『岐阜史学』76
- 和泉村教育委員会 1976 『和泉村の埋蔵文化財』
- 1978 『後野遺跡』
- 磯部幸男・久永春男他 1960 『吹畑貝塚』（愛知県知多郡師崎町立師崎中学校）
- 伊吹町 1992 『伊吹町史 自然編』
- 1997 『伊吹町史 通史編上』
- 伊吹町教育委員会 1988 『杉沢遺跡発掘調査概要報告書』
- 1992 『伊吹町内遺跡分布調査報告書』
- 1992 『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅰ』
- 1993 『起し又遺跡発掘調査報告書』
- 1995 『内座遺跡発掘調査報告書』
- 1996 『杉沢遺跡豊棺墓の調査・谷海道遺跡』
- 岩瀬彰利 1991 「吹畑式土器の分布とその背景—縄文時代の通婚圏」『三河考古』第4号
- 植田文雄 1991 「拡張、あるいは展開する縄文文化—西日本における埋蔵の出現と実容をめぐって—」『滋賀考古』第5号
- 大阪府教育委員会 1992 『小阪遺跡』
- 大野市教育委員会 1982 『右近次郎遺跡Ⅰ』
- 1985 『右近次郎遺跡Ⅱ』
- 奥川弘成 1986 「吹畑貝塚の吹畑式土器」『知多古文化研究』2
- 1990 「知多半島における縄文時代中期の諸様相（その1）」『知多古文化研究』6
- 1993 「知多半島における縄文時代中期の諸様相（その2）」『知多古文化研究』7
- 各務原市教育委員会 1973 『伊吹遺跡発掘調査報告書』

- 可見町北真遺跡発掘調査団 1973 『北真遺跡』
 可見町教育委員会 1976 『宮之脇遺跡発掘調査報告書』
 京都教育大学考古学研究会 1989 「考古学資料室所蔵の縄文時代遺物資料紹介」『史想』22
 京大文学部埋蔵文化財研究センター 1985 『北白川追分町縄文遺跡の調査』
 京大文学部博物館 1991 『先史時代の北白川』
 紅村弘・増子康真 1977 『東海先史文化の諸段階 資料編』
 小林達雄他 1981 『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』
 小林行雄・藤岡謙二郎 1938 「近江坂田郡春照村杉澤遺蹟」
 岐阜県文化財保護センター 1993 『追分遺跡・下開田村平遺跡』
 1994 『戸入村平遺跡』
 1997 『山手宮前遺跡』
 1997 『小関御祭田遺跡』
 静岡県考古学会・東海考古学フォーラム 1998 『縄文時代中期前半の東海系土器群—北屋敷式土器の成立と展開』（シンポジウム予稿集）
 篠田道弘 1986 『大昔の徳山村—縄文人の息吹きを追って—』（徳山村教育委員会）
 島田貞彦 1928 「有史以前の近江」『滋賀縣史蹟調査報告』第1冊
 末木健 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』
 鈴木道之助 1991 『石器入門事典—縄文—』
 鈴木保彦・山本暉久 1988 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観2 中期Ⅰ』
 玉田芳英 1989 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観3 後期・晩期・純縄文』
 知多古文化研究会 1997 『愛知県南知多町の考古資料』
 徳山村の歴史を語る会 1984 『徳山村のあけぼのを求めて—岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告—』
 1984 『徳山村の遺跡（増補版）』
 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』
 能登川町教育委員会 1992 『今安楽寺遺跡』
 中川泉三 1924 「伊吹山下の石器」『考古學雜誌』14-13
 1928 「坂田郡春照村杉沢辻村義男邸出土の石斧と弥生式土器」『中川泉三著作集』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1989 『鳴鹿手島遺跡』
 古川町教育委員会 1993 『中野山越遺跡発掘調査報告書』
 米原町教育委員会 1986 『磯山城遺跡』
 間壁忠彦・間壁霞子 1971 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号
 間壁忠彦 1988 「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』
 増子康真 1978 「縄文中期後半土器の編年—東海地方西部地域—」『古代人』34
 増子康真 1986 「東海西部沿岸地域縄文中期土器形式の検討—北屋敷式の細別と咲畑式の検討」『知多古文化研究』2
 丸山竜平 1997 「伊吹山麓の縄文社会とその解体」『堅田直先生古希記念論集』
 南知多町教育委員会 1983 『林ノ峰貝塚Ⅰ』
 美濃加茂市教育委員会 1971 『神明遺跡発掘調査報告書』
 1973 『牧野小牧遺跡』

第5章 付論

起し又遺跡出土の石錘をめぐる

滋賀県文化財保護協会

田井中 洋介

1. はじめに

本報告書で報告された起し又遺跡出土石器93点のうち、剥片4点を除いた製品89点の中で、石錘が46点と過半数を占めている。これらの石錘の位置づけについて、滋賀県内や近隣府県の縄文時代の遺跡の状況などとの比較をとおして考えてみるのが本稿の課題である。

それに先立って、縄文時代の石錘の用途についての筆者の考えを若干述べておきたい。石錘の用途については、紐掛け部を擦り切って作り出した切目石錘については漁撈用の網の錘とすることで大方の意見の一致を見ているが、紐掛け部を打ち欠いて成形した打欠石錘については編み物用の錘とする渡辺誠氏の説があり(文献6)、漁撈用とすべきか見解が分かれている。切目石錘と打欠石錘が共に出土する遺跡について石錘の重量を計量してみると、一般的に打欠石錘の方が重い傾向にある場合が多く、この場合には両者に何らかの用途の違いを想定することが妥当であろう。ただし、両者の重量分布には重なり合う部分も多く、製作技術的にも紐掛け部を打ち欠いたのちに擦り切り技法を併用して作っているものや、一端は打ち欠きでもう一端は擦り切った成形したものも遺跡によっては認められ、打欠石錘のすべてを編み物用の錘として漁網錘から除外して考えることには問題があると考える。

筆者は別稿において、守山市赤野井湾遺跡出土の縄文時代早期の打欠石錘の用途を考えるために、滋賀県内出土の切目石錘などとの重量の比較を行い、打欠石錘のうち重量が80g程度までの比較的軽量のグループについては漁網錘とする考えを述べた(文献34)。本稿においても、漁網錘とすべきか否かの判断にあたっては、紐掛け部分の技法の違いを絶対視しないという立場で叙述を進めていきたい。しかしながら、他府県にまで視野を広げれば、100gを超えるような大型の切目石錘の出土が稀ではない場合も存在しており、本稿では何g程度までの石錘を漁網錘と考えるかについては、とりあえず保留としておきたい。

2. 起し又遺跡出土石器の概要

まず最初に、起し又遺跡の出土石器の概要を見ておきたい。今回の発掘調査では縄文時代中期前葉～後期初頭の集落跡が発掘されており、多くの土器や石器が出土している。報告された石器93点の半数近い46点が石錘であるが、紐掛け部分の製作技法を見てみると、打欠成形した石錘が4点あり、他の42点は擦り切り技法を用いた切目石錘であった(打欠技法との併用品を含む)。擦り切り技法を用いた中には、溝が全周する「有溝石錘」というタイプのものが1点存在するが、本稿ではこのタイプの石錘も切目石錘に含めておきたい。個々の石錘の所属年代は、遺構外出土のものなど明らかでないものが多いが、土器の出土量が最も多い中期末を中心とする時期の遺物が多いものと考えておきたい。

石錘の完形品39点の重量を10g刻みでグラフ化したものを第3図に示したが、9.6~128gの範囲に分布しており、20~30gのものが最も多い(註1)。平均重量は37.6gであるが、打欠石錘4点を除外した切目石錘のみの平均重量は35.5gである。打欠石錘の平均重量は、128gと大型のものが1点あるため55.7gと重い。この128gのもの以外に100gを超える大型品の出土はなく、出土石錘の大半が切目石錘であることと合わせて、起し又遺跡出土石錘は概ね漁網錘として使用されたものと考えて大過ないものと思われる。

石錘以外の石器では、磨石・凹石・蔽石の磨石類(註2)が合わせて20点、磨製石斧9点、石皿5点といった器種が多い。石器93点の中で剥片4点を除いた89点の中に占める比率は、磨石類24%、磨製石斧10%、石皿6%である(註3)。

3. 滋賀県内における縄文遺跡の石器組成と石錘

3-1. 縄文時代中期中葉以前の様相

起し又遺跡出土の石錘の位置づけを考えるにあたって、滋賀県内の他の縄文遺跡における石器組成の状況を石錘を中心に時代順に見ていきたい。

早期の石器組成を知るための良好な報告例として、守山市赤野井湾遺跡の深深A調査区を取り上げたい。早期末の土坑群が検出されており、土器型式で見ると上ノ山式から天神山式までの数型式の土器が出土していることから、石器の帰属時期もこの時期幅に収まることがほぼ確実である(文献34)。

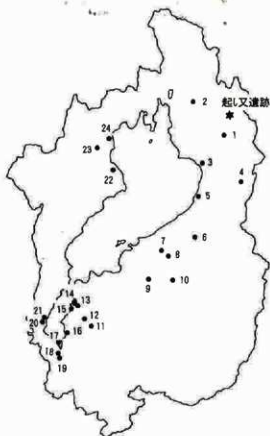
未製品や石核・剥片を除いた出土石器252点の中で石錘が106点あり、全体の42%を占める。これに次ぐのはスクレイパー、磨石、石皿、楔形石器などで、それぞれが10%前後を占めている。106点の石錘はすべて打欠石錘であるが、完形品と見なされる79点の重量をグラフ化してみると、重量分布のピークが10~30g、50~60g、90~100gの3カ所に認められる。重量分布のピークが3つに分散することは、石錘が少なくとも3つに器種分化していた可能性が推定されるが、具体的な用途は不明である。ただし、報告書において県内遺跡出土の石錘などと重量の比較を行ったところ、90~100g前後の大型のものについては漁網錘とする積極的根拠に乏しく、10~30gと50~60g前後のものについては漁網錘と見なしてよいと思われる。仮に90g以上のものを漁網錘とは異なる用途に使用されたものとする、石器組成における漁網錘の比率は25%程度になる。

赤野井湾遺跡深深A調査区と並行する時期の遺跡として、大津市石山(貝塚)遺跡がある。報告書では打欠石錘4点の出土が報告されているが(文献18)、石錘が約70点報告されていることと比較すれば少なく、石器組成における石錘の位置が赤野井湾遺跡とは大きく異なる。遺跡の立地環境もしくは集落の性格の違いによるものであろうと推定される。

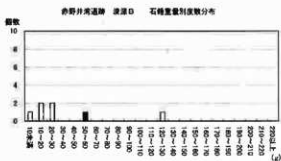
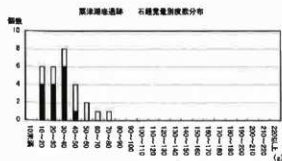
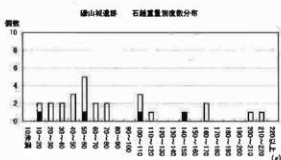
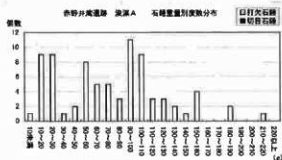
同じく早期を主体とする遺跡である米原町磯山城遺跡においては、石錘30点が報告されている(文献21)。早期から晩期までの土器が出土しており、切目石錘4点が存在する点からも、石錘の時期を早期に限定することはできないと考えられる。完形品27点の重量分布を見ると、最も多いのは50~60gのものである。石錘の出土が50点あり石器組成の中で最多(40%)であるが、石錘はそれに次ぐ位置(24%)を占めている。

遺跡名一覽

1. 鹿瀬遺跡 (浅井町)
2. 古橋遺跡 (木之本町)
3. 室・宮司遺跡 (長浜市)
4. 香の面遺跡 (山東町)
5. 磯山城遺跡 (米原町)
6. 小川原遺跡 (甲良町)
7. 今安楽寺遺跡 (能登川町)
8. 正楽寺遺跡 (能登川町)
9. 上出A遺跡 (安土町)
10. 日吉・吉住池遺跡 (八日市市)
11. 下鈎遺跡 (栗東町)
12. 靈仙寺遺跡 (栗東町)
13. 山賀遺跡 (守山市)
14. 赤野井高遺跡 (守山市)
15. 津田江潮底遺跡 (草津市)
16. 北堂遺跡 (草津市)
17. 栗津湖底遺跡 (大津市)
18. 猿谷遺跡 (大津市)
19. 石山遺跡 (大津市)
20. 滋賀里遺跡 (大津市)
21. 穴太遺跡 (大津市)
22. 正伝寺南遺跡 (新旭町)
23. 弘部野遺跡 (今津町)
24. 北仰西海道遺跡 (今津町)



第1図 滋賀県内遺跡位置図



第2図 滋賀県内遺跡出土石種重量別度数分布 (1)

続く前期の石器組成が窺える例として、栗東町下鈎遺跡を見てみたい(文献27)。前期後半の竪穴住居などが検出されており、石器では石鏃58点などの出土が報告されているのに対して、石鏃の出土は報告されていない。報文からは全体の石器組成は知り得ないが、石鏃の占める比率が極めて低いことは確実であろう。このほか、前期の良好な調査報告例はないが、下鈎遺跡にほぼ並行する時期の遺跡と考えられる草津市津田江湖底遺跡(註4)や安土町上出A遺跡(註5)においても石鏃の出土は少ない。現在滋賀県内で知られている資料による限りでは、当該時期においては石鏃の出土は極めて乏しい状況である。

大津市栗津湖底遺跡においては、前期～中期の石鏃28点が紹介されている(文献14)。石鏃のうち、前期のもの2点に対して、中期のものが26点あり、前期の2点は打欠石鏃、中期では打欠11点、切目(打欠と切目技法の併用品を含む)15点である。従米は切目石鏃の出現は中期後半と考えられていたが(文献6)、栗津湖底遺跡の資料はこれが中期初頭にまで遡ることを明らかにした。石鏃の重量分布では30～40gのものが最も多い。石器組成を見てみると、中期前半の第3貝塚出土石器の中で石鏃が占める比率は10%で、石鏃、石皿、敲石、スクレイパーに次ぐ位置を占めている(文献32)。

赤野井湾遺跡浚渫B調査区の中期(船元Ⅰ式～里木Ⅱ式が主体)の遺物包含層から出土した石鏃は7点であり、いずれも完形品である(文献34)。そのうち6点が打欠石鏃、1点が切目石鏃であり、打欠石鏃5点が30g未満である。報告書に掲載された33点の石器から剥片と未製品を除いた23点の中で、石鏃の占める比率は30%と高い。

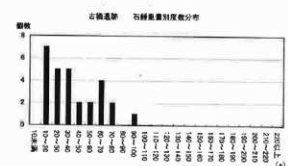
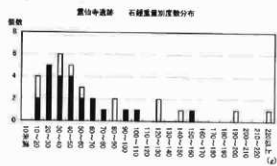
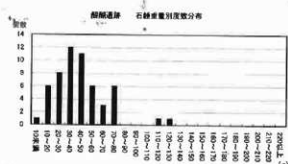
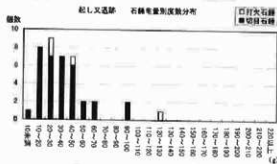
以上概観してきたように、中期中葉以前においては赤野井湾遺跡浚渫A調査区・浚渫B調査区、栗津湖底遺跡などで石鏃は一定量の出土がある。一方、前期の遺跡など石鏃の出土がほとんど認められない遺跡も存在している。前期に石鏃が減少し、中期になってやや増加するという時期の変遷を示す可能性があるが、早期の石山遺跡と赤野井湾遺跡の違いのように遺跡ごとの差異も存在するため、現在報告されている資料のみでは、石器組成における石鏃の占める位置の変遷は十分には明らかにできない。石鏃の重量は赤野井湾遺跡浚渫A調査区と磯山城遺跡の例から、早期には50～60gとやや重いものの使用が目立つようである。

3-2. 縄文時代中期後半の様相

浅井町醍醐遺跡は、中期後半の遺物と考えられる169点の石鏃の出土が報告されている(文献1)。報文によれば、石鏃は出土石器の77%と圧倒的多数を占めている。渡辺誠氏は発掘資料に他の表採資料を加えて150点の切目石鏃を報告したが(文献5)、渡辺氏の計量によると完形品55点の平均重量は43.7gである。10gごとの重量分布では30～40gのものが最も多い。

木之本町古橋遺跡は、中期後半の遺物と考えられる32点の切目石鏃の出土が渡辺氏によって紹介されている(文献5)。渡辺氏の計量によると完形品28点の平均重量は37.8gであり、10～20gのものが最も多い。なお、昭和59年度の発掘調査においても、石鏃が30数点出土したのに対して石鏃は全く出土しなかったとされるが(文献8)、詳細は報告されておらず未詳である。

栗東町霊仙寺遺跡は発掘調査報告書は刊行されていないが中期の遺跡であり、中期末の土器が最も多いとされる(文献28)。石鏃48点が出土したことが紹介されており、石鏃85点に次いで多い。

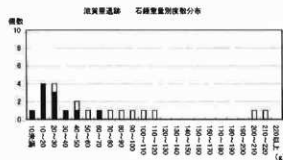
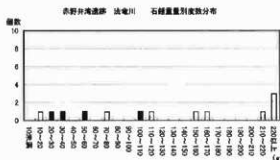
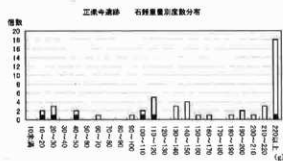
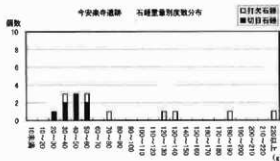


第3図 滋賀県内遺跡出土石錘重量別度数分布 (2)

また、磨石も44点と比較的多い点は、起し又遺跡との共通性として注目しておきたい。46点の石錘を実見して観察したところ(註6)、擦り切り技法を用いた切目石錘(打欠技法との併用を含む)が28点、打欠技法のみのものが18点であった。ほぼ完形の36点について計量したところ30~40gのものが最も多いが、切目石錘のみでは20~30gのものが最多である。打欠石錘には100gを超える大型のものが目立つ。

以上の3遺跡は、若干の時期差はあると考えられるものの起し又遺跡と同じ中期後半頃に盛期を持つ遺跡であり、いずれも多数の石錘を出土している。切目石錘以外の器種の様相が明らかでない古橋遺跡は別にして、起し又遺跡、醍醐遺跡、雲仙寺遺跡では石錘の大部分が切目石錘であることが確認でき、中期後半には切目石錘が滋賀県内に普及して石錘の出上点数が増える傾向が窺える。4遺跡の石錘の重量分布を比較すると、醍醐遺跡・古橋遺跡では打欠石錘についてのデータを欠くが、古橋遺跡が10~20g、醍醐遺跡・雲仙寺遺跡が30~40gにピークを示すのに対して、起し又遺跡は20~30gにピークがあり中間的な位置を占める。ただし、起し又遺跡では打欠石錘を除外して切目石錘のみを見れば10~20gのものが最多であり、古橋遺跡と並んで次節で述べる岐阜県の切目石錘の重量分布に近い例と言える。切目石錘の平均重量で見ると雲仙寺遺跡49.6g、醍醐遺跡43.7g、古橋遺跡37.8g、起し又遺跡35.5gとなり、起し又遺跡が最軽量である。なお、雲仙寺遺跡の打欠石錘の平均重量は101.1gとかなり重い。雲仙寺遺跡のみが石器組成で石錘が多いことと合わせて、湖北地域の3遺跡とは少し様相が異なっている。

湖北地域においても、山東町番の面遺跡では発掘調査されたのは竅穴住居1棟分の狭小な範囲であったが、中期後半の土器群と石錘17点などの石器が出土し、石錘は1点も出土していない(文献2)。このほか、表採資料として石錘55点もあり、既に見た中期後半の諸遺跡とは異なり、石錘が石器組成の大半を占める遺跡である。中期後半の遺跡の中で、番の面遺跡の石器組成の様相は



第4図 滋賀県内遺跡出土石錘重量別度数分布(3)

極めて異質であり評価が難しいが、丸山竜平氏は遺跡による石器組成の大きな違いを、集落ごとの季節的な分業によるものとしている(文献16)。注目すべき意見ではあるが、番の面遺跡の発掘調査はあまりに小規模なものであり、今後同様の石器組成を示す遺跡の報告例の増加を待ちたい。

3-3 縄文時代後期以降の様相

能登川町今安楽寺遺跡では、後期初めの遺物と考えられる切日石錘8点、打欠石錘7点が出土しており、合わせて石器組成の11%を占めている(文献24)。石錘はいずれも完形品であり、打欠石錘には100gを超える大型のものが多くに対して、切日石錘は40~50gのものが多く、60g未満のもののみが出土している。他の器種では磨石・凹石・蔽石の磨石類が合わせて27%あり、石皿34%とともに高率であるのが目立つ。

能登川町正楽寺遺跡では、後期前半の遺物と考えられる切目石錘6点、打欠石錘44点の出土が報告されており、合わせると石器組成の10%を占めている(文献30)。打欠石錘の重量分布は散在的であるが、200gを超える大型品が多いのが特徴である。切目石錘は出土点数が少ないため、重量分布の傾向が把握しにくい、打欠のものよりも小型品が多い。ただし、打欠石錘にも少量ながら小型品があり、切目石錘と併用していたものかと推定される。今安楽寺遺跡と同様に磨石・蔽石の合計が34%、石皿(台石を含む)が33%と高率である。

甲良町小川原遺跡では、後期前半の遺物と考えられる石錘が切目10点、打欠15点報告されている(文献26)。石器組成の中で合わせて22%とかなりの比率を占める。石錘の重量は残念ながら報告されていない。そのほかの器種では磨石類が36%と高率である。

以上の3遺跡では、石錘は石器組成の中である程度の比率は占めているものの、中期後半の遺跡に比べれば石錘の比率は明らかに減少している。一方、磨石類や石皿の占める比率が、中期の

起し又遺跡や靈仙寺遺跡に比べて、一層高くなっている。未報告資料ではあるが、同じく後期の長浜市室・宮司遺跡においても磨石・石皿などの石器が目立ち(註7)、この時期には植物性食料利用のための道具の出土が多いことが特徴のようである。ただし、以上の遺跡はいずれも湖北から湖東北部にかけての遺跡であることには注意を要する。

湖南地域における後期の遺跡については良好な報告例が乏しいが、守山市赤野井湾遺跡の法竜川調査区から出土した石器群は、概ね後期前半の遺物と見なされる(文献34)。石錘17点のうち切目石錘が5点、打欠石錘が12点であり、完形品13点の重量は非常に散在的な分布を示している。報告書に掲載された54点の石器から剥片などを除いた26点の中で石錘の占める比率は65%と高率であるが、資料数が少ないためデータとして不安がある。

一方、縄文時代後期から弥生時代中期の土器を主に出土した赤野井湾遺跡北調査区では、石器189点中で石錘は打欠のもの3点しかなく、比率は2%にとどまる(文献34)。この調査区からは石鎌が96点(51%)出土していることと比較して、石錘の出土は極めて少ないと言える。

晩期を代表する遺跡である大津市滋賀里遺跡では、報告書に21点の石錘が掲載されており、打欠のもの11点、切目のもの10点を数える(文献19)。切目石錘は10~20gのものが多く、打欠石錘の重量分布は散在的である。滋賀里遺跡からは石鎌の出土が帰属時期未詳のものを含めて1000点を超え、石器組成の61%を占める。これに対して石錘の占める比率は2.5%と低く、赤野井湾遺跡北調査区に似た様相を示す。晩期における石鎌の多出傾向は中部地方や関東地方西部においても見られ、特に中葉以降において増加が顕著であるとされるが(文献10)、滋賀里遺跡などにおける現象もこれと連動するものであろう。

これに対して、湖西地域の北部に位置する今津町北仰西海道遺跡と弘部野遺跡は後期後半から晩期にかけての遺跡であるが、石鎌の出土は比較的少なく、石錘・石匙などもほとんど見られない一方で、磨石・石皿・打製石斧などの出土量が極めて多いとされる(文献33)。ただし、中村健二氏によって数値化された北仰西海道遺跡の晩期後半のデータによれば、凹石類45%に次いで石鎌が38%を占めており(文献12)、石鎌の比率は必ずしも低くない。後期の正楽寺遺跡などの様相とは、石鎌・打製石斧の出土量など若干様相が異なる部分はあるが、植物性食料利用のための石器が多いという点では共通した様相を示している。滋賀里遺跡や赤野井湾遺跡において磨石などの出土が比較的少ない状況とは様相を異にしており、後期から晩期にかけての時期には滋賀県南部地域と北部地域では石器組成の様相に違いが見られるようである。

石錘に注目してみると、中期後半に比べて後期には石器組成の中で占める比率は明らかに低下しており、晩期になると一層少なくなっていく。また、切目石錘と打欠石錘の内訳を見てみると、中期後半に比べて打欠石錘が占める割合が高くなっており、後期になって減少したのは主として切目石錘であることが分かる。ただし、晩期には打欠石錘の出土も減少するようで、石錘の出土点数は僅少になっていく。弥生時代には石鎌の確実な出土例は滋賀県内においては明らかでなく、また土錘の出土も弥生時代には少ないことが知られている(文献9)。

3-4. 小結

3-1~3で見てきたように、滋賀県内の縄文遺跡における石鍾の出土は、起し又遺跡の盛期である中期後半頃には石器組成の中で大きな比率を占める例が多い。かつて切目石鍾の出現は中期後半のことと言われていたものが、栗津湖底遺跡の例のように中期初頃に遡ることが明らかになったが、切目石鍾が滋賀県内に広く普及する時期は現在の資料ではやはり中期後半のことであり、石鍾の出土点数が増大することと密接な関係を持っているものと考えられる。一方、その前後の時期における石鍾の出土点数は、遺跡ごとに多寡はあるものの全体の10%以下にとどまる例がほとんどで、中期後半のみが突出して多いようである。中期後半における石鍾の増加は、滋賀県における縄文時代の漁撈活動の中では、一時的でやや特異な位置を占める現象として位置づけられるべきものと言えよう。

なお、後期以降においては石鍾の中で打欠のもの占める比率が再び増加しているが、近畿地方において後期に切目石鍾から打欠石鍾への回帰が見られることは、すでに指摘されているところである(文献4)。ただし、後期以降の打欠石鍾には正楽寺遺跡例などのように切目石鍾と比べて大型のものが目立つことから、小型品が占める比率が高かった中期以前の打欠石鍾と単純には同一視できず、用途において何らかの変化があったものと推測される。

次節では滋賀県に隣接し、起し又遺跡とも距離的に近い岐阜・福井両県を中心に、近隣府県の縄文遺跡における石鍾を中心とする石器の状況について、管見に触れた範囲で見たい。

遺 跡 名 一 覧



第5図 遺跡位置図

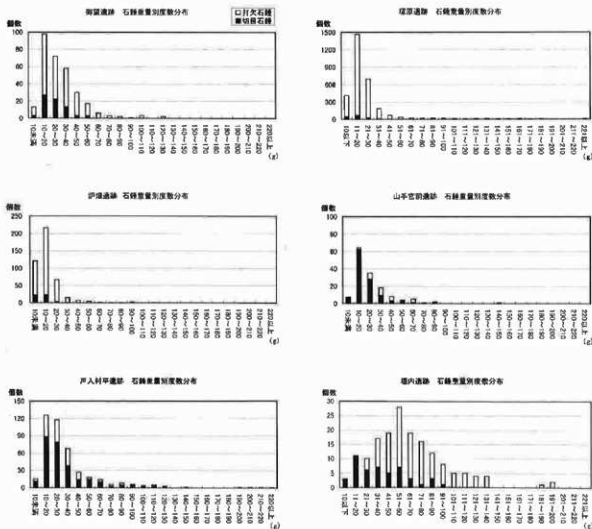
- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県 1. 起し又遺跡 (伊吹町) 2. 船塚遺跡 (浅井町) 3. 古樫遺跡 (木之本町) 4. 磯山城遺跡 (米原町) 5. 正楽寺遺跡 (能登川町) 6. 赤野井高遺跡 (守山市) 7. 栗津湖底遺跡 (大津市) 8. 滋賀里遺跡 (大津市) | <ul style="list-style-type: none"> ・岐阜県 1. 山手宮前遺跡 (藤橋村) 2. 小の原遺跡 (藤橋村) 3. 戸入村平遺跡 (藤橋村) 4. はいづめ遺跡 (藤橋村) 5. 市場遺跡 (洞戸村) 6. 池町岩陰遺跡 (美濃市) 7. 塚原遺跡 (関市) 8. 御堂遺跡 (岐阜市) 9. 芦戸遺跡 (坂祝町) 10. 伊畑遺跡 (各務原市) 11. 下島遺跡 (下呂町) 12. 垣内遺跡 (高山市) 13. 寺東遺跡 (高山市) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・福井県 1. 岩の鼻遺跡 (名田庄村) 2. 鳥浜貝塚 (三方町) 3. 上平吹遺跡 (南条町) 4. 愛宕山遺跡 (武生市) 5. 鳴鹿手島遺跡 (永平寺町) 6. 金合丸・成仏・木原町遺跡 (永平寺町) 7. 鹿谷本郷遺跡 (勝山市) 8. 古宮遺跡 (勝山市) 9. 右近次郎遺跡 (大野市) | <ul style="list-style-type: none"> ・京都府 1. 志高遺跡 (舞鶴市) 2. 有熊遺跡 (加悦町) 3. 北白川邊分町遺跡 (京都市) |

4. 近隣府県の状況

4-1. 岐阜県の状況

まずは縄文時代の遺跡の調査報告例が比較的豊富な岐阜県の状況を見てみたい。早期～前期の遺跡である藤橋村小の原遺跡では、3000点以上の多量の石器の中で石鍾は25点、0.8%と少量しか出土していない(文献43)。また、洞戸村市場遺跡(文献38)や美濃市港町岩陰遺跡(文献36)といった早期の例を見ると、石鍾の出土は認められない。

その一方で、前期後半が主体の遺跡である坂祝町芦戸遺跡(文献39)や岐阜市御望遺跡(文献46)においては多数の石鍾が出土している。芦戸遺跡では石鍾の477点(37%)に次ぐ315点(25%)の石鍾が出土している。御望遺跡では出土石器の中で石鍾が全体の39%を占め、石鍾の20%を上回っている。石鍾の重量は両遺跡ともに10～20gのものが最多である。ただし、両遺跡ともに出土土器の中に中期のものが存在しており、出土石鍾の中には御望遺跡で20%以上、芦戸遺跡でも微量の切目石鍾が含まれることと合わせて、中期の石鍾がある程度混入している可能性についての注意が必要である。



第6図 岐阜県内遺跡出土石鍾重量別度数分布

続いて中期の状況であるが、関市塚原遺跡では中期に帰属すると考えられる3000点以上の石錘が出土している(文献42)。石錘が出土石器の70%以上を占め、石鏃はわずか2%しか出土していない。石錘の95%以上が打欠石錘であるが、重量は打欠・切目ともに11~20gのものが最も多く、両者の重量は似かよっている。また、中期後半の各務原市炉畑遺跡でも石錘が出土石器の69%を占め、そのうち打欠石錘が9割近くで、重量は打欠・切目ともに10~20gのものが最も多い(文献35)。石鏃も一部は晩期のものの混入の可能性があるが6%しかなく、概ね塚原遺跡に似た様相である。

藤橋村山手宮前遺跡は早期から晩期までの各時期の土器を出土しているが、中期後半を主体とする遺跡である(文献47)。石器400点中で切目石錘181点、打欠石錘52点が合わせて58%を占める。重量は切目石錘が10~20g、打欠石錘は30~40gのものが最多である。また、中期から晩期の土器を出土している藤橋村戸入村平遺跡でも、出土石器の中で切目石錘356点、打欠石錘150点が合わせて29%を占めている(文献45)。切目石錘は10~20gのものが多く、打欠石錘は20~30gのものが最多である。この2遺跡の状況を見てみると、塚原遺跡・炉畑遺跡に比べて切目石錘が占める比率が高い。また、切目石錘と打欠石錘の重量分布に違いが認められ、両者の重量がほぼ共通する塚原遺跡・炉畑遺跡とは異なる傾向である。切目石錘と打欠石錘の重量の違いは、高山市垣内遺跡(中期中葉~後期前葉)などではさらに顕著であり、切目石錘で11~20gが最多なのに対して、打欠石錘では51~60gのものが多く(文献44)。縄文時代中期に切目石錘が増加していく過程で、打欠石錘との機能分化が進んで重量分布の差が現れてきたものと考えられる(註8)。その一方で、切目石錘の重量は前期後半の芦戸遺跡、御望遺跡出土石錘と同様に10~20gのものが主体になっている遺跡が多く、打欠石錘の大型化が進んだものである。

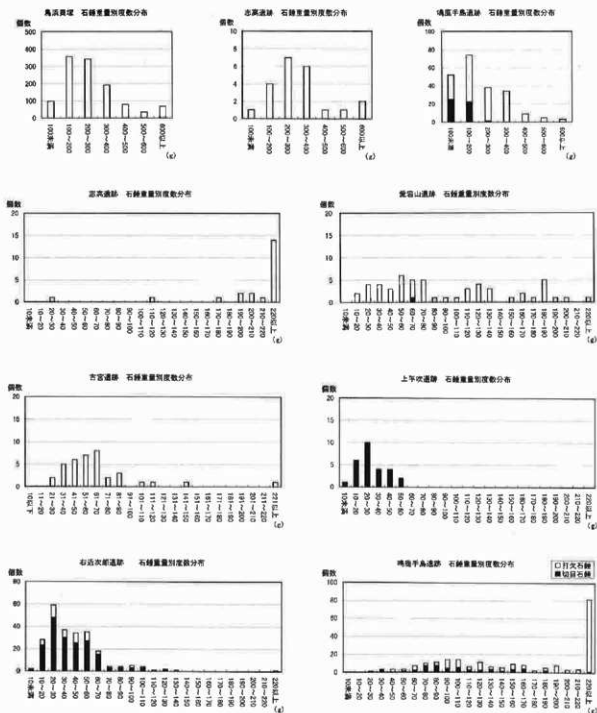
中期には石器組成の中で石錘が占める比率が高かったのに対して、後期・晩期の遺跡においては石錘の出土量は大幅に減少する。下呂町下島遺跡では1500点余りの出土石器の中で、石錘の出土は確認されていない(文献37)。また、高山市寺東遺跡では石鏃33%、打製石斧20%に対して、石錘はわずかに12点で1%の出土しかない(文献40)。晩期後半の藤橋村はいつめ遺跡でも石錘は14点で2%と少量である(文献41)。

以上の岐阜県における様相をまとめると、早期において石錘の出土が乏しい状況から一転して、前期後半以降に石錘の出土量が急増し、中期には石器組成の過半を占める遺跡が見られるなど、主要器種としての位置を占めるようになる。切目石錘は石錘の急増期にやや遅れて中期に出現するものと思われるが、打欠石錘の出土はその後も比較的多く、切目石錘と打欠石錘の機能分化が進んでいった可能性がある。そして、後期になると石錘の出土点数は急速に減少していくのである。

4-2. 福井県の状況

三方町鳥浜貝塚は縄文時代前期が主体の低湿地遺跡として著名である。出土石器について見ると、石錘の出土は草創期から前期にかけて認められる(文献53)。前期前半には石器組成の中で石錘は主要器種としての位置を占めるが、前期後半にかけて石鏃が徐々に増加すると反比例するように出土が減少しており(文献11)、両者の出土量は補完的に変動しているようである。

ところで、これらの石鍾の重量分布について見てみると、1000点以上出土している石鍾の中で100g未満のものは10%以下しかなく、100~300gの大型のものが主体になっている。京都府舞鶴市志高遺跡でもほぼ同時期である縄文時代早期~前期のものと考えられる26点の打欠石鍾が出土しているが、同様に100gを超える大型品が主体であり、200~300gのものが最も多い(文献60)。石鍾が占める比率が4%と低い点では烏浜貝塚と様相を異にするが、大型石鍾が多いという点では似た様相である。



第7図 福井県・京都府内遺跡出土石鍾重量別度数分布

武生市愛宕山遺跡では、早期後葉から中期中葉の土器を出土している(文献52)。石器では打欠石錘が70点、切目石錘が1点あり、合わせて出土石器89点中の80%近くを占めている。これに次ぐのは磨石類の12%である。石錘の完形品54点の重量分布はばらつきが大きく、10gごとの重量分布で見ると50~60gのものが最多であるが、120~130g前後と180~190gにも別のピークが観察でき、この3者は器種分化をしていたものと考えられる。

勝山市古宮遺跡では中期前半のものとは推定される打欠石錘40点が出土している(文献50)。重量分布を見ると61~70gのものが最も多い。報告されている石器148点のなかで石錘は27%を占め、磨石類の37%に次ぐ位置を占めている。

南条町上平吹遺跡は中期後半にほぼ時期が限定される遺跡であるが、出土石器121点の中で石錘が43点で36%と最多であり、磨石類が26%、石鏃が17%でこれに次いでいる(文献48)。打欠石錘の出土はなく切目石錘(有溝石錘1点を含む)のみであり、重量は20~30gのものが最も多い。

大野市右近次郎遺跡は前期から後期前半の土器を出土しており、その中で中期後半のものが主体になっている(文献51)。報告されている石器720点の中で石錘が393点で55%を占め、磨石類19%、打製石斧17%が次いで多い。石錘の中で切目石錘が298点で約4分の3を占め、残り95点が打欠石錘である。石錘の重量は、切目・打欠ともに20~30gのものが最も多く、100gを超える大型品は僅少である。

若狭地域の名田庄村岩の鼻遺跡では、中期末~後期初頭の土器を主に出土する包含層中から切目石錘125点、打欠石錘41点の合わせて166点が出土しており、出土石器の52%を占める(文献54)。磨石類が30%で石錘に次ぐ出土量である。なお、石錘の重量は報告されていない。

永平寺町鳴鹿手島遺跡は後期前半の土器を主体に出土しており、これに中期後半のものが少量混じる状況である(文献55)。出土石器1157点の中で打製石斧34%、磨石類32%、石錘21%、石皿10%などが主要な器種になっており、石錘241点の中で約4分の1が切目技法を用いたもの、残り4分の3が打欠のものである。切目石錘の平均重量は224gと極めて大きく、切目のものは80g台の平均重量である。打欠石錘でも100gを超える大型のものは少なくないが、70~90gのものが中心になっている。なお、打欠石錘についても重量10g単位で見れば90~100gのものが最も多く、小さめのものについては切目石錘に比較的近い重量分布を示している。これらのものについては製作技法に関わらず、同一の用途に使用されていたものと考えたい。

勝山市鹿谷本郷遺跡では、後期中葉~晩期初頭のものとは推定される270点の石器のうち、石錘が41点(15%)あり、打製石斧55%、磨石類23%に次いでいる(文献49)。石錘の内訳は切目3点、打欠38点で打欠のものが圧倒的に多い。石錘の重量には34~512gまでのばらつきがあるが、100gを超える大型のものが大部分を占めている。

後期を主体にする鳴鹿手島、鹿谷本郷の2遺跡については、主要器種の構成は類似しており、石錘は主要器種の一角を占めている。また、石錘の重量が100gを超える大型のものが多くても共通性が認められる。北陸地方の後・晩期の遺跡においては石錘の出土の希少性が指摘されていたが(文献3)、後期の鳴鹿手島遺跡と鹿谷本郷遺跡では中期に比べて石器組成の中での比率はやや低くなるものの、依然として主要器種の一角を占めている。ただし、大型品が多い点から推測して、中期の上平吹遺跡や右近次郎遺跡の段階とは用途において何らかの変化があったものと考え

えられる。

続く晩期には石錘の出土量は大きく減少するようであり、晩期後半の永平寺町金合丸・成仏・木原町遺跡では、石器679点の55%が打製石斧、40%が磨石であるのに対して、石錘の出土は微量である(文献56)。

以上、福井県下の主な縄文遺跡における石錘の状況について見てきたが、草創期から後期まで比較的豊富に石錘の出土が認められる。しかし、晩期には出土量が大きく減少している。

石錘の重量について見てみると、前期以前の鳥浜貝塚で大型のものが多く、中期では上平吹遺跡や右近次郎遺跡のように小型のものが主体になるが、後期になると再び大型の打欠石錘が主体になる傾向が認められる。中期における石錘の小型化の傾向は、切目石錘が出現することと対応する現象と考えられるが、古宮遺跡のように切目石錘を出土しない中期前半の遺跡でも100gを超える大型品は比較的少ない。一方、後期の鳴鹿手島遺跡では切目石錘でも70~90gとかなり重いものが中心になっており、福井県では比較的重量の重い石錘の出土例が多いことが、既述の滋賀県や岐阜県とは異なる特徴として上げられよう。

4-3. 滋賀県との比較検討

起し又遺跡から距離的に近い岐阜・福井の2県の状況を見てきたが、両県では前期以前の段階において、打欠石錘を多量に出土する遺跡が認められた。福井県鳥浜貝塚においては大型の石錘が主体になっており、京都府志高遺跡とともに日本海沿岸地域の特徴を示すものと考えたい。一方、岐阜県では中期以降のものと大きさが近似する小型軽量のものが主体であり、前期後半の段階には中期段階と同様の網漁が盛んに行われていたと推定される。この時期の滋賀県では石錘の出土例が少ないことと対照的である。

その後、中期には切目石錘が普及して石器組成の大部分を占める遺跡が多く認められる点は、岐阜・福井両県と滋賀県に共通する様相である。京都府下においても、加悦町有熊遺跡で中期前半に帰属すると推定される切目石錘76点、打欠石錘8点が報告されており(文献61)、中期末~後期前半では京都市北白川追分町遺跡の100点以上の切目石錘の報告例がある(文献57・58・59)など、当該時期の石錘の出土例が多いようである。

ただし、切目石錘と打欠石錘の出土比率は地域ごと、あるいは遺跡ごとにはばらつきが見られる。切目石錘の出現と伝播の様相について現時点で詳細に明らかにすることはできないが、岐阜県では中期においても打欠石錘が一定の比率を占める遺跡が多いのに対して、滋賀県は中期後半の段階では切目石錘の占める比率が高い傾向にある。その他、福井県上平吹遺跡や京都市北白川追分町遺跡においても、打欠石錘は認められない。切目石錘の出現と普及が石錘出土量の増大と大きく関わっていることは確かであるが、岐阜県のように必ずしも対応しない点にも注意を払う必要がある。

切目石錘の重量分布を見てみると、岐阜県では10~20gのものが多くに対して、福井県では20~30g、滋賀県では20~30gや30~40gのものが多く傾向が認められる。京都市北白川追分町遺跡では30~50g程度の切目石錘が主体であり、やや重い傾向にある。石錘の重量の違いは、漁撈活動の対象魚種や漁場の状況の違いに由来するものとして理解したい。

後期においては、福井県で石錘の出土量は比較的多いが、岐阜県では中期に比べて減少が著しい。滋賀県でも石器組成における石錘の比率が減少しており、その中で大型品の占める比率が高くなる。滋賀県における大型石錘の増加傾向は福井県ほどには顕著でないが、共通する様相として関連性が注目される。

続く晩期には、福井県においても石錘の出土量の減少が顕著であり、各県ともに石器組成における石錘の比率は僅少になっていくことが確認できる。

5. 土錘との比較

次に視点を変えて、滋賀県内の弥生時代以降の遺跡から出土している土錘と、縄文時代の石錘の比較検討を行ってみたい。土錘の主たる用途が漁網錘である点については大方の了解が得られよう。本節では土錘と石錘の重量分布を中心に検討を行いたいが、残念ながら土錘の重量が報告書に明示されている遺跡は少ないため、県内遺跡出土土錘の全体像を必ずしも正しく認識できていない点があることについて最初にことわっておきたい。また、土錘の帰属時期は明確でない場合が多いため、時期の区分をせずに弥生時代以降のもの全体を取り扱ってきたい。

守山市赤野井湾遺跡では、全調査区の合計で285点の土錘の出土が報告されている(文献34)。土錘の帰属時期は古墳時代以降が多いと思われるが、あまり明確でない。ほぼ完形と見なされる土錘220点の重量を見てみると、10gに満たない小型のものが82点で全体の37%を占めており、最も多い。中でも、5g未満の軽量のものが53点で24%と多い。このような小型軽量のものは縄文時代の石錘にはほとんど認められないものである。小型軽量の土錘は止水域での刺網漁に用いられたものとする意見がある(文献23)。本節ではこれらの軽量の土錘に着目するため、10g未満の土錘を細分して5g未満と5g以上とに分けて点数を表示したグラフを作成した。赤野井湾遺跡では10g未満の軽量のグループを除けば、ピークは不明瞭であるが20~30gのものが最も多い。

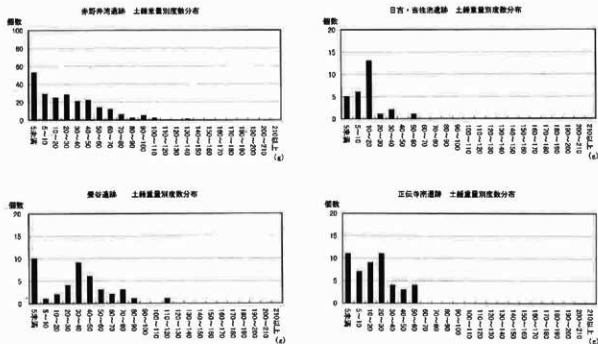
大津市壺谷遺跡からは、第1次・第2次調査合わせて土錘168点が出土している(文献25)。完形に近い42点の中で5g未満のものが10点で最も多いが、30~40gのものがこれに次ぐ。平安時代の遺構面などからの出土である。

新旭町正伝寺南遺跡では、概ね平安時代~鎌倉時代のものと考えられる92点の土錘が報告されている(文献23)。ほぼ完形のものは1.4~54.6gの重量を量り、5g未満のものと20~30gのものが11点で最多である。

草津市北萱遺跡ではコンテナ約20箱分の土錘が出土したとされるが、報告書には45点の計量値が示されているのみである(文献29)。重量70g未満のものが多く一方で、100gを超える大型のものも7点ある。

国鉄湖西線建設工事に伴う大津市穴太遺跡などの発掘調査においては、240個の土錘が出土しているが、10gに満たない小型品を除いて、大型品の平均重量は48gと報告されている(文献19)。また、穴太遺跡では大津市教育委員会による発掘調査でも10g未満の小型品と30g前後のものが報告されている(文献22)。

内陸部の遺跡では、八日市市日吉・吉住池遺跡で41点の土錘が報告されている(文献20)。1.0~57.4gのものがあるが、10~20gのものが最も多い。



第8図 滋賀県内遺跡出土土鍾重量別度数分布

そのほか土鍾の一括出土の事例として、守山市山賀遺跡の旧河道から出土した17点は、いずれも形態が類似し、重量も15g程度でまとまっている(文献23)。

以上、県内において土鍾がまとまった数量報告されている遺跡について見てきたが、これらを縄文時代の石鍾と比較してみると、土鍾には5g未満の極めて軽量のものが多く出土していることが大きな違いとして上げられる。また、石鍾と比べて100gを超えるような大型品の出土例が少ない点も指摘できる。ただし、100gを超えるものも皆無ではなく、石鍾の中で100gを超える大型品の用途について漁網鍾の可能性も否定しきれないのではないと思われる。

土鍾の中から5g未満の軽量のものを除外して考えると、日吉・吉住池遺跡で10~20g、赤野井湾遺跡・正伝寺南遺跡で20~30g、螢谷遺跡で30~40gといったばらつきはあるものの、重量分布の中心値は縄文時代の石鍾に近似するものである。石鍾と土鍾では使用された時代は異なるが、漁網鍾に適した鍾の重量はある程度一定のものであることが窺える。土鍾や石鍾が緊結されていた網の構造については、考古学的にはほとんど明らかでないが、鍾の重量が似かよっていることは網の構造にある種の共通性が存在していたことを示すものであろうか。縄文時代の石鍾と後代の土鍾との重量分布の類似性については、北陸地方においても指摘されている(文献7)。漁撈活動の対象となる魚種や漁場の状況が同一である限りにおいては、漁網の構造にも時代を超えた何らかの共通性が存在していた可能性はあろう。

6. まとめ

以上見てきたことの概略をまとめてみると、滋賀県の縄文遺跡における石鍾は中期前半までは一部の遺跡において石鍾が多く出土する場合はあるが、概ね占める比率は低い。切目石鍾は中期初頭の段階には出現していることが確認できるが、石鍾の出土量はすぐには増加せず、やや遅れ

で中期後半になって激増を見る。起し又遺跡はこの段階の典型的な遺跡である。石錘出土量の激増は、岐阜県では前期後半にすでに始まっている可能性があるなどの時期差はあるものの、近隣府県においても中期頃に広く認められる傾向であり、滋賀県独自の現象ではない。この時期の漁撈活動の実体は明らかでなく、具体的にどのような網を使って漁獲が行われていたのかは明示できないが、後世の土錘との比較において、刺網用かと考えられる小型軽量錘以外の部分については重量分布が類似することから、何らかの共通性を感じさせる。また、起し又遺跡出土石錘の重量は、滋賀県内の遺跡としては古橋遺跡と並んで軽量の部類であり、岐阜県との近似性を窺わせる状況である。

続く後期においては石錘の出土量に減少傾向が窺え、特に中期に激増した切目石錘の減少が顕著である。この時期に滋賀県では、湖北地域を中心に磨石類や石皿を多く出土する遺跡が見られ、生業活動の中で植物性食料利用のための活動が活発であったことが推定される。そして晩期には石錘の出土は各県で僅少である。

前山精明氏によれば(文献11)、全国の縄文時代中期を中心とする時期における石器の出土器種について見てみると、南西諸島を除く西日本は石鏃の多出傾向と磨石・蔽石類の乏しさを特徴とする地域(Ⅲ地域)であり、石錘の出土が多い近畿・中国・四国地域(Ⅲa)と希薄な九州地域(Ⅲb)とに細別できるとする。これに対して東日本地域は磨石・蔽石類が安定的に分布する地域として特徴づけられている(Ⅱ地域)。その中でも中部地域は最多出土器種が打製石斧である地域として細分できる(Ⅱc)とのことである。ただし、石錘が最多出土器種になる遺跡は東日本の中でも北陸地方などには点在している。

滋賀県は西日本の最東端に位置しており、前山氏が地域区分する中でもⅢaに含まれている。起し又遺跡における石錘の多出傾向は前山氏の地域区分に合致するが、磨石類の出土が比較的多いことは東日本的な特徴と言える。後期の段階において滋賀県で磨石などの出土が目立つことは既に述べたが、中期の遺跡においても霊仙寺遺跡や粟津湖底遺跡において磨石類の出土は比較的多く、すでに中期の段階において植物性食料の利用は一定の比重を占めていたことが窺える。東日本との接点に位置する滋賀県の特徴であろう。

滋賀県の縄文遺跡の分布を概観してみると、中期までは湖岸に密着した遺跡が多いのに対して、それ以降には内陸平野部の遺跡が増加しており、その要因として中期におけるトチノキのアク抜き技術の向上による食料化の一般化を想定する説がある(文献13)。前期以前の石器組成が確認できる報告例が乏しいために不安はあるが、中期以降の遺跡における磨石や石皿などの出土点数の増加は、このトチノキの食料化の成功に対応するものかもしれない。その一方で、中期後半の段階で切目石錘が普及して石錘の出土量が増大するのであるが、この現象は遺跡立地の変化に伴う生業活動の変容に対応するものであると推定される。それ以前の段階においても滋賀県内の縄文遺跡において刺網は行われていたと考えられるが、遺跡立地の変化によって切目石錘を使用するタイプの刺網が盛んになったものと考えておきたい。

ただし、切目石錘を使用した刺網の盛行は長くは続かず、滋賀県では後期の遺跡における切目石錘の出土量は中期に比べて急減する。石錘の減少傾向は近隣府県においても認められる傾向であるが、その要因については明らかでない。

7. おわりに

以上、起し又遺跡における石鍾を中心とした石器組成の位置づけについて検討を試みてきたが、筆者の力量不足から論じ残した点は少なくない。特に、遺跡の立地についての細かい検討や漁場の状況の復元などを抜きにして、石鍾の重量のみの比較に終始したため、縄文時代の網漁の具体的な姿については全く明らかにできなかった。切日石鍾が中期後半に急増し、後期には急減する要因について検討していくためには、石鍾を用いた網漁の具休像を明らかにしていくことが前提として必要であろう。今後の課題としたい。

ところで、起し又遺跡では竪穴住居5棟が検出されており、縄文時代中期から後期にかけて人々が居住していた遺跡であることは疑いないが、年間を通して定住的に生活を送っていたのか、あるいは季節的に移住して生活を送っていたのであろうか。丸山竜平氏による「季節的な分業」という考え方には注目したいが、現時点ではそれを裏付けるだけの調査報告例に乏しい。今後の調査報告例の増加を待ちたい。

末筆ながら、本稿を執筆する機会を与えていただいた伊吹町教育委員会の高橋順之氏をはじめ、資料収集にあたって便宜をはかっていただいた皆様に心より感謝いたします。

註

- (註1) 起し又遺跡出土石鍾の重量について、本稿では筆者が独自に計量した数値に基づいて記述を行っているため、報文とは数値の計量誤差がある。
- (註2) 本稿では、磨石・凹石・敲石を総称して磨石類と呼ぶ。これらの石器は破片で出土した際には識別が困難な場合が多く、一部の報告書ではこれらを区分せずに磨石類として出土点数が示されている場合があるためである。
- (註3) 本稿で石器組成の比率について記述する場合には、原則的には剥片(U.F.とR.F.を含む)、石核、未製品を除いて、製品の点数を分母としている。報告書からの引用にあたっては、可能な範囲でこの原則に基づいて再計算を行っている。
- (註4) 昭和61・62年度に滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し、筆者が発掘調査を担当した(文献15)。
- (註5) 平成8年度に滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した(文献17)。出土石器の様相については、調査担当者の鈴木康二氏にご教示を受けた。
- (註6) 栗東歴史民俗博物館に保管されている遺物を、同館学芸員が発掘調査担当者でもある松村浩氏のご厚意で実見、計量させていただいた。
- (註7) 平成7年度に滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した(文献31)。出土石器の様相については、調査担当者の重田勉氏にご教示を受けた。
- (註8) 切目石鍾と打欠石鍾の重量の違いについては、素材となる礫の大きさによる製作技法の使い分けである可能性も想定できるが、本稿では両者に機能差があるものと考えておきたい。

文献

・論文等

1. 小江慶雄「滋賀県根間遺跡発見の石製遺物」『京都学芸大学 学報A』第3号 1953年
2. 小江慶雄「滋賀県番の面縄文式住居遺跡」『京都学芸大学 学報A』第9号 1956年
3. 高塚晦喜「北陸」『日本の考古学』II 河出書房 1965年
4. 岡田茂弘「近畿」『日本の考古学』II 河出書房 1965年
5. 渡辺 誠「滋賀県における縄文時代の網漁法について」『滋賀文化財研究所月報』11 滋賀文化財研究所 1969年
6. 渡辺 誠『縄文時代の漁業』雄山閣出版 1973年
7. 山本直人「北陸地方の漁網跡」『季刊考古学』第25号 雄山閣出版 1988年
8. 丸山竜平「近江湖南の縄文遺跡群素描－縄文文化の三つの面相をめぐって－」『立命館文学』105号 1990年
9. 大沼芳幸「田んぼが魚を呼び寄せた!?－土鍾よりみた近江弥生漁業の特性－」『紀要』第4号
◎滋賀県文化財保護協会 1990年
10. 鈴木道之助『図録・石器入門事典（縄文）』柏書房 1991年
11. 前山精明「縄文時代の石器」『季刊考古学』第35号 雄山閣出版 1991年
12. 中村健二「泉境の遺跡」『滋賀文化財だより』No. 184 ◎滋賀県文化財保護協会 1993年
13. 瀬山真司「近江湖南の縄文時代－2つの疑問点を考える－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994年
14. 瀬山真司「大津市栗津湖底遺跡出土の鍾」『紀要』第9号 ◎滋賀県文化財保護協会 1996年
15. 田井中洋介「草津市津田江湖底遺跡出土の特異な石器について」『滋賀考古』第16号 滋賀考古学研究会 1996年
16. 丸山竜平「伊吹山麓の縄文社会とその解体」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会 1997年
17. 鈴木康二「上出A遺跡について－蛇砂川地区の調査－」『滋賀考古』第18号 滋賀考古学研究会 1997年

・報告書類（滋賀県）

18. 「石山貝塚概説」『研究論集』第一号 平安学園教育研究会 1956年
19. 「湖西線関係遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会 1973年
20. 「日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書」滋賀県教育委員会・八日市市教育委員会・◎滋賀県文化財保護協会 1984年
21. 『磯山城遺跡』米原町教育委員会 1986年
22. 『穴太遺跡（弥生町地区）発掘調査報告書』大津市教育委員会 1989年
23. 『正伝寺南遺跡』滋賀県教育委員会・◎滋賀県文化財保護協会 1990年
24. 『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第17集』能登川町教育委員会 1990年
25. 『強谷遺跡・石山遺跡』滋賀県教育委員会・◎滋賀県文化財保護協会 1992年
26. 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X X - 3』滋賀県教育委員会・◎滋賀県文化財保護協会 1993年
27. 『栗東町埋蔵文化財調査 1991年度 年報II』◎栗東町文化体育振興事業団 1993年
28. 『栗東の歴史』第4巻 資料編I 栗東町 1994年
29. 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・◎滋賀県文化財保護協会 1994年
30. 『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第40集』能登川町教育委員会 1996年

31. 『レトロ・レトロの展覧会1996』 岐阜県文化財保護協会 1996年
32. 『栗津湖底遺跡第3貝塚(栗津湖底遺跡1)』 滋賀県教育委員会・岐阜県文化財保護協会 1997年
33. 『今津町史』 第一巻 古代・中世 今津町 1997年
34. 『赤野井溝遺跡』 滋賀県教育委員会・岐阜県文化財保護協会 1998年

・報告書類(岐阜県)

35. 『好畑遺跡発掘報告書』 各務原市教育委員会 1973年
36. 『港町岩除遺跡発掘調査報告書』 美濃市教育委員会 1979年
37. 『下島遺跡発掘調査報告書』 下呂町教育委員会 1985年
38. 『市場遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 洞戸村教育委員会 1987年
39. 『戸戸遺跡』 坂祝町教育委員会・岐阜県・建設省 1988年
40. 『寺東遺跡・西保木(対岸)遺跡発掘調査報告書』 高山市教育委員会 1988年
41. 『はいづめ遺跡』 岐阜県教育委員会 1989年
42. 『塚原遺跡・塚原古墳群』 関市教育委員会 1989年
43. 『小の原遺跡・戸入降子墓遺跡』 岐阜県教育委員会 1991年
44. 『堀内遺跡発掘調査報告書』 高山市教育委員会 1991年
45. 『戸入村平遺跡』 岐阜県文化財保護センター 1994年
46. 『御堂遺跡』 岐阜市教育委員会 1995年
47. 『山手宮前遺跡』 岐阜県文化財保護センター 1997年

・報告書類(福井県)

48. 『北陸自動車道関係遺跡調査報告書 第12集』 福井県教育委員会 1977年
49. 『鹿谷本郷遺跡』 勝山市教育委員会 1977年
50. 『古宮遺跡発掘調査報告書』 勝山市教育委員会 1978年
51. 『右近次郎遺跡Ⅱ』 大野市教育委員会 1985年
52. 『愛宕山遺跡群Ⅰ』 武生市教育委員会 1987年
53. 『鳥浜貝塚—1980～1985年度調査のまとめ—』 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館 1987年
54. 『岩の鼻遺跡Ⅱ』 1986年度調査概報』 福井県立若狭歴史民俗資料館 1987年
55. 『鳴鹿手島遺跡』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1988年
56. 『金合丸・成仏・木原町遺跡』 永平寺町教育委員会 1994年

・報告書類(京都府)

57. 中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』 1974年
58. 中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要(2)』 1975年
59. 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』 京都大学埋蔵文化財研究センター 1985年
60. 『京都府遺跡調査報告書 第12冊』 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
61. 『立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第3冊』 立命館大学文学部 1991年

圖 版

起し又遺跡遠景
(北より)



起し又遺跡遠景
(南より)
中央の重機付近が調査区



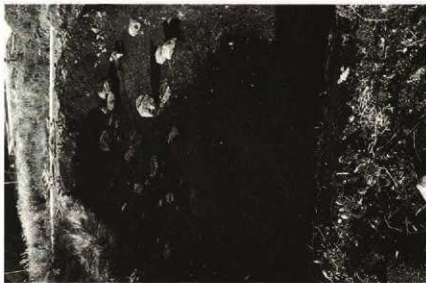
調査前



作業風景



トレンチ 2 完掘状況
(南より)



1号住居跡
(北より)



1号住居跡炉跡



2号住居跡
(南より)



3号住居跡
(南より)



3号住居跡炉跡



4号住居跡
(北より)



5号住居跡
(南より)



埋設土器 (SX1)



埋設土器 (SX2)



SX2



埋設土器 (SX3)



埋設土器 (SX4)



埋設土器 (SX5)



埋設土器 (SX6)
配石



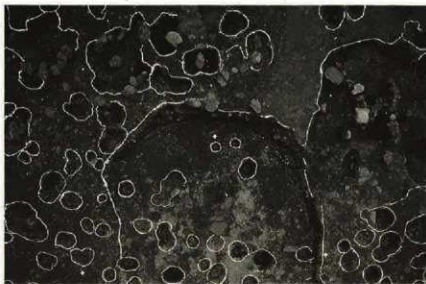
埋設土器 (SX6)
検出状況



埋設土器 (SX6)
土器取り上げ後



配石遺構とSH1



配石遺構 1



配石遺構 2 (立石)



配石遺構 3



配石遺構 4



土器出土状況
(P22)



土器出土状況
(SH2)



石斧出土状況
(SH1)



石鏃出土状況





279(SX6)



252(SX3)



279(SX5)



259(SX4)



226(SX1)



227(SX2)



278(SX5)



635



678



660



647



653



673



324



505



331

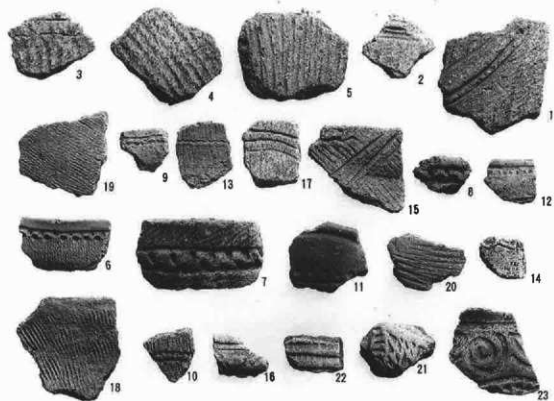
P49出土土器

SK17出土土器

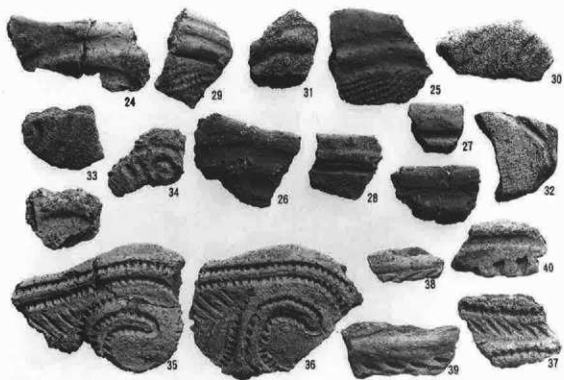


718

山茶碗



SH1出土土器 (1)



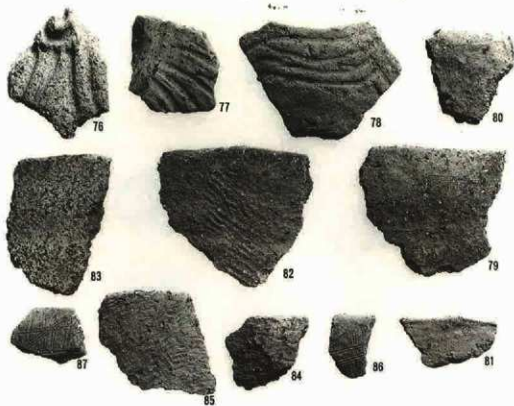
SH1出土土器 (2)



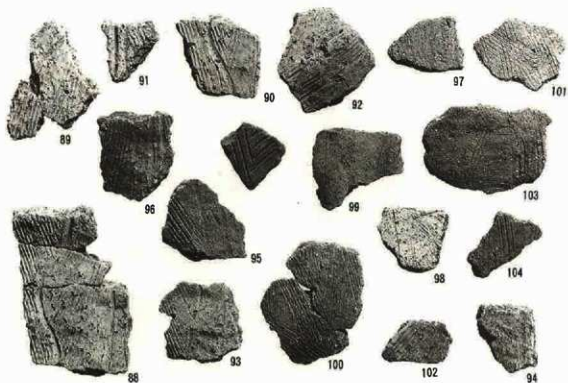
SH1出土土器 (3)



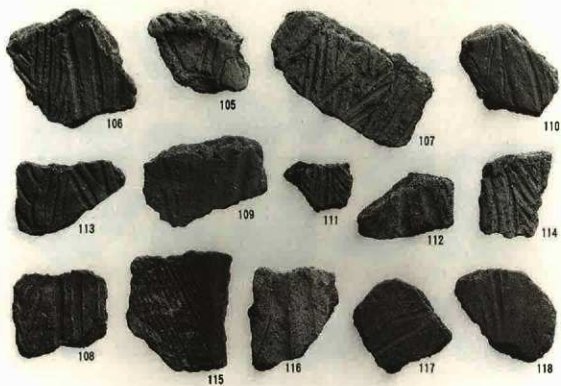
SH1出土土器 (4)



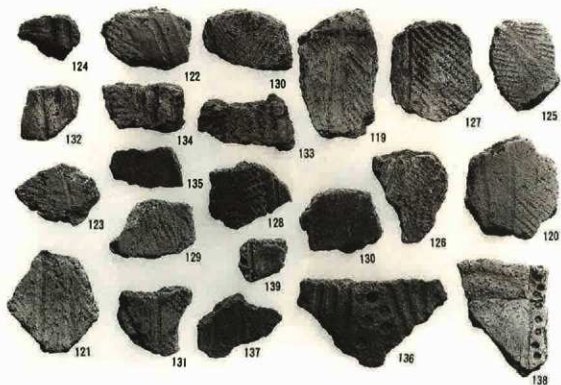
SH1 出土土器 (5)



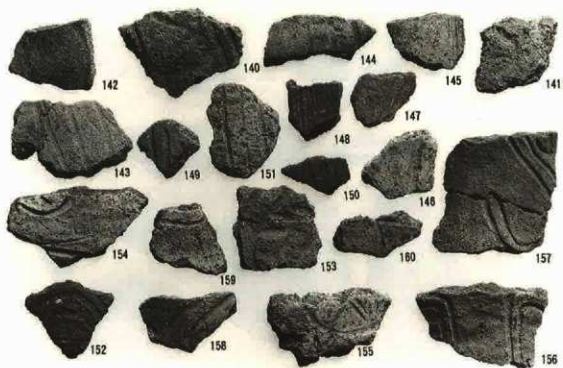
SH1 出土土器 (6)



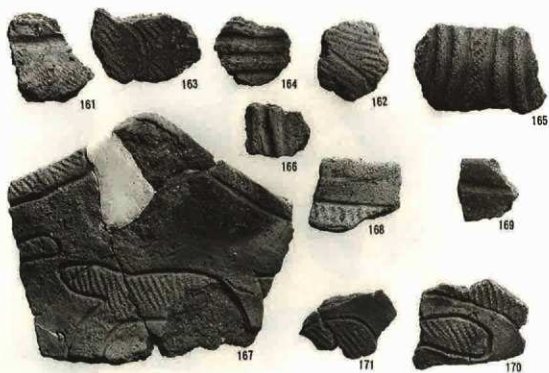
SH1 出土土器 (7)



SH1 出土土器 (8)



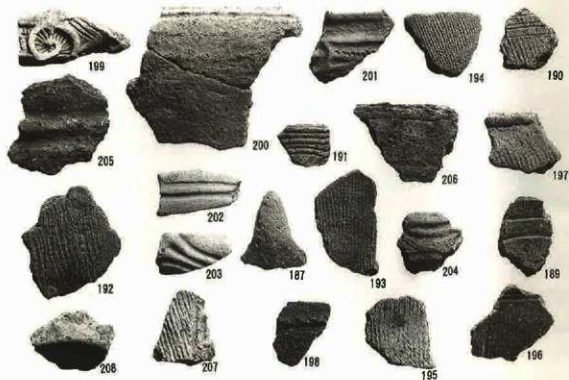
SH1 出土土器 (9)



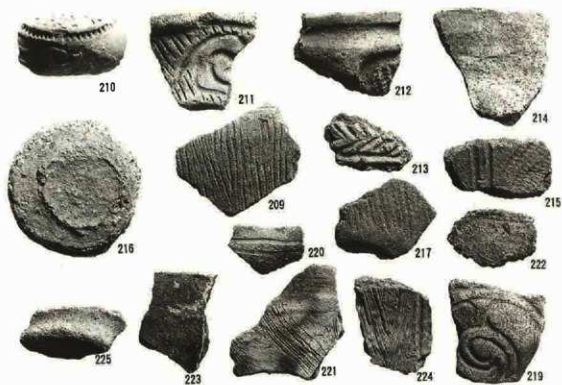
SH1 出土土器 (10)



SH2 出土土器



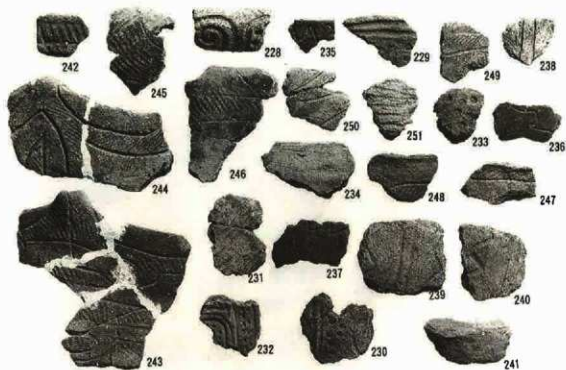
SH3 出土土器



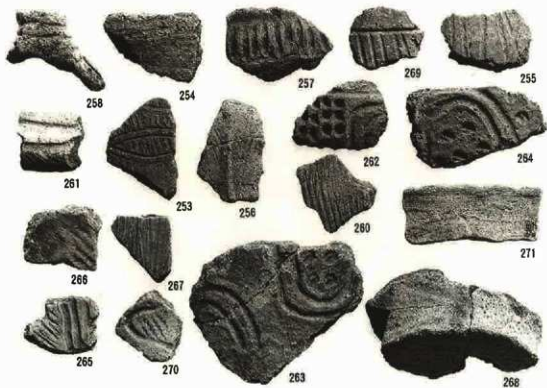
SH4、SH5 出土石器



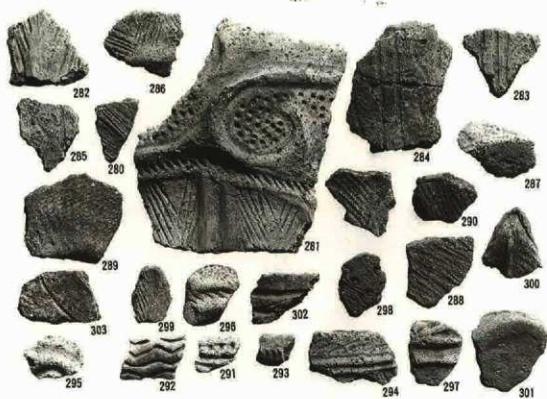
SX1 出土石器



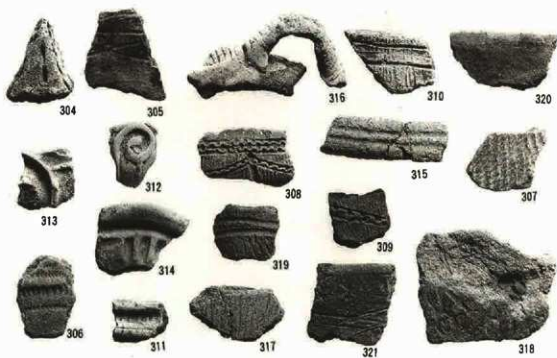
SX2 出土土器



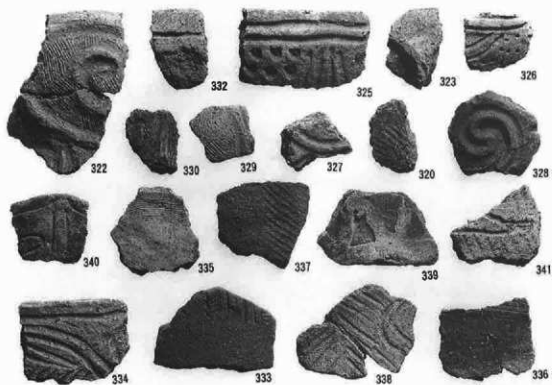
SX3、SX4 出土土器



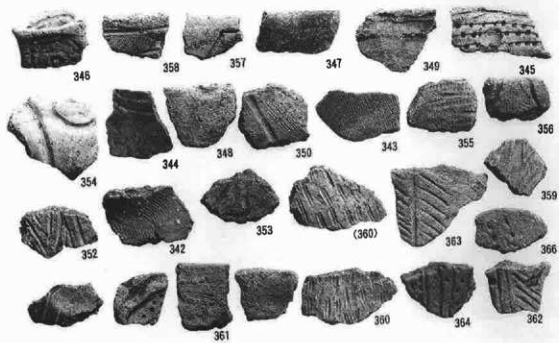
SK1、SK2出土土器



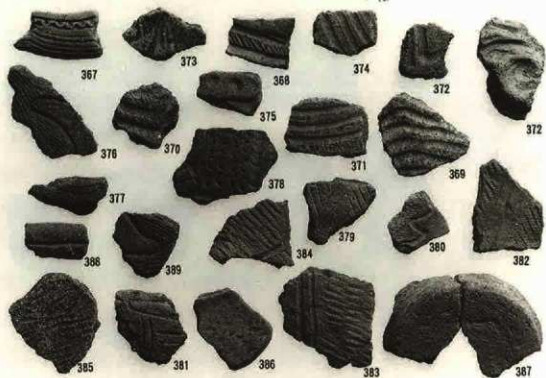
SK4、5、SK8、9出土土器



SK17、18出土土器



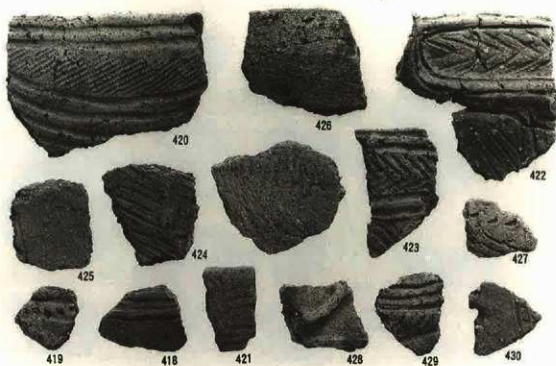
SK19~23出土土器



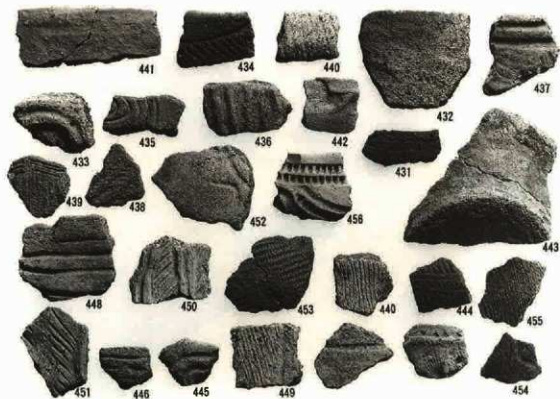
SK24~26、SK28出土土器



SK29~31出土土器



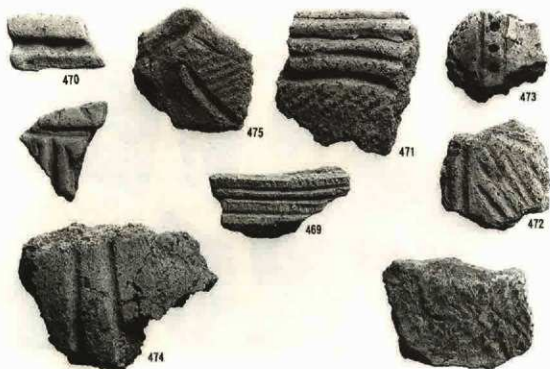
SK32、33出土土器



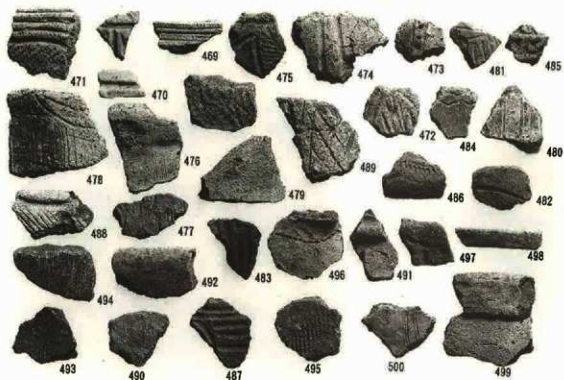
P1~10、14~17出土土器



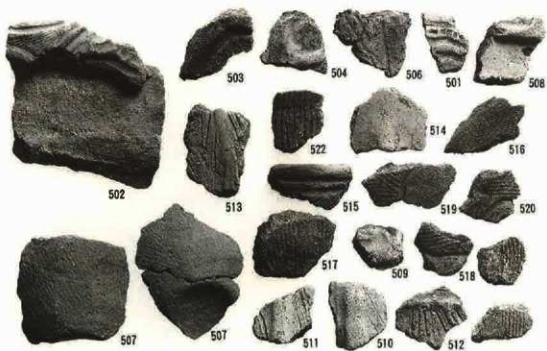
P20、22出土土器



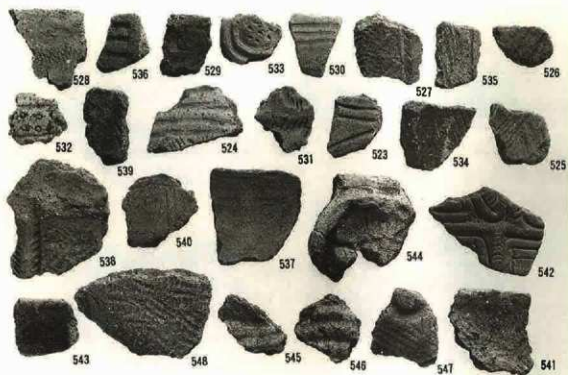
P24出土土器



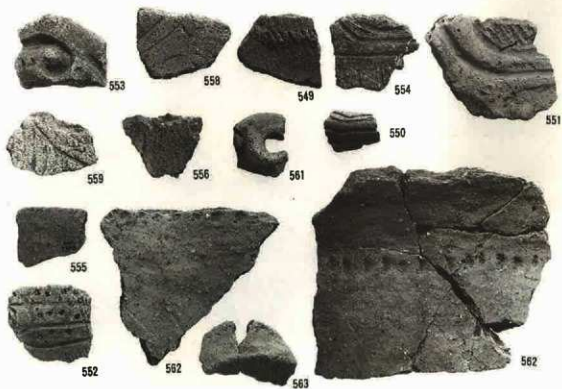
P25~47 出土土器



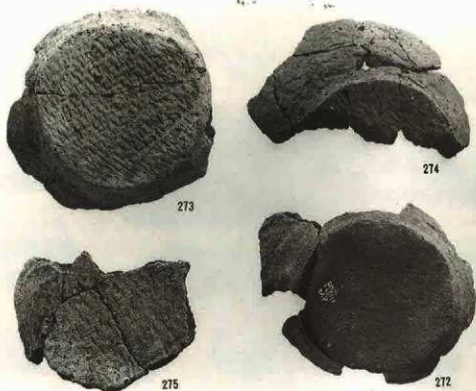
P49~52 出土土器



P54~59 出土土器



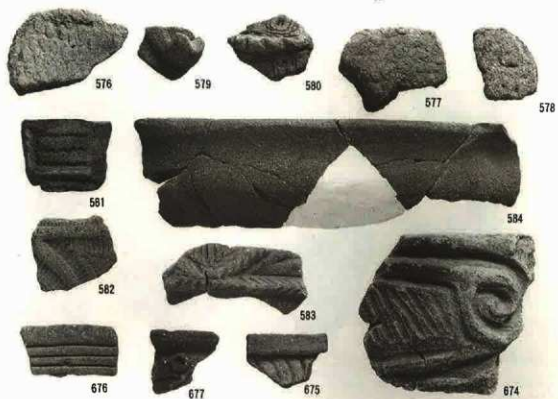
P60、62 出土土器



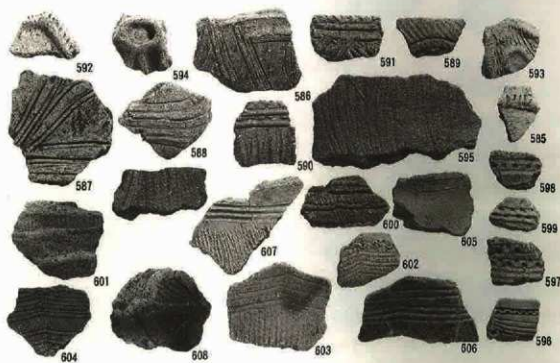
SH1 出土器底部



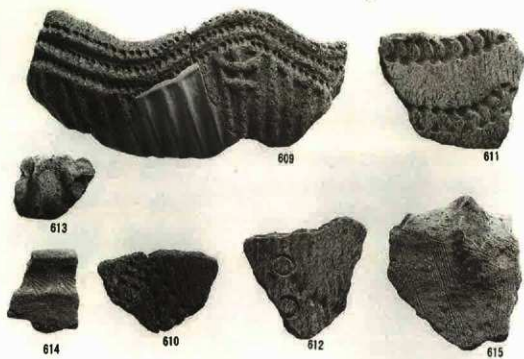
出土器



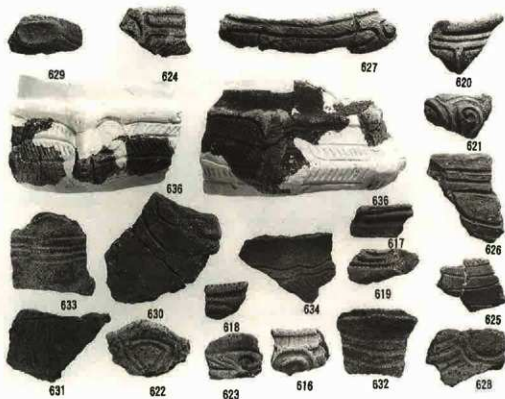
包含層出土土器



包含層出土土器



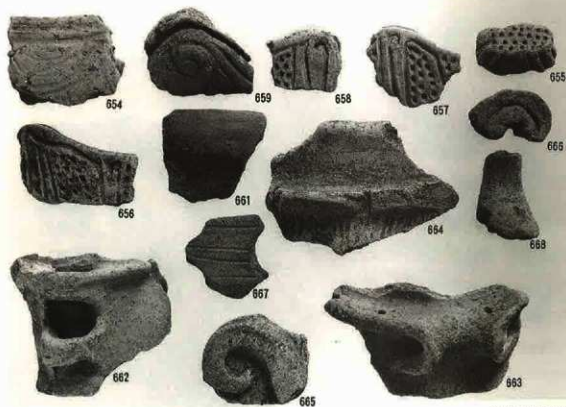
包含層出土土器



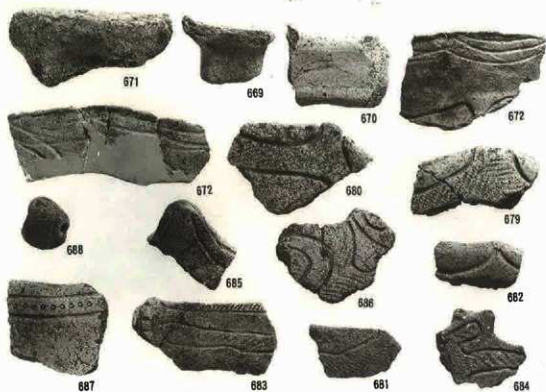
包含層出土土器



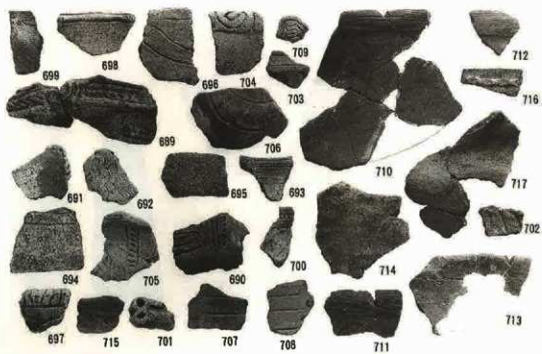
包含層出土土器



包含層出土土器



包含層出土土器



包含層出土土器

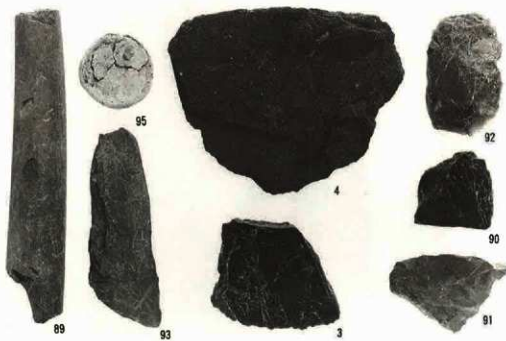


2

石匙



石鏃



89

95

93

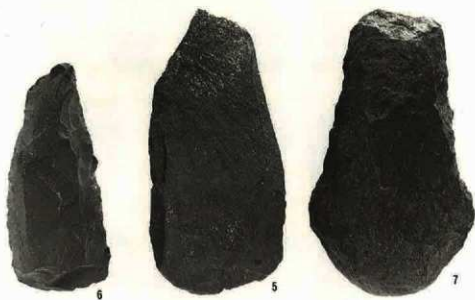
4

92

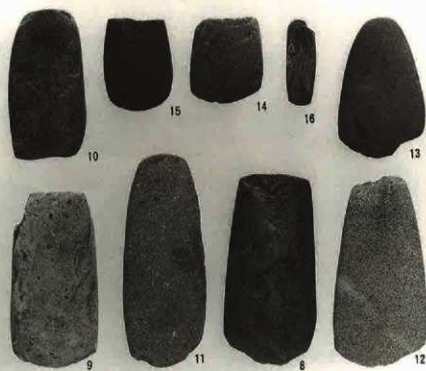
90

91

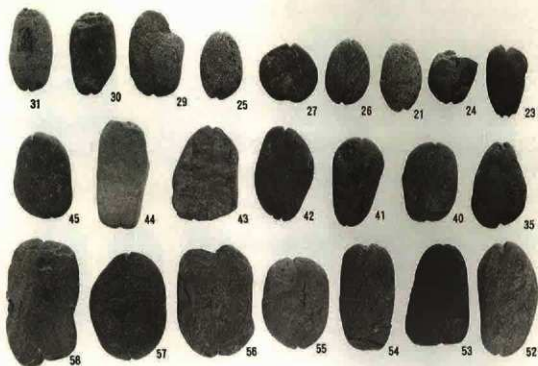
3



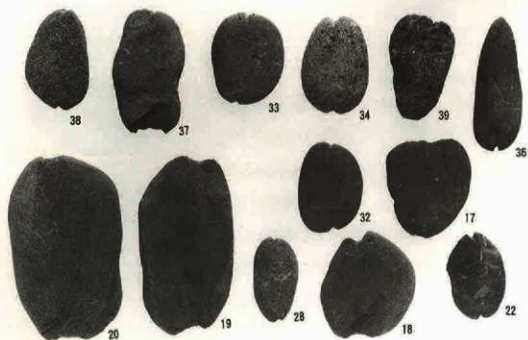
打製石斧



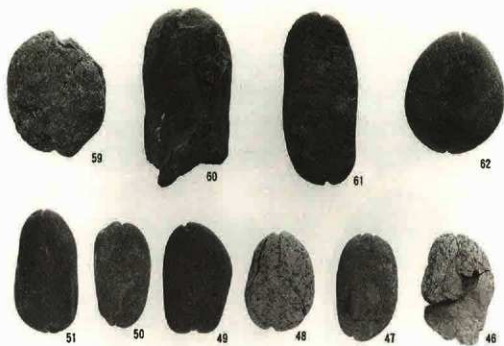
磨製石斧



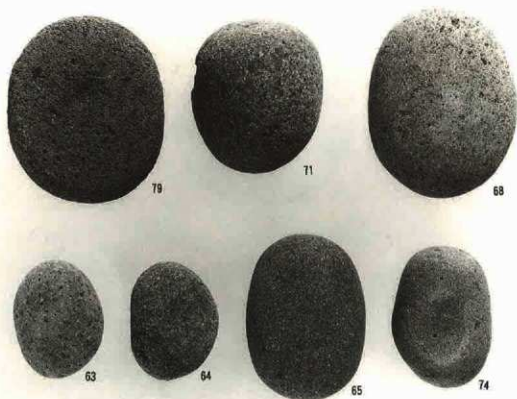
石鏟 (1)



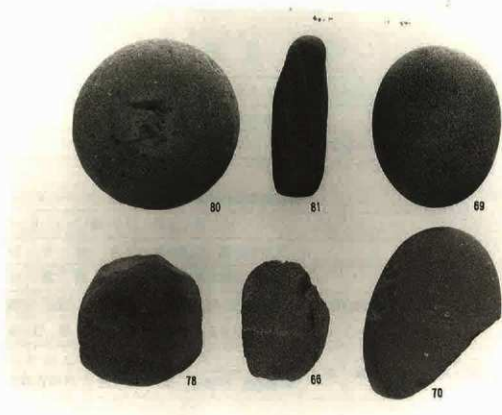
石鏟 (2)



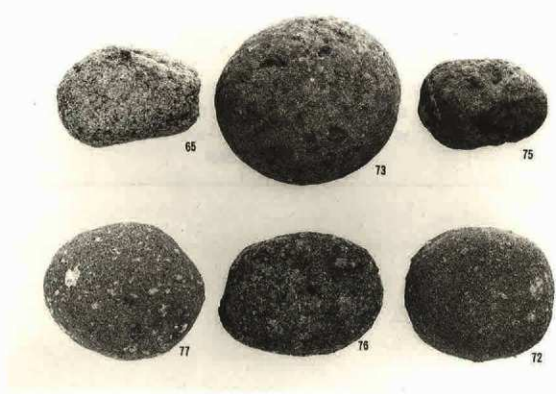
石鏢 (3)



石器



石器



石器

報 告 書 抄 録

| ふりがな | おこしまたいせきはくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|---------------------|---|-------------------------|----------------------------|-------------------|--------------------|---|-----------|-------------------|
| 書名 | 起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ | | | | | | | |
| 副書名 | 姉川上流縄文早期・中期～晩期遺跡の調査 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 伊吹町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第11集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 高橋順之・田井中洋介 | | | | | | | |
| 編集機関 | 伊吹町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照37 ⅡL0749-58-1121 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1998年3月 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コ ー ド | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| おこしまたいせきはく 起し又遺跡 | ししがけんさかたぐん 滋賀県坂田郡 いぶきちょうまがたに 伊吹町曲谷 | 254622 | 50 | 35度 28分 32秒 | 136度 21分 40秒 | 19941018～ 19941201 19950524～ 19950803 19960516～ 19960718 | 837.5 | ほ場整備 に伴う調 査 |
| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | | 主 な 遺 物 | | 特 記 事 項 | |
| 起し又遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 早期 中期～ 晩期 | 竪穴住居 5棟 埋設土器 6基 配石遺構 | | 縄文土器 石器 山茶碗 | | | |

あ と が き

起し又遺跡の調査は、街に住む人々たちからみると、すこしばかり人里離れた山の中でおこないました。地元の人たちの手で発掘をしたいと、曲谷のおじさん・おばさんと、試行錯誤しながらの調査でした。

話はわかりますが、ここ曲谷をはじめ東草野地区は、文芸の里でもあります。調査の休憩時間、世間話に興じていたはずの作業員さんの短歌を紹介します。

こんな思いで、調査してくださっていたのですね。作業員のみなさん、ありがとうございます。 (作業員さんのお名前は例言に記しました。)

表 地 ふみえ

縄文の歴史をさぐる起し又
四千年土に埋もれし住居跡 発掘土器にしばしば感動
真夏日に汗と土とにまみれつつ 今日無心に遺跡発掘
小鳥啼き四季の花咲く起し又 縄文時代の遺跡眠れる
深々と掘りたる遺跡に玉の汗 一つ二つと落ちて光れる
形とてあるやなきやの土器なれど その一と片にふれる喜び
縄文の遺跡説明現地にて 集う諸人眼光りて
縄文のロマン夢現地にて 発掘作業振り返りつつ

世 シズカ

起し又縄文の史を探ぐらんと 今年も遺跡掘りて調べる
起し又土器出る度に胸さわぎ 縄文人の暮らし憶はる
緑濃き山の囲まる起し又 土器の模様は歎声あがる
夏天下発掘作業に汗しほり しばしの憩い番茶香はし
起し又青紫縫い来る風涼し 今 泡赤しく遺跡探して
出土した土器や石器に先人の 生活の知恵に深く感銘
起し又此の地に住みし縄文人 水の流れば今も変わらず

伊吹町文化財調査報告書第11集 起し又遺跡発掘調査報告書II

1998年 3月

編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会
印刷 垂井日之出印刷

